SUPER LUCKY # 4

澤群　キョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＵＰＥＲ　ＬＵＣＫＹ　＃　４

【Ｎコード】
Ｎ７７９８Ｓ

【作者名】
澤群　キョウ

【あらすじ】
諫山（いさやま）　想（そう）、高校１年生。
人生なんて虚しい。だけど終わりにするほどの情熱もなくて、ただ仕方なく生きてる。
そんな少年の前に突然現れた四谷（よつや）　司（つかさ）。彼は選ばれた者の願いをすべて叶える存在「超幸運」なのだという。
「なんでもあり」な力を手に入れた少年の人生は一体どう変わるの

か――。

SUPER LUCKY#4／BLACK Case：A－27

「諫山　想の場合」

００１　・　少年、諫山　想について

夕暮れの光が差し込む教室、自分の席にじっと座り、少年はただひたすら遠くを見ていた。

空に浮かぶ雲はほとんどなく、薄くなった水色と橙の混じったおかしなカラーに変わっていく窓の枠の中。

面白くも寂しくもない、なんでもない風景に目を向けたまま、彼の口からため息がひとつ漏れ出る。

もう帰らなくてはならない。

仕方なく立ち上がり階段を降りて下駄箱へ向かうと、何人かの男子生徒が立っている。

「イサ、今帰りか？」

声をかけられたというのにロクな返事もしないで、イサと呼ばれた少年――諫山（いさやま）　想（そう）は、脱いだ上履きを自分のスペースに突っ込むとかかとの潰れたスニーカーをポイと下に投げ、何の表情も感じられない顔でそれに足を入れた。

「おい、無視すんなよ」

「いつものことだろ、ほっとけよそんなヤツ」

クラスメイトたちは会話をそこで切り上げると、さっさと校門へ向かって集団で歩いていってしまった。

少年はそれを黙ったまま見送り、しばしそこに立ち尽くす。

あの集団に追いつくのが嫌だったからだ。

たっぷり十分程経ってから、想は歩き出した。

他に行く場所がないから、彼は家に帰る。

その家にも、想には喜びがなかった。

帰れば誰もいない家で一人で食事をし、シャワーを浴びて汗を流し、ちょっとインターネットにつないでなんとなくどうでもいい情報を取り込んで、後は眠るだけだ。

父と母も帰宅してくるが、彼らに話すことなど何もなく、わざわざ「おかえりなさい」なんて声をかけにいく気もない。両親のどちらも、どうしても必要なこと以外に話をしたい相手ではないから。

家につけば、自分で鍵を開けて中に入る。誰もいない静かな部屋。制服から着替え、ソファに座ってリモコンを取り上げる。

夕方のニュースでは、今日も日本のあちこちで起きた陰惨な事件や、政治家の無能ぶりを取り上げ、それが済めば急に祭りのような雰囲気でどうでもいいタレントのどうでもいいスキャンダルを垂れ流しにしている。その後はお決まりの、巷で噂のグルメとやらの話だ。

どの局にまわしても同じような構成でやっているニュースが終わって、少年は立ち上がった。

本日の夕食は、レンジで温めるタイプのパスタ。それに、野菜のサラダがついている。

コンビニエンスストアで買ってきた弁当に貼られたシールには、原材料に加えてわけのわからない単語がぞろぞろと並んでいる。

しかしそれはもう、当たり前だ。そしてなんだかわからないものでも味はいい。仕事のない日に母親が張り切って作る食事なんかよりずっとマシだった。愛情なんてロクでもないものが入ってない分、いい。

シールに書かれた温める時間の目安どおりに電子レンジを動かして、薄暗い食卓で一人、想は食事を済ませた。野菜のサラダは気に入らないので半分以上残している。あとで母が文句を言ってくるだろうが、そんなのは関係ない。野菜さえ食べれば体にいいなんて本

気で思っているのか、小言を並べる顔を見ながら少年はいつも考える。それが母と息子の唯一のコミュニケーションで、黙って文句を言われるのが野菜サラダを出された日の「こどもの義務」だった。

自分の部屋のパソコンを立ち上げ、右手で気になるトピックを選び、ぼんやりと画面を見つめ続ける。そのうちに母が、その後に父が帰ってきたようだが、どうでもいい。

いつも見ている情報のまとめサイトにも今日は特に面白いものはなく、少年はベッドに体を投げ出した。

父と母が必死になって返している住宅ローンのおかげで与えられている自分の部屋。

たいして広くもない３ＬＤＫのマンションの中の、六畳弱の洋室。じっと目を閉じると、遠くから虫の鳴く声が聞こえてくる。だけどそれも、想にとってはただの音でしかない。

どうしてこんなに何にも思わなくなってしまったのか……。

少し前までは考えていたはずなのに。

今ではもう、少年の中にそんな疑問は残っていない。

朝起きれば、身支度を整えて学校へと向かう。

他に行く場所がないからだ。そして、学校へ行かなければ両親がうるさい。

単純にそれが嫌なので、想はだらだらと高校への道を歩いた。

「おい、イサ！」

昨日の帰りにも声をかけてきた、仲島（なかしま）　廉（れん）の声が教室内に響く。

「イサ、聞こえてるんだろ？　返事くらいしろよ」

「なんだよ」

少年は仲島が苦手だった。目立つのが好きで、何かというと声を

かけてちょっかいを出してくる。
仲島は誰にでも声をかけ、くだらない自分の話を聞かせては反応を得るのが趣味だった。
自分で自分のことを面白いと勘違いしている、迷惑なヤツ。
しつこいほどの語り掛けにクラスの誰もが仕方なく笑顔を浮かべたりなんとなく褒めたりする中、想だけが無反応なことが不満らしく、最近では一日に数回必ず話しかけられるようになっていた。
「昨日のアレ、見たか？　クラブ・スマイラーズ」
「見てない」
最近人気だというコント番組の名前だということは知っているが、大して面白くはない。一度だけ放送を見て、少年はそう判断していた。
「なんだよ、見てないの？　面白いのに。お前くらいだよ、見てないのは。なあ！」
仲島は大げさな動きで級友達におどけた笑顔で問いかけている。それに、何人かがああ、みたいに曖昧に頷き、自称クラスの人気者は満足そうにうんうんと頷いている。
「面白かったんだぜ。なんだっけ、そうだ、ケンジとユカのコントがさ」
昨日の夜の放送で仲島的に一番面白かったというコントの再現が始まる。もちろん、劣化コピーが本家を超えることなどなく、痛々しさ以外に感じるものなどない。
想のからっぽの視線に気がついて、仲島は口の動きを止めた。そして大きく舌打ちをすると、少年にこう言い放った。
「お前、何が楽しくて生きてるの？」
――本当だな。
想がふっと笑ったのを見て、仲島は気持ち悪そうに顔を歪めると

自分の席に戻っていった。

諫山　想。

県立録戸（ろくと）高校の一年生。十六歳になったばかり。

勉学にも、スポーツにも興味がない。打ち込んでいる趣味もない。

ただひたすら時を無駄に浪費しているだけの、無気力な少年。

どうしてこんなに何にも興味がないのか、どうしてこんなに人生を虚しく感じているのか、本人にもわからない。

事情を知っている人間なら、「愛情不足」と言うだろう。

幼い頃からずっと、彼は一人だった。両親は育児よりも仕事を優先させ、それぞれ個人の人生の方に重きを置いている。その代償に、息子がからっぽになってしまった。

しかし、少年はそんなことは思っていない。

両親の期待に添えないのは申し訳ないが、どうにもやる気が起きないのだから仕方がない。

自分はもう諦めたのだから、両親にも諦めてもらうしかない。それくらいにしか思っていない。

そして人生は虚しくて、これから先の未来に関してもなんの希望をもっていないが、たとえば自ら命を絶とうとか、もうやめようとか、そういうことも考えてはいなかった。そこまでの情熱が、彼にはない。だから、ただ、生きているのだ。

――何が楽しくて生きてるの、か。

クラスメイトから投げかけられた辛辣な言葉が頭の中に残って、想は少しだけ脳を働かせた。

――楽しくなきゃ生きてたらいけないのか。

そんなことはないはずだ。国民の誰もが、生きる権利を保障されている。楽しくなかろうが、幸せじゃなかろうが、ただのうんこ製造マシーンと化していようが、生きていていいはずだ。

――くだらない。

自分の思考に顔を歪め、想はため息をついた。

彼は知っている。このまま、ただ生きていくのは難しい。

今は学生という身分に守られている。それほど熱心に勉学に打ち込まずにいても、なんとか潜り込める場所があった。しかしこれからはそうはいかない。いつまでも学生ではいられない。養ってくれる親が永遠にいるわけではない。

その先を想像するのは、やはり面倒なことだった。

しかしうかうかしていれば、その時はきっとすぐに来る。

決断の瞬間。人生をどうするのか、立ち上がって決めなくてはいけない、その時。

その時が来るのが怖い。想の中にひとつだけある強い感情がこれだ。

億劫さと、恐怖。時折この二つは戦いをはじめ、少年の心を震わせてはいつも引き分けで勝負を終える。

少年は思わず、窓の外を見つめた。秋の気配が漂う景色。太陽が出て明るいが、どこか寂しげな光。

「……」

夏の間、容赦なく照りつける日差しを疎ましく思っていたが、九月に入ってからは秋になったんだからとコロリと態度を変え、とた

んに弱々しくなった太陽に少しガッカリした気分になる。暑い日差しにはエネルギーが満ちていた。それを、季節が変わったんだからと弱める根性なしになんとなく腹が立って、想は呟いた。

「もうちょっと頑張れよ」

ふっと、影が落ちる。

視線をまっすぐ前に戻すと、すぐ目の前に誰かわからないが男子生徒が立っていた。授業中だというのに、堂々と。その非常識な生徒が誰なのか、少年は顔をあげて確認した。

言葉を交わしたことのない級友、名前は確か……、四谷（よつや）　司（つかさ）。

「おめでとう。君は選ばれた」

世界は突然、暗闇に包まれた。

００２　・　超幸運が叶える願いに適用されるルールについて

教室にいたはずだった。

一時間目の古文の授業が始まっていて、特に熱心に聞いていなかったが、クソババアと生徒達が堂々と呼んでいる平河教諭の間延びした声が響いていたはずだった。

しかし今、世界は暗闇に包まれている。

異常事態に思わず立ち上がってしまった想と、目の前にいる四谷司以外の何もない。

きょろきょろとあたりを見回し、上も下もひたすら真っ黒の世界を確認してから、少年は仕方なく目の前の級友に話しかけた。

「何だこれ」

「当選のお知らせだ。諫山　想、本日君に超幸運がもたらされた。おめでとう」

――超幸運？

両方の眉の間に思いっきり皺を寄せて、想は四谷のことをじろりと睨んだ。

「何言ってんだお前？」

「真実を述べただけだ。私は超幸運。所定のキーワードを決められた条件で言うことによって得られる、地球から人類への贈り物だ」

――危ないヤツなんだろうか。

想はこの四谷　司という男のことをまったく知らなかった。

色白の肌に、切れ長の瞳。サラサラとした髪が肩までまっすぐに

伸びていて、どこか影のある、見た目は良いが近寄りがたい雰囲気の少年だ。これは今、必要にかられてじっくりと見て得た感想で、今まではそういう名前のヤツがクラスにいる程度のことしか知らなかった。

「危ない奴ではない。私が述べるのはすべて真実だ。お前は所定のキーワードを決められた条件で言った」

「所定のキーワード？」

「『ちょっと頑張れ』だ」

――意味がわからない。その程度の言葉なら、そこらじゅうで言われているだろうに。

「このキーワードを、聞こえるか聞こえないかくらいの小さな声で、かつ私の耳に聞こえるように言う。それが今回の当選の条件だった」

「大丈夫か、お前」

「危ない奴ではないと言っている。私がただ単に頭がおかしいだけの人間だったとしたら、この暗闇はなんだと思う？」

確かにそこだけは説明がつかないところだった。

――たとえば自分が突然死んでしまえばこんなシチュエーションもあるかもしれない。

想は考えた。だが、死後の世界なんてものを持ち出すのと、目の前の男の言葉を信じること。それはどちらも同じくらいにどうしようもなく胡散臭い。

「死んだ後には何もないぞ。ただ、終わるだけだ」

四谷の言葉に、少年は眉をひそめた。

――さっきから、考えていることへの返答が続いている？

「わかってくれたようだな。では、説明をしよう。超幸運について」

想は顔をしかめて少し考えたが、このままでは埒があかない気がして、おとなしく「説明」を聞くことに決めた。

「超幸運は、当選した人間の願いをすべて叶える。これから先、諫山　想が望み、私に伝えた願いはすべて叶えられる」

「すべて？」

「すべてだ」

「例えば寿命が半分になるとか、そういう悪いことはないわけ？」

「当選した者は大抵そういった代償が必要ではないかと考えるようだが、その心配はいらない。望みはすべて叶う。代償はなく、期限もない。人生が終わるその時まで、この私、超幸運との契約は続く」

――夢でも見てるのかもしれないな。

「夢ではない。現実だ。説明には少々時間がかかるので、こうして人の邪魔が入らないところにきている」

「……ここってどこ？」

「どこ、という表現はできない。特別な時間を過ごしてもらっている」

――わかんねえ。考えるだけ、無駄かも？

「その通り。考えても理解はできない。さて、願いを叶えるにはルールがあるのでそちらを覚えてもらおう」

「ルール？」

「そうだ。代償はいらないが、願いを叶えるにはルールがあるので、それを守ってもらわないとならない」

――じゃあ、すべてっていうのはウソじゃないか。

「そうだな。言い直そう。ルールに乗っ取った願いはすべて叶えられる。ではルールを教えよう」

四谷は何の表情もなく話し続けていた。その顔はまるで生気が感じられず、じっと見つめているとなんとなく、人間ではない何かのように感じられるような気がしないでもない。

「まず一つ目だが、物理的に不可能なことはできない」

「どういう意味？」

「瞬間移動しろとか、空を飛びたいとか、そういうことはできない」

――早速ロマンがねえ！

そんな願望を持ったことなどないくせに、想は心の中でこんな悪態をついた。

「もう一つ、人間の記憶の改竄、もしくは心理の勝手な操作はできない」

「どういう意味？　具体的に」

「昨日までお前を忌み嫌っていた相手を、今日から無条件に愛するようにすることはできない」

「ふうん。それだけ？」

――物理的に不可能なことと他人の心を操ることはできない、か。

「そうだ」

想は首を少し傾け、頭の中でシミュレーションを始めた。

例えば、大金が欲しいと願えばそれは叶うのか？

「叶うぞ。その場合、いくらなのか、そしていつまでにいるのかという指定が必要になる」
「お前さ、勝手に頭の中で考えてる事に答えるのはやめてくれないか？」
「ならば口に出した質問だけに答えることにしよう」
――人の心の中が本当に見えるってことなのか……。
こう考えて想はちらりと四谷に目をやったが、今度はじっと黙ったまま微動だにしない。
「金額の指定とか、いつまでにいるとか全部考えないといけないの？」
「そうだ。たとえば、一億円欲しいとお前が言ったとしよう。その場合、期限がなくてもいいならば私は地道にお前以外の誰かが困ることのない金を集めることになり、十五年程時間をかけることになる」
「なんだそれ。地道にってなんだよ。意外だわ。銀行とかから持って来いよ」
「銀行から金を動かせば、大事件になる。一円だってなくなれば大騒ぎになる場所だ。われわれは超幸運の当選者のために力を貸すが、それ以外の人間に大きな不幸を負わせることはしない」
確かにどこかから一億円もの大金が一気に消えれば、大事件になることは必至だろう。
「じゃあ、そこらじゅうの人の財布から十円ずつくらい持って来るとかそういうことをするわけ？」
「そうだ。財布からは取らないが、落ちている硬貨などを集めていく」
札束が落ちていることはおそらく稀なので、もし一億円分硬貨を集められたら……と考えて想はため息をついた。

「そして一つの願いを叶えている間は、次の願いを叶えることはできない。もし望みが叶うまでに時間がかかる場合は、待ってもらうことになる」

――細かい。案外細かい。

少年は少し考え、顔をぷいっと横にそむけて眉間に皺を寄せた。

それ以前に、このくだらなく非現実的な話を信じるのかどうか。確かにこの真っ黒な空間は現実のものとは思えないが、「超幸運」だなんてトンデモ話を信じていいのかがわからない。

「もう契約は始まっている。手始めに、簡単な願いを言ってみればこれが現実だとわかるだろう」

「勝手に答えるなって言わなかったか？」

「これは提案だ。誰もが最初は信じない。今のお前、諫山　想のように」

「人のことといちいちフルネームで呼ぶのはやめろ」

「その願いをかなえよう。では、どう呼ぶのか決めてくれ」

――げっ。

「これって願いが叶う扱い？　どういう処理されんの？」

「今のこの瞬間以降、諫山　想のことを本人が希望するとおりの呼び名で呼ぶ」

――普通！　かつ、大げさ！

「じゃあイサでいいよ。ついでにそのおかしな口調はやめてくれ。普通に頼む」

「これが私の普通だ、イサ」

「もっとくだけろよ」
「今はイサと呼ぶ願いを叶えている最中だ。もう一つの願いを並行して叶えることはできない」
「何？　じゃあ、イサって呼ばれている間はもう願いは叶わないってことか？」
「そうだ」
「じゃあやめやめ！　キャンセルって自由？」
「もちろん。やめるのか？」
「当たり前だ！　くだらねえ、お前からあだ名もどきで呼ばれるだけのために俺、何やってんだよって話になるだろ？」
「まったくだ」

――結局何の証明にもなってねーじゃねーか。

しかし、何か手軽で、超幸運とやらが本当なのか証明できる願いは思いつかない。

少年は両手を腰に当てたポーズでふうっとため息をつくと、自分の足を見つめたままこう話した。
「もういいよ。この訳のわからない空間から早く出してくれ」
「わかった。ここは最初の説明のために私が勝手にお前を連れてきた場所だ。ここから戻ることは、願いには含まれない」

――当たり前だっ！

気がつくと、想は自分の席にいつも通りだらんと座っていた。
クソババアののんびりとした声が教室内に響いて、多くの生徒にあくびをさせている。

キョロキョロと視線を動かし、斜め右方向、少し前にその姿を確

認した。

――あいつが、本当に、俺の願いをすべて叶える？

長いサラサラとした髪が流れて、その横顔を半分隠している。四谷　司、超幸運と名乗る男。

――わからない。

少年は一時間目の授業を教科書も開きもせずに、ずっと、じっと、半信半疑のまま過ごした。

００３　・　超幸運との契約解除の方法と一つ目の願い

すべての授業がつつがなく終わり、教室からは次々と生徒達が出て行く。
アルバイトに向かう者、部活動に向かう者、はたまた遊びに繰り出す者。

彼らは去り、教室には少年が一人残る。それが高校生活が始まってから今までの放課後の常だった。しかし、今日はもう一人残っている者がいる。
四谷　司はおもむろに自分の席から立ち上がると、じっと動かない想の元へゆっくりと歩いてきた。
「諫山　想。契約の解除について話さなくてはならない」
「……？」

――死ぬまで続くと言っていたのに。

ちらりと青白い顔を見るが、四谷は黙っている。
「解除できるんだ」
「解除の方法は二つある。一つは契約者がその命を終えた場合」
「死んだら終わりってことね」
「そうだ。そしてもう一つ。他人にわれわれについて語った場合に契約は終了される」
「他人に語った場合？」
「そうだ。超幸運について誰かに話した瞬間、事前にも事後にも確認はなく契約は終了し、われわれは次の当選のための条件を設定しそれを満たした者と契約する」
「へえ」

誰もいない教室で、自分の席に座る想とその前に立つ四谷が向かい合っている。

こんな話をわざわざしにくるということは、やはり先ほどの真っ黒い空間でのやりとりは夢ではなかったようだ。四谷が本当に願いを叶える力を持っているのかはわからないが、彼と「契約」した事になっているのは確からしい。

今日初めて話した級友がどこまで本気なのか、どこまで真実を話しているのか想像がつかず、少年は少し困った声でこう切り出した。

「今までその、超幸運とかいうのに選ばれた奴って、どんな願いを叶えたわけ？」

「それは答えられない。われわれは、契約者に対して願いの提案をすることは許されないからだ。契約者の自由な意思を奪う可能性のある行為は禁止されている」

「あっそ」

――どうしたらこの話が本当だって、すぐに証明できるだろう？

そのためのヒントをもらおうと思って聞いたのに、えらくお堅い答えが返ってきて想は口をへの字にして窓の外を睨んだ。

九月の昼下がり、空はまだ明るい。ほんの少し冷たくなってきた風は校舎横に植えられた木々の葉を揺らし、部活動に励む若者たちの体に優しく吹き付けている。青春に満ちた光景が広がる校庭から野球部のあげる大声が響いて教室まで届き、それは少年にとってたまらなくうざったい。

「あいつらを黙らせるっていうのは？」

「それはできない。他人の心理の操作は無効であり、人間が高みを目指して行っている肉体的・精神的活動を無意味に邪魔することも許されない」

――ダメか。

頬杖をついて少年は再び考え、思いついた疑問を口にした。

「たとえば他人の邪魔をするとして、それがその相手にとっていいことだったら許されるわけ？」

「その場合叶えることは可能だ。ただしそれに加えて、それが諫山想、お前のためになる場合のみ願いとして有効になる」

――なるほど。

「じゃあ、たとえば仲島、わかるか？　クラスで一番ウザイ男の仲島」

「仲島　廉だな」

「あいつがベラベラしゃべってるのをやめさせてくれよ」

「お前の願いを叶えよう。この願いは今から八分後に叶えられることになる」

――マジか。

一体何が起こるというのか。少年は実に何年かぶりの高揚を心に小さく感じながらその時をじっと待った。

あいかわらず想は自分の席に着き、四谷はその少し前に立っている。

二人の間に会話がないまま時が過ぎ、どこへ行っていたのかは不明だが仲島とその友人が四人、連れ立って教室へと戻ってきた。

「あれ、イサじゃん。お前いっつもいるんだな。でも今日は一人じゃなくて、二人？　とうとうお友達ができたわけ？」

いつもいじる対象として絡まずにはいられないクラスメイトが残っていたことに喜び、その前にもう一人誰かがいるという新しいシ

チュエーションにもっと喜びながら仲島がゆっくりと想の元へ近づいていく。残りの三人の仲間も、少し離れてついてくる。

「お前、四谷だっけ。なんでこいつなんかと一緒にいるの？　全然面白くないだろ、イサなんかといてもさ」

仲島は想と四谷の二人の顔へ順番に視線を移し、三往復したところでいつもいじっている無口な少年ではない方で固定させるとニヤリと笑顔を浮かべた。

「四谷って案外、顔がイケてんだな。あれだ、芸能人でいうと俳優の三隅（みすみ）　キヨハルに似てる。クールだし、長髪だし。あれ？　なんか部活って入ってたっけ」

「……」

「なんでイサと一緒にいんの？　なあ、今からカラオケ行くけど一緒にいかねえ？　お前と一緒だったら女の子がひっかかりそう。なあ、そうだよなあ！」

仲島が勢いよく振り返ると、仲間の三人はうんうんと頷いている。

「四谷ってなんて呼んだらいい？　ヨッツン？　ヨッツンはクラブスマイラーズ観てんの？　俺あれに出てるクラッカアンドサイダーが好きでさあ！」

クラッカアンドサイダーは今売り出し中の若手の芸人二人組で、クラブスマイラーズというコント番組の出演者の中では断トツに出番が多い。仲島は話しているうちにテンションがあがってしまったのか、番組中で一番人気のシリーズである、「キラリと光る刑事たち」の劣化コピーを始めてしまった。

「警部！　ここはアンパンです！　アンパンを食べて落ち着きましょうあっ！？」

クラッカアンドサイダーのツッコミの方、倉敷（くらしき）が演じる刑事のセリフを上機嫌で叫び終わったところで仲島は悲鳴をあげて倒れた。

四谷が思いっきり、左太ももに蹴りを入れたからだ。
「何すんだよ！　痛えだろうがっ！？」

「お前はつまらない。お前の言ってることもつまらないし、お前の芸人の物まねは更につまらない。誰も笑わないし、笑いたくない。お前がしつこいから仕方なく付き合いで笑っていることにそろそろ気づいて自称人気者はもう卒業しろ」

冷静な顔から出てきた冷酷なセリフに仲島は目を丸くして震えている。

その仲間たちは少し離れたところで黙っていたが、しばらくして一人がぶーっと思いっきり噴出した。
「なんだよ……、なに笑ってるんだよ小久保（こくぼ）……」
仲島の声は震えている。目には涙をいっぱいためて、床についた手をガクガクさせている。
「お前もそう思ってたわけ？」
「いや、そんなことねえよ」
答える小久保は半笑いの状態だ。セリフにまったく説得力がなく、その態度に打ちのめされて仲島は次の友人に救いを求めた。
「窪山（くぼやま）は？　もしかしてお前もそう思ってたわけ？」
「いやいや！　全然、ぜーんぜん！」
「あうっ」
残る一人、奥掘（おくぼり）には聞くまでもなかった。ここまでのやりとりに笑いをこらえきれず、腹を押さえてブルブルと震えている。

「お前らなんか友達じゃねえよーっ！！！」

仲島は立ち上がって教室から走り去ろうとしたが、蹴られた足が痛んだのか入り口付近で激しく転び、床にべったりとうつぶせになったまま大きな声で泣き始めてしまった。

さすがに良心が咎めたのか三人の友人たちはそばに駆け寄り、お前は面白いよ、大丈夫だよ、などという何の慰めにもなっていない言葉を半笑いの状態でかけながら可哀相な仲島を立たせている。

しばらく廊下には悲しげな嗚咽が響いた。

それが遠くへ去っていって、とうとう、聞こえなくなる。

「なんだよ今のは」

「これから先、仲島　廉はもうベラベラと余計なことを話さない。明日の朝まで仲島は今までの自分を大いに反省し、諫山　想を不愉快な気分にさせることもなくなった。彼の人生は今までよりも良い方向へと向かう」

「へえ」

「諫山　想の一つ目の願いは叶えられた」

澄ました顔でしれっと言う四谷に、想は思わずふんっと笑った。

「ホントかよ？」

「われわれは嘘をつかない。契約者には真実のみを述べる」

明日にならなければ四谷の言葉が真実かどうかはわからない。

しかし、あまりにも痛快な制裁に想は本当に久しぶりにおかしな気持ちになって、静かな教室でしばらくの間笑った。

００４　・　超幸運との契約後の日常生活について

いつもと違い、少しだけ愉快な気分で想は家への道のりを歩いた。
しかし、いつもと違うのは気分だけではない。さすがに家の前で立ち止まり、振り返る。

「お前、なんでついてくるの？」
「われわれは契約者の願いをいつでも聞き入れるために基本的に近くにいて備えなくてはならない」
「どういう意味？　俺の家にでも住むつもりか？」
「それを決めるための話し合いが必要だ。契約した場合、どこで備えるかは諫山　想、契約者であるお前に決める権利がある」
想は眉間に皺を寄せて嫌そうな顔で四谷を見た。四谷はシリアスな表情のまま微動だにしない。
「そういうの最初に言うべきじゃないの？」
「ルール説明のときに話すはずだったが、諫山　想があの空間から出るのを望んだので後回しになった」

――こいつがただの危ないヤツだったらどうする？

たとえばこの続きをどこかでしようということになったとして、家に招いたら？
そんなことを考えて想はしばらく赤くなってきた空を眺めた。

――まあいいか。取られて困る物もないし、別に殺されたって何の未練もない。

考えてみればそれに尽きた。何かに情熱を持っているわけでもなく、人生に執着もない。例えば部屋に入れるなり自分が命を奪われ

たとして、両親へ危害を加えるとかそういうことがあったとしても気にはならない。なにせ、自分が死んだ後のことなのだから、生きている間よりもずっと「どうでもいい」はずだ。少年はそう考えるとふっと笑った。

「わかった。来いよ。話し合いとやらをしようぜ」
マンションのエントランスに入り、オートロックのドアを開ける。
こうして想は、実に何年かぶりに誰かと家に入った。

「なんか飲む？」
「結構だ」
その答えに遠慮なく自分の分だけ飲み物を用意して、想はドカっとベッドに腰を下ろした。
四谷はその横にまっすぐ立っている。
「座れば？」
「了承した」
床の上にピタっと正座をし、四谷は口を開いた。
「われわれは契約者の願いをできるだけ素早く叶えなくてはならない。いつでも声が届く場所にいればそれが可能だ」
「だからってみんな知らないヤツを家に置かないだろ？　今までにそんなバカなヤツがいたのかよ」
「いた。だが、すべての者がそうではない」
「いたのかよ。家族がいたら驚かれるだろうしどう考えても不審者だろ？」
冷蔵庫から取り出したペットボトルのふたを開け、想は喉を潤した。そしてちょっと考える。
「お前は人間じゃないんだよな？　どこか普段は異次元に潜んでるとか、そういう裏技みたいなのはないわけ？」
「確かに私自体は人間ではないが、この肉体はごく普通の人間のものだ。この体は地球の物理的法則に従わなくてはならないので、私

が他の空間に移動するとこの体のみが残り諫山　想はおそらくとても困ることになる」

――何言ってんだ？

「どういう意味かよくわからない」

「この体は人間のものを借りている。契約者を見つけるために、人間にまぎれて生活をするためだ」

「じゃあ借りられている、お前、本当の四谷君は今どこにいんの？」

「四谷　司は私が設定した単なる仮の名称だ。この肉体の持ち主は死んでこの世にはいない」

「……ああ、そう」

――じゃあ死体が動いてんのかな……。

改めて想はじっと四谷（仮）を見つめた。確かに顔色は青く、黙っている間は微動だにしない。

「ちなみにどこで見つけたの？」

「それを契約者に話すことはできない。われわれは契約者を危険に巻き込むおそれのある話をすることは許されていない」

「あのさ、なんかいっつも『われわれ』っていうけど。中に何人いるの？」

「一つだけだ。『われわれ』という言葉が使われるのは『超幸運』についての説明がなされる場合で、その理由は地球上には五つの『超幸運』が存在するからだ」

「へえ」

――設定がしっかりしてんだな。

そんなことを考えて、想はちょっと感心しながら四谷を見た。相

変わらずの無表情は、やはりまったく動かない。少し気になったので胸のあたりを見てみたが、制服に包まれた体の呼吸の有無ははっきりとはわからなかった。

「じゃあ他にも超幸運とやらの契約者がいるってこと？」
「今現在契約しているのは諫山　想の他にはいない」
「五ついるって言ったじゃんか」
「当選の条件を満たすものが現れないからだ。その間、われわれは人間にそのチャンスを与えるために地球の各地にそっと紛れ込んでいる」
「四谷はなんでうちの高校にいたの？」
「われわれは当選者が現れない場合一年毎に居場所を変える。前回の場所で当選する者がいなかったので、今回はこの地域の学生およびその周辺の者へ機会を与えるために録戸高校一年Ａ組の生徒になっている」
「一年ごと？」
「仮の体をいつまでも使うことはできない。一般的な人間の目には不自然にうつるし、不慮の事故に備えて体を一年で入れ替えることになっている」
「じゃあいつか四谷じゃなくなる日がくるってこと？」
「その通りだ。毎年二月十七日をもって体は交換される。その日は契約者には申し訳ないが、願いをかなえることはできなくなる」

――なるほど。超幸運とやらにも定休日があるんだな。

この設定はなんとなくおかしくて、想はふんと笑った。
「仮の体ってどうやって見つけるんだよ。死体なんかそこらへんにゴロゴロしてないだろ？　この日本でさ」
「そこらへんにゴロゴロしてはいないし、そこらへんにゴロゴロしているものは使わない。われわれが使う体は、一定の条件を満たし

たものだけだ」
「どんなだよ」
「積極的な他人からの捜索を受けておらず、死んでから時間が立っていない、肉体の状態がいいものだけが選ばれる」
――そんな都合のいい死体があるのかね？
そんな考えがふっと浮かび、その思考は視界にうつる四谷の姿に邪魔をされた。
他人から探されることなくということは、一人寂しくこの若者は死んだのだろうか。
整った青白い顔。四谷（仮）は一体どんな訳アリ人生を歩んだのだろう。
「使い終わった体はどうなる？」
「それを諫山　想に教えることはできない」
「あっそ」
ここまで話を聞いて、想はふうとため息をついた。何の話をしていたのか、そもそも他人とこんなに話すこと自体が久しぶりで、そのことに少し驚く。
――俺、何やってんだろうな。
目の前の級友の完璧なトンデモ設定なんかに耳を傾けていることにちょっと反省しながら想は少し乾いた口を開いた。
「で、近くにいなきゃいけないんだっけ？　とにかく家にとかこの部屋にっていうのは無理だから、そこら辺にアパートでも借りて住めば？」
「そうしよう。では、すぐに連絡が取れる方法を設定しなくてはならない」

「メールとかでいい？」
「問題ない。では、メールアドレスを設定するので何か希望がある場合、もしくは何か質問がある場合はそちらに連絡をすれば諌山想の都合に合わせて私も行動する」
「ん？　何？　行動するって」
「いつ、どこで会うかなど、諌山　想の希望通り動く」
「こういう風にしてくれーって、メールで送ったら叶えるとかじゃないの？」
「願いは必ず契約者に口に出してもらう必要がある。また、願いを叶える場合にかかる時間や方法などの確認と、場合によっては選択肢ができるのでそれを選んでもらわなくてはならない」
四谷の言葉に、想はちょっと嫌そうな表情を浮かべた。
「めんどうだな。大体、選択肢ってなんだよ」
「願いを叶える為のルートがいくつか存在する場合、どれを選ぶかの判断は契約者に委ねられる」
「具体的に教えてくれ」
「最初に話した一億円の件が例になる。期限を区切られた場合と、そうでない場合で手段が変わる」
「ああ、なるほどね」
想が答えると、四谷はポケットから小さな紙を取り出して差し出してきた。そこにはメールアドレスらしきものが書かれている。
「このメールアドレスは諌山　想からの連絡以外受け付けない」

――そんなのわかるのかよ？

四谷は相変わらず微動だにしない。何の表情もない顔のまま想にこう確認してきた。
「何か質問があれば、口に出して聞いてくれれば答える」
「うーん」
少しだけ考えたものの、結局面倒くさくなって少年はこう答えた。

「もう今日はいいや。帰ってくれ」
「了承した」
四谷は立ち上がるとすぐに諫山家を出て、どこへかわからないが去って行った。
想はいつものように味気ない夕食を取り、パソコンの画面を見ながら自分の叶えたい願いは何かないか、時々心の中を探った。

００５　・　契約者の運命に関わる選択肢の取り扱いについて

朝が来て目覚め、少年は学校へ向かった。
担任の出欠確認への返事がその日の最初の発声になる。そう大きくもない声で呼ばれた自分の名前にたいして「はい」と答え、ホームルームの時間を過ごす。
ここまでは諫山　想のいつも通りの日常だ。しかし今日はそれに二つのアクションが加わった。

一つは、斜め少し前に座っている四谷　司に目をやること。昨日と同じく、長い髪がかかった横顔は青白く何の表情も浮かべていない。超幸運と名乗り、部屋にまでやってきて条件がどうのこうのと話していった謎のクラスメイト。
もう一つは、最後列に座っている仲島　廉の様子を伺ったことだ。いつもは教師が話している間も誰かにベラベラと話しかけて注意されるのが常なのに、今日は神妙な顔をして黙りこくっている。

少年は自分の願いが叶ったかどうか知りたかった。
今の仲島の様子を見る限り、もう彼がくだらないトークで周囲に迷惑をかけることはなさそうに見える。
しかしそれは一時的なものかもしれないし、大体、「超幸運」とやらの力の証明にはならない。四谷はどんな願いも叶えると言った。彼の説明は超能力的な何か不思議なパワーでそれを叶えるような雰囲気だったが、仲島に加えられた制裁はきわめて物理的なものだ。現状ではただ単にサディスティックなクラスメイトに蹴られた挙句暴言を浴びせられてへこんでいるだけに見える。

――結局証明はできないってことかな。

しかし、人の考えていることがわかるようではあった。得体のしれない真っ黒い空間にも連れて行かれた。あれが夢でないなら、四谷にはなにか人知を超えた力があると思ってよさそうである。

――何か、願いを言ってみればいい。

しかし何かどうしても、という願いが少年にはない。原則として他人の心は操れないと言われた時点で、即なんとかしたい問題は解決できないことに少しガッカリしている状態だ。

――それとも言ってみれば案外なんとかしてくれるのか？

想が一番なんとかしたいと思っているのは、母親の小うるささだ。毎日帰ってきては勝手に部屋に入ってきて、勉強はしているのか、ゴロゴロするんじゃないと一方的にまくしたてては返事をしない息子に腹を立て、わざとドアを大きな音がするような閉め方をして去っていく。

あのうざったい毎晩の儀式をやめさせてくれ。そう四谷に願えば叶うのだろうか。

「なあ」

放課後、二人だけ残った教室で想は四谷に声をかけた。

青白い顔が振り返り、まっすぐに少年を見つめてくる。

「あのさ、俺の母親が毎晩やかましいのをやめさせるっていうのは、可能？」

「最短ならば二週間で可能で、最も良い形で止めさせるのならば七ヶ月と十三日かかる」

大真面目な顔から飛び出した言葉に、想は首をかしげた。

「最短だと何か、条件が悪くなるとかそういうこと？」

「そうだ」
何か説明があるかと思いきや、四谷の口は閉じたままだ。
「そういうのって、詳細は聞けないわけ？」
「諫山　想が望んだ場合のみ話すことになる。どんな願いも、それを叶える場合どのような道筋をたどるのかという事前の確認をすることが可能だ」
「親切設計なんだな」
少年は皮肉っぽくそう返事をして、両手を腰にあててふうっと息を吐いた。
「じゃあ最短二週間の場合はどうなるのか教えてくれ」
「今回の願いが最短で叶えられる場合は特殊な事例にあたる。わたしとしては勧めることができない。また、その理由を知ると契約者が極めて大きなダメージを負う可能性が高いので、最も良い形、もしくはそれに準じる方法を選ぶことを勧めるが、それを聞いてもまだ最短の場合の確認をしたいだろうか？」
「あん？」

――何言ってんだ？

「今回の願いは特殊な事例だ。契約者にとってよくない展開が待っており、それはわれわれ『超幸運』からすると避けてもらいたい運命で、また最短の場合どうなるかを諫山　想が聞くことも推奨できない」
「そこまで言われるとかえって気になるんだけど」
一瞬、四谷の動きが完全に止まった。話している間にもなかったが、瞬き一つない様子がやけに不気味に見えて、想は戸惑い顔をしかめた。
「どうしたんだよ」
「最終確認だ。最短の場合を話すことは諫山　想に精神的なダメージを与えることになる。最短以外の可能性を選ぶか、もしくは他の

願いを提案することを強く求める」
　この言葉に、少年はハハッと声をあげて笑った。
「そこまで悪いんなら教えてくれ。聞くだけっていうのはありなんだろ？　よっぽど悪いって納得できたら他の選択肢を選ぶよ」
「了承した。今回の事例は特殊で、最短の場合私は何もすることはない。何もしなくても、二週間後に諫山　ルミは息子に対して何も言わなくなる」
「何もしない？　なんだよそれ」
「二週間後に諫山　ルミは息子とその将来、およびそれが自分の将来に対する影響に絶望し、不倫相手である斉藤　博信と結託し十五日後に諫山　想の命を奪う」
「……」
　さすがに言葉が出せず、想はしばらく立ち尽くした。
　四谷がおどけた顔で、冗談だよーんとでも言ってくれないかと考えたが、そんな明るい展開はなく、目の前の青白い顔はじっと想を見つめたまま黙っている。
「それは、随分だな……」
「この運命を回避する方法は無限大に存在する。『何もしない』以外のどの選択肢も有効だ」
　四谷の言葉を聞きながら、少年は母の顔を思い浮かべた。しかし、どんな顔だったかいまひとつハッキリと思い出すことができない。浮かんでくるのはひたすら息子を責める苛立った声ばかりで、ついでにセットで父の後姿ばかりが思い出されてきた。
　果たして四谷の言葉は真実だろうか？
　先ほどの言葉をまるまる鵜呑みにしていいのかわからなかったが、今の言葉がどうしようもなく衝撃的だったのは事実で、少年は震え

る唇で新しい願いを口にした。

「どうすりゃいいんだ？　どうにかしてくれ」
「願いは具体的に口に出してもらわなければならない」
「何なんだよ不倫とかって……。言う必要あったのかよ？」
「われわれは常に真実のみを契約者に告げる」

――信じるのか？　四谷の言葉を。
――超幸運なんてトンデモ設定を信じちゃうのか？

心の中でそう自問しながら、しかし体は勝手に動いて少年の心からの願いを青白い顔に告げた。

「この特殊な事例をなるべくいい形で回避してくれ」
「お前の願いを叶えよう。この願いは今から七時間十五分後に叶えられることになる」
四谷はいつも通りのマジメな顔でこう告げると、教室から静かに去って行った。

少年は不安な気持ちを抱えたまま、家へと帰った。
四谷の言葉が真実ならば、自分に最悪の事態が起きるのは十五日後。しかし、どうしようもなく気分が落ち込んで食事には手がつけられない。
日が落ちて夜が訪れ、部屋の中は真っ暗だ。せめてもの賑やかしのためにつけたテレビだけがやかましく明るく少年を照らしている。
日付があと一時間で変わる時刻になって、玄関から鍵を開ける音がした。
廊下を歩く足音が二人分響き、諫山夫妻は真っ暗なリビングのソ

ファでじっと座る息子を見つけてビクっと体をこわばらせた。
「……おかえり」
何年かぶりのセリフを聞いて、諌山　ルミは慌てて部屋の電気をつけると、カバンを置いて息子の隣に座った。
「想、どうしたの？　何かあったの？」
「……」
少年の口から言葉は出ない。ただ黙ってじっと自分を見つめる息子に母は戸惑い、夫を振り返った。
「どうしたんだ？　嫌なことがあったのか？」
母とは逆側にやってきた父の言葉に、少年はただ小さく頷いた。

しばらくの沈黙の後、両親は何を思ったのか息子の頭を撫でたり、手を優しく握ったりしてなんとなく親子の時間を過ごそうと努力を始めた。少年は内心今更なんなんだとどうしようもなく腹を立てていたが、それ以上に哀しい気持ちがあって、じっと黙ったままそれを受け入れた。

ふと時計を見上げると、もう時刻は十二時過ぎになっている。
「想、もう寝なさい」
父親の言葉に黙ったまま頷くと少年は立ち上がり、自分の部屋へと向かった。そこに母親から声がかかる。
「おやすみ」
その一言に立ち止まり、少しだけ悩んでから想は振り返った。
「……おやすみ」

自分の部屋に戻り、ベッドに倒れこむ。
急に空腹を思い出しながら、少年は考えた。

――これで、願いは叶った？

枕に顔を埋めながら四谷の顔を思い出すと、少しずつイライラが募ってきた。

——あの野郎、嘘だったらぜってー許さねえ。

遠くから両親の話し声が聞こえてくる。

何を言っているかははっきりとわからないその音に揺られながら、少年は眠った。

００６　・　「超幸運」が真実か否か、それが問題だ

翌日は学校が休みで、想はしばらく考えてからパソコンを立ち上げてメールを打つことにした。

返信はなかったが、メールに書いた要望どおりの時間と場所に四谷はちゃんと姿を現した。

「お前どうやって入ってきたの？」

「他の住人が入るのを見計らって通らせてもらった」

マンションの屋上で向かい合う。オートロックの入り口をどうやって入るのかと思っていたら、案外普通の返事が返ってきて少年はちょっと腰砕けの状態だ。

「いくつか質問があるんだけど」

「われわれは契約者の質問に必ず真実を答える」

いつも通りの大真面目な顔から想はちょっとだけ視線を逸らした。

「昨日の願いは叶った？」

「叶った。諫山　想の運命は大きく変わり、その終わりは遠のいた」

「あのさ、願いが叶ったことって証明できるのか？　全部お前が適当に言ってるだけなんじゃないの？」

「目に見えないものをハッキリと証明することはできない。物理的なものに関わる願いならば証明は可能だ」

――一億円とかか。

特に金が欲しいとか、何かこれが欲しいと思っているものは今のところ少年にはない。

そして昨日、母親に何らかの心変わりがあったとして、それが四谷の手によるものなのか証明する術は確かにないように思える。

それでもどうしようもなく気になって、想は追加の質問を四谷にぶつけた。

「昨日、俺の母親には何があった？」

「不倫相手とケンカをし、帰り道で偶然夫と会い、またお前の父親は会社で仕事を評価され年下の可愛らしいと思っていた女性の部下に褒められて気分が良かったので妻に優しい態度を取り、二人は一緒に夕食をとりながら息子についての話し合いを持った。夫婦で息子の将来や態度に関して心配しているところに諫山　想が落ち込んだ姿を見せたことで親としての心が刺激され、また諫山　想が珍しくおかえりと声をかけたことにも心が動かされ今までの自分の態度を反省し不倫もやめようかと考え夫との仲をより良くしようと長い話し合いを持った」

「ちょうどいいところで区切ってくれよ。お前の話し方はイライラする」

「お前の母親は昨日の夜」

「いや、いい！　内容はわかったから言い直さなくていいよ」

大きなため息をはあっと吐き出し、少年は考えた。

――昨日、会社で可愛い子にほめられたって本当？

父親にそう質問したらどんな答えが返ってくるだろうか。それにうんと返事があれば、ほんの一部だが四谷の言葉が真実だという証拠になる……かもしれない。

「それって全部偶然起きたの？」

「その通りだ。起きた偶然はすべて私が引き寄せたものであり、その積み重ねが願いを叶える」

「うん？」

「われわれは願いを叶えるために、小さな偶然を引き寄せ重ねてい

く」
「意味がわかんねえよ」
「昨日の願いを例に出すと、母親の不倫相手が腹を立てるアクシデントと引き合わせてケンカに発展するように仕向け、父親の仕事が評価されるよう上司には小さな幸運を用意し、可愛いと思っている女性の部下がたまたま通りかかるようにした上、二人が同じ電車で同じ車両に乗るような配置をした」
「……」

――まわりくどい！

心底ムカついてることをアピールしようと眉間に皺を寄せてみせたが、四谷はまったく表情を変えなかった。マジメくさった顔でまっすぐ見つめてくるクラスメイトに、一体どう声をかけたものか想はしばらく考える。

「昨日さ」
ちらりと目をやるが、やはり四谷は動かない。
「こうるさく言わなくするには、最良の方法で七ヶ月かかるって言っただろ？　あれってどういう方法をとるんだ？」
「先ほども説明したが、小さな偶然を積み重ねていく。子供への接し方や、若者への対応の仕方などに関する情報が偶然に入るようにして、諫山　ルミの考え方が変わるようにしていく」
「それに七ヶ月もかかるわけ？」
「昨日一日で運命は大きく動いたので、今現在同じ願いを叶えたい場合には三ヶ月と二日で済む」
「……へえ」

――どういうこっちゃ？

こちらが疑問に思っていることは知っているはずなのに黙っている「超幸運」にまた少しイラつきながら、仕方なく想はちゃんと言葉に出して質問をした。
「随分縮まるんだな」
「昨日の件で諌山　想自身にも変化が起きたからだ」
「あん？　何言ってんだお前」
「最短の場合を聞いたことによって心に傷を受け、また夜に両親に寄り添われたことで閉じていた心が少し開いた。その影響で母親の心理にも変化が起きているので同じ願いでも叶えるまでの時間が変わった」
心に傷とか、心を開いたなんて言葉にやたらとムカついて想はぎゅうっと強く目を閉じ、ため息をつくと目の前のクラスメイトをジロリと睨んだ。

――畜生っ！

恨めしい視線にも、やはり四谷は動じない。ブレのないその反応にチッと舌打ちをして、想は次の質問をぶつけた。
「じゃあさ、もしかして俺がこういう態度を取ればいいようになるぞ、とかそういうこともわかってるってことか？」
「われわれが願いを叶える際、契約者本人に具体的な行動は求めない。契約者自身に変化を求めることもしない。契約者が何もしないうちに願いが叶えられるようになっている」
「でも今回は変化があったんだろう？」
「結果として変化が起きたということだ。諌山　想が寂しくソファに座り込んでいたのは最速の場合のシミュレーションを聞いた結果であり、寝る前におやすみと挨拶を久しぶりにしたのは両親の上に起きた変化を目の当たりにした結果だ」
「……うるせえよっ」

こっぱずかしい真実をはっきりと指摘され想はまたムカムカを募らせたが、勿論四谷はいつも通りの無表情で黙っている。

――それにしても。

昨日の夜諫山家で何があったか、すべて知っているのは確かなようだ。イライラの中でそれに気がついて、想は顔から力を抜いた。

――本当なのか？　超幸運。

もういいよと告げて想は自宅へ戻り、珍しく家でゆっくりしている両親と顔を合わせた。

「おかえり、想。どこに行ってたの？」

優しい雰囲気の母の言葉に少し戸惑う。少年は両親に対して特に声をかけたりしないで過ごしていたし、両親も息子に対して必要最低限以外の言葉を長い間かけてくることがなかった。

――どこに行ってたの？　か。

それが昨日連続して起きた小さな偶然の積み重ねが引き起こした心変わりのせいなのか、少年は少し考える。

「ちょっとクラスの奴と会ってたんだ」

「……お友達？　近所に住んでるの？」

家を出てから戻るまで、四十分ほどしか経っていない。ましてや息子の口から誰か他人の話題がでてきたのは初めてのことで、興味を惹かれたのか母親の質問は続いた。

「まあね」

そういえば四谷はどこに住んでいるのだろうか。どこかから諫山家の近所に引っ越してきたりしたのだろうか？

穏やかな家族の時間が流れる。
その中に身を置きながら少年は考えた。
母親が不倫をしていようが別にかまわない。ついでに自分も両親も、いつ死んだっていいと思っていたはずだった。
なのにどうしてあんなに恐ろしい気持ちになってしまったのか。
あんまりだと思った理由が、よくわからない。

ちらりと視線を向けると母は少し微笑んで息子に応えた。
それから慌てて顔を逸らし、誰も観ていないのに惰性でつけられているままのテレビを見つめる。日曜日の昼下がりのテレビはくだらなく、感情の散らかった頭には内容がちっとも入ってこない。

――都合が良すぎるだろ。

今まで自分のことを見ていなかったくせに。
そんな苦い気持ちをかみ殺しながらペットボトルのお茶を喉に流し込むと、想はニセモノの家族の団欒への参加を切り上げて自分の部屋へ戻った。

世の中で起きた痛々しいニュースをまとめているサイトを見ながら少年は考えた。
何か結果のわかりやすい願いを考えて言ってみればいいんだ。
わかりやすくて、普通の十六歳が実現するには無理がある設定で、できるだけ叶うまでに時間がかからないもの。

検索サイトの一番上にある小さな四角い枠の中にキーワードを打ち込んでいく。

願い　夢　願望　欲望　無理　叶わない

検索のボタンを押し、あっという間に出てきたたくさんの結果の一覧は見ただけでちょっとうんざりする。

その中にちらほらと踊る単語を追って、少年は明日「超幸運」に提示する難題を何にするか夜遅くまで考え続けた。

００７　・　五つの超幸運とその傾向についての確認

「なあ、なんでメール返してくれないんだよ」
想がこんな文句を言うと、四谷はいつも通りの表情のない顔でしれっと答えた。
「メールでできるのは、叶えたい願いがある時もしくは質問がある時にわたしを呼び出すことだけだ。場所と、時間の指定を送ってくれればそこへ向かう。質問や願いをメールで送られても、返信することはできない」
「まわりくどいな」

放課後の教室は今日も二人きりだ。
他のクラスメイトたちは既に去り、部活に、恋に、バイトに、はたまた適度な遊びに興じている。

今日は雨が降っていて、いつもなら校庭から聞こえてくる野球部の声はしない。
静かな雨音が響く薄暗い教室で、しばらくの沈黙の後に想は口を開いた。
「確認したいことがあるけど、聞いていいか？」
「もちろん」
「なんにでも答えるんだよな」
「契約者には真実のみを述べる。ただし、何か問題をはらんでいる場合には事前に確認を求める」

――うっかり死んじゃう場合とかな。

ふんっと強く息を吐いて、想は四谷の顔をまっすぐに見つめた。
「なんで願いを口に出す必要があるんだ？　心が読めるんだろ？」

「人間とは不思議なもので、何か頭の中で考えていることがあっても肉体は違う行動をとることがある。思考がイコール願いとは限らないので、必ず口に出して願いを言ってもらっている」
「ふうん」
例えば火の海の中に大切な人だとかものだとかがあって、入れば死ぬとわかっていても入っていくとか。
大型トラックに子犬が轢かれそうになっているところに飛び込むとか。
そういう映画やマンガでよくあるパターンがそれにあたるかもしれない。現実にも、そういうことをする人間がいるであろうことは少年も理解していた。自分では決してしないだろうと思っているが。
「即座に願いを叶える場合と、そうじゃない場合の違いは？」
仲島への制裁と、自分に待つ死の運命を避ける願いは即座に叶えられることに決まった。事前の確認とやらは特になかったはずだ。
「願いが命令形で言われた場合、そして大きく運命に関わる悪い選択肢がない場合にはすぐに叶えるようになっている」
「命令形？」
「仲島　廉に対する対応を変えさせる願いの時には『やめさせてくれよ』と、先日の特殊な事例の回避の願いの時には『回避してくれ』と諫山　想は言った」

――口調だけで即、実行かよ。

「案外単純なんだな」
「ルールは単純であるべきだ」
「……まあ、そうかもな。じゃあ俺は口調に気をつけることにするわ」
四谷は相変わらずの大真面目な顔だ。暗い教室の中に浮かぶ青白い顔はなんだかやっぱりどこか人間らしからぬ雰囲気に満ちている。
そんなクラスメイトに、想は試しにこんなことを言ってみた。

「焼きそばパン買ってきてくれ」
「諫山　想、それは願いではない。ただの命令だ。われわれは願いを叶えるが、単純な命令に従うことはしない」
「ああ、そう」
――ダメなんだ。
単純にパシリにするのは無理だったらしい。あの真剣な顔で「予算とどこのメーカーのものにするのかを指定してくれ」とか言うかと思ったらさすがに違っていた。
――じゃあ次だな。
「俺が死にたいって言ったら、その願いは叶うのか？」
「われわれとしては残念極まりないが、契約者が心からそれを望んでいる場合には叶える」
「心の底から望んでいない願いは叶わないのか？」
「人が死ぬということは大変なことだ。多くの運命に関わる出来事なので軽々しく扱うことはできない。わたしの場合、止むを得ないと判断した時のみ、周囲の人間への影響がなるべく少ない形で叶えることにしている」
「なんだよそれ」
人は毎日そこらじゅうで死んでいる。その中に一人ちょっと加わるくらい、一体どう大変だというのだろう。
少年はそう考え、そして先ほどの四谷の言葉の中の違和感に気がついた。
「わたしの場合、って何だ？」
「言葉の通りだ。諫山　想が死にたいと願った場合には、わたしは本人が本気で思っているのか判断し、周囲への影響をなるべく」
「いやいやいや。違う。いつもはわれわれって言うのに、なんで今

回は『わたし』って言ってる？」
　窓の外では雨が少し激しさを増し、教室にはほとんど明かりがさしこんでこなくなってしまった。暗闇の中に白い顔だけがぼうっと浮かんでいるようで、四谷の醸し出す不気味さも少し増している。
「われわれ『超幸運』は全部で五つ。みな選ばれた契約者の願いを叶えるし持つ力は同等だが、それぞれの考え方や方針は少しずつ違う。わたしでない『超幸運』と契約していた場合、死を望めば即座に叶えるものもあるし、決して叶えないものもある」
「はあ。……そうなんだ。どんくらいの差があるの？」
　想の気軽な質問に、四谷の動きがピタリと止まった。
「なんかたまにピターっと止まるけど。言いにくい場合はそうなるわけ？」
「そんなことはない。われわれ『超幸運』は地球上に五つ。名はないので、便宜上一から五までの数字、もしくはそれぞれに与えられた色で呼ばれている。一は白で、独自にルールを設けており願いの審査を最も厳しくしている。二は赤、三は緑、四はわたしで黒、この三つは願いを叶える際になるべく他の人間への影響を少なくするようにしている。五は金で、なんでもありだ。ルールはなしですべての願いを叶える」
　この説明に、想はちょっとだけ心を躍らせた。
「すげえな、金。さすが金だな。チェンジは？　ＯＫ？」
「それはできない」
「やっぱり？　……じゃあ、金に当たった奴ってすごいんだな。どんな願いを叶えた？」
「金にはルールは存在しない。どんな願いも叶えるかわりに契約者の安全も一切保障しない」
　珍しく質問をスルーしてきた「黒」に想はちょっと苦笑する。
「なんだよ、お前。自分がすごく親切みたいな言い方しやがって」
　四谷はいつも通りの至極大真面目な顔だ。
「われわれは人間の願いを叶える。それは契約者のためだが、巻き

込んだ他の人間にも幸運を与えるようにすべきだとわたしは考えており、まわりくどいと思われるかもしれないがなるべく良い結果を多くの人間にもたらすために小さな偶然を引き寄せるというやり方をしている」

「……もしかしてホントはできるのか？　最初はできないって言ってた、空を飛ぶとかさ、瞬間移動とか」

「もちろんだ。しかしそんなことをしても契約者の不利になる要素の方が多い」

「だからやらない、ね」

ここまで聞いて少年は暗い空を見ながら少し考えた。

確かに、いきなり男子高校生が空を飛んでいたら……、おかしい。最悪おかしな連中に捕まって解剖されてしまうかもしれない。

「じゃあ例えば、今からすげえカッコイイ男前に顔を変えて、とかも叶えないんだな」

「もちろんだ」

「できるのに？」

「できるがやらない。諫山　想が諫山　想である証明が難しくなり、人生において不利になることが多くなるからだ」

「ははは」

大きく声をあげて、想は笑った。

「お前面白いな」

遠くではゴロゴロと雷の音がしている。

「ひさびさに笑わせてもらったよ」

「楽しい気分になってもらえて何よりだ」

「今どこに住んでんの？　まさか俺の家の近く？」

「そうだ。お前の住んでいるマンションの向かい、エスポワール東録戸の一〇三号室だ」

名前から感じる響きとは裏腹にオンボロなアパートの名前が出て

きて、想はまた笑った。
窓の外が光り、轟音が少し遅れて響く。教室の中に響く愉快そうな笑い声には似合わない大荒れの天気だ。
「俺、今日傘がないんだよ。この天気をなんとかしてくれ」
「お前の願いを叶えよう。この願いは今から九分二十八秒後に叶えられる」

その時間通りに雨雲は去り、諫山　想はスニーカーの底を濡らしながら家へと続く道を歩いた。
当然のように、四谷がその少し後ろをついてくる。
「ご近所さんと一緒にお帰りか？」
「離れていろと命令がない限り、『超幸運』は契約者となるべく近い位置に備える」
「もしかして俺に気があるとかそういう気持ち悪い展開はないよな」
「ない」
簡潔な返事に少年はふっと笑う。

二人は前後に並んで同じ速度で歩き、それぞれの家の前で別れて自宅へと戻った。

００８　・　明日から彼女を作る場合のシミュレーション

少年は家に帰り、食卓に乗っている皿を見ると深いため息をついた。

例のちょっとした家族ごっこの生んだ副産物。母の手料理の登場だ。

過去に散々拒否した家庭の味。一生懸命作ったのよというセリフとともに差し出される「おふくろの味」は想が世界で一番嫌いなものだった。

チンして食べてねという走り書きのメモが添えられたそれをどうすべきだろうか、少年は心の底から悩んだ。

コンビニで適当な弁当を選んで店員に差し出し支払いを済ませるまでの短い間に、苦い思い出が脳裏に蘇ってくる。

小学校の低学年の頃は今日のように、毎日母の作った食事が用意されていた。必ず全部食べることという約束をさせられていた少年は、食事をするのが嫌いになっていた。

母親の料理が下手だったからだ。

栄養があって、愛情も入っている。息子のために早起きをし、慣れない料理に奮闘する。それを評価しろと母は息子に毎日迫った。

しかし、マズイものはマズイ。薄暗い家の中で一人美味しくもない手料理を食べさせられるのは想にとって耐えられたものではなく、結局毎日母の努力はゴミ箱に投げ捨てられていった。

――あれがいけなかったのかな。

財布から小銭を取り出し店員に渡しながら、少年はちょっと遠くを見つめた。

最後に母が皿を思いっきり床に投げ捨て、料理を作らなくなったのはいつの日だったか。

あれ以来休みの日でも食卓にのぼるのはどこかで買ってきた惣菜や弁当ばかりで、少年の血肉を作っているのは主に謎の成分がズラズラとかかれたシールが貼ってある、どこかの工場で作られたものばかりだ。

どこかの誰かがもしかしたら愛情をこめて詰めたかもしれない工場直送の弁当をぶら下げ、想は夜道を歩いた。

マンションのエントランスのあかりが見える道の途中で、ふっと足が止まる。

道路の向いに立つ、ボロいアパート。エスポワール東録戸。薄暗い照明が照らすその建物が目に入ったからだ。

――一〇三号室って言ってたっけ。

ドアを叩こうとして手を挙げた瞬間、扉が開いた。

「うお、ビックリした」

「諫山　想。何か願いか質問ができたのか？」

「……まあ、そうかな」

四谷は何も言わないままドアを開いて少年を中へ通した。靴を脱げばすぐに台所と狭いダイニングのスペースで、その奥にはだいぶ焼けて色あせた畳が敷かれた四畳半の部屋がある。

「何にもないけど？」

「必要ないからだ」

部屋は完全に空き部屋の状態だった。部屋の隅にカバンが置かれ、玄関に想が履いてきたものともう一足の靴があるくらいで、寒々しさを感じる程の何もなさにさすがに驚かされる。

「マジで？　家が他にあるとかじゃなくて？」
勝手に押入れを開けてみても、やはり何もない。布団も着替えも入っていないし、机もない。
「どうやって寝てんの？」
「われわれに睡眠は必要ない」
――本当にこいつ、人間じゃないのかな。
ただ単にちょっと変わっているだけのヤツなんじゃないかと少年は思っているが、心の片隅に少しだけ、彼の言葉はすべて真実なのではないかという気持ちもある。
「お前、飯は？」
「われわれに食事は必要ない」
「何も飲まない？」
「何も飲まない。これは仮の体であり、死んだ肉体なので食事や睡眠は必要ない状態になっている」
「へえ。……俺、ここで飯食ってもいい？」
「もちろんだ」
電子レンジのない四谷の部屋にちょっと失敗したかなという気持ちになりつつ、想は畳の上に腰を下ろした。
「今すぐテーブル用意してくれって言ったら叶うのか？」
「われわれは単純な命令は受けない」
「心からテーブルが欲しいなあ」
想が適当な口調で言ったセリフに返答はなかった。仕方なく、手で弁当箱を持ったまま食事を進める。
ご飯を口に放り込みながら、少年は黒の超幸運に質問をぶつけていった。
「お前の体っていつか腐るの？」

「借りている1年間は腐らないようにしている」
「そりゃそうだ。普通に腐っていってたらバカだもんな」
四谷はくすりともせず、大真面目な顔でまっすぐ想を見ている。
「あんまりじっと見ないでもらえる？」
「了承した」
少しだけ視線を逸らしたクラスメイトに、想はふっと笑った。
「お前の願いを叶えよう、とはならないんだな」
「契約者を常に前から見つめ続けなくてはならないというルールはないからだ」
「あー、なるほど。……じゃあ、契約者のことはいちいちフルネームで呼ぶなんていうルールはあるわけ？」
「その通りだ。基本的に契約者にはその正式な名で呼びかけ、意思の確認をするようになっている」
――すげえ長い名前のヤツはめんどくさいな。
そんな落語があったな、と思い出しながら少年はさらに質問を重ねていく。
「明日っから彼女が欲しいって言ったら、出来る？」
「それは可能だ。しかし、諫山　想の理想の女性とは少し違うタイプが相手になってしまう」
「理想の女性ねえ。じゃあすっげえ美人と付き合う場合は？」
「美人、というだけでいいのなら二日後に可能だ」
――こんなやる気のない高校生といきなり付き合っちゃう美人……、絶対ヤバいな。
「美人で性格もよくて、俺と最高に相性のいい彼女ってなるとどのくらい？」
「既婚女性でよいのなら三年と二ヶ月、未婚女性がいいのなら六年

八ヶ月かかる」
「へえ……」
長いような短いような期間の提示に少し考える。
「お前、適当に言ってるだけじゃないよな？」
「信じられないのなら先ほどの『彼女が欲しい』という願いを試してみればいい。明日には叶う」
「それってどんな女かはまったくの指定なしの場合だろ？　どう考えてもとんでもないことになるじゃないか」
「……そうとは限らないぞ」

――嘘くせえ！

四谷の言葉に想は力いっぱい顔をしかめてみせた。
やる気もなく、見た目がいいわけでもなく、友人もいない。どんな科目でも活躍することのないこんな自分に好意を寄せる女子がいるとはとても思えない。
「もしかして慰めようとしてるとか？」
「われわれは契約者には常に真実を話す」
「信じられないね」

――何かの間違いで付き合うことになって、どうせ次の日フラれるとかだな。

「それは残念だ」
特に残念そうでもない顔でいう四谷がそう言ったところで、コンビニ弁当は空になった。
一緒に買ってきたお茶を喉に流し込んでいると、ふっとこんな考えが浮かんでくる。

――彼女が欲しいという願いを叶えてみれば、だって？

チラリと目の前の青白い顔を見ても、相変わらずの無表情だ。

――オススメしてきたのは初めてだな。

「願いの提案はしないと言っていたはずだろ？」

「彼女が欲しいといった場合のシミュレーションをしたからだ。一度シミュレーションをしており、その結果に変化がない場合の願いならば言及することが可能になる」

「その結果に変化がない場合ってどういう意味？」

「願いのシミュレーションを聞いた場合、それを聞いたという事実により運命の流れは変わる。たとえば明日が過ぎれば、本日と同じ『明日っから彼女が欲しい』という願いを叶える場合、今日願った場合にできるのとは違う女性が『彼女』になる」

「つまり、今日彼女が欲しいって言ったらAが、明後日以降に言ったらBがってことか」

「そういうことだ」

「ふうん」

ふうん、と答えたものの、自分に彼女ができるという想像が少年にはできないでいた。

高校生らしい健全な肉体の持ち主ではあったが、そもそも誰かと深く付き合うなんて面倒くさいことに少年は興味がなく、相手の機嫌を伺ったり記念日にはプレゼントを用意したりなんて考えたくもない。

「じゃあさ、俺が好き放題しても許されるハーレムとかは？　作れる？」

「もちろんだ。その願いを叶える場合、最短で一ヶ月で可能だ」

「できるのかよ。すげえな、超幸運！　絶対ヤバイだろその即席酒

池肉林は。その最悪のハーレムの内訳はどうなるんだ?」
「町外れの廃工場に、若い男を好む麻薬中毒の女が住み着く。そこに更に前科のある女が二人、暴力夫に追われた女が一人、計四人、平均年齢三十五歳のハーレムが出来上がる」
「ダブルスコアじゃねえか。で、そこに行ったら好き放題ヤレるわけ? どうせひどい目にあうんだろ?」
「三種類の性病をうつされ、四人のうち二人が妊娠する。更にはうわさを聞きつけた他の男子学生が入り込んできて諫山 想は二週間で追い出された上、自分の仕業ではないのに子供の父親だと主張されて慰謝料などを請求され、学校にも知られて退学処分にされる」
「はははははは!」

想の笑い声が終わって、部屋に静寂が訪れると四谷は大真面目な顔で口を開いた。
「叶えるのか?」
「んなわけねえだろっ」

もうそろそろ諫山家に両親が帰ってくるであろう時間になっている。

少年はコンビニの袋に空の弁当箱を入れて口をきゅっとしめると四谷の部屋を出て、ゴミの集積場にそれをぽいと投げ捨てると向かいの自分の家に戻った。

００９　・　契約者との距離感・対応の変化について

「どこに行ってたの？」

家に帰るなり、母親からこんな声がかけられた。

やや、怒りを含んだような響きのセリフ。何故なのか、少年には心当たりがあった。食卓の上に手付かずで残っているラップのかけられた皿のせいだ。

「いつもより早いね」

お互いにおかえりの一言もないまま牽制し合う。

しかし、刺すような母の視線がどうしようもなく鬱陶しくて、想はやむを得ず口を開いた。

「ちょっと、クラスの奴のところに行ってたんだ」

「クラスの？　この間言ってた子？」

「近所に住んでるんだ。そいつのところで飯を食った」

急に視線がやわらかく変化していく。

「そうだったの。お友達と一緒にね」

自分が一生懸命作った料理を食べてもらうよりも、息子に友人ができて、しかも一緒に食事までしてきたことの方がどうやら嬉しかったらしく、諌山　ルミは安心したような笑顔を浮かべた。

「ちょっとコンビニ」

午後十時、想は一言両親に声をかけて家を出た。向かった先はコンビニではなく、マンションの向かいにあるボロアパートの一〇三号室だ。

ノックをしようとした瞬間、やはりドアは開いた。

「諌山　想、何か願いができたのか」

「まあね。ちょっといいか」

「勿論だ」
夕方の時と同様に、すんなりと中へ通される。そして、想は笑った。
「テーブルがあるぞ」
「心から望んでいるようだったからな」
四谷はいつも通りの無表情だ。弁当片手に寄ってから約三時間。どこでこの小さなテーブルを用立ててきたのだろうか。その辺のホームセンターでお買い物でもしたのかと考えると、少し面白い気分になってきて少年はニヤニヤしながら腰を下ろした。
「次はクッションだな。心の底からクッションが欲しい」
「では用意しておこう」
「命令は聞かないんじゃないの？」
「諫山　想はこの部屋を少し気に入ったようだったので、これから先願いや質問がある際にここを訪れる可能性が高く、快適に過ごせるような工夫が必要だと判断したので要望はなるべく聞き入れることにした」
「ははははっ」
おそらく邪魔者が訪れないであろう四谷の部屋の心地良さを、想は確かに気に入っていた。ズバリ心の内を当てられた事への気味悪さよりも、多分これから先入り浸ってしまうだろうと思っていた事と、それを許してもらえた喜びが心の内から湧いてきて、思わず笑う。
「喜んでもらえて何よりだ」
「このテーブル、いくらだった？」
「九八〇円だ」
「あははははっ」
――超幸運、ケチくせえ！
しばらく笑った後、想は改めて四谷に向き直った。大真面目な顔

で正座をしている姿に再び笑いがこみ上げてくる。
「諫山　想、何か願いがあるのなら早く言うべきだ。コンビニに行くと言って出てきたのだろう」
「お前がただのストーカーだったらマジでおっかねえな」
こんな冗談には一切反応はない。四谷の青白い顔に一気に素に戻って、想は小さく咳払いをすると新しい願いについての相談を始めた。
「俺の母親が張り切って料理するのをやめさせたいんだけど、どのくらいかかる？」
「料理をやめさせるとなると、最短で三年四ヶ月かかる」
「長いな」
あのへたくそな手料理を毎日用意されたら気が滅入る。残しても捨てても険悪になるし、食べれば具合が悪くなる。少年が顔をしかめて腕組みをすると、意外なセリフが四谷の口から飛び出してきた。
「諫山　想、この問題を解決するために有効な願いの提案をすることが可能だ」
「あん？」
想はちょっと冷めた視線を超幸運に向けて放った。
「提案はしないんだろう？」
「今回の諫山　想の願いは料理をやめさせることだが、この料理をやめさせたい理由は諫山　ルミの腕が悪いからというものだ。それを解決するような願いをすれば、料理はやめなくても問題は解決する」
「……えーと？」

――どういういいことだ？

「単純に、諫山　ルミの料理の腕が上達すれば問題は解決する。そのように運命を動かせば、現在諫山　想を悩ませている問題は二ヵ月後には解消される」

「……嘘だね。あの母親は散々あっちこっちの料理教室に通ってあの腕なんだぞ？　どうにかなるのかよ」
「われわれは契約者に対して真実のみを述べる」
「提案しないっていうのはどこに行ったんだ？」
「基本的にこういう願いはどうかという提案はしない。ただし、今回のように問題解決がより早く、また関わる者がより幸福を感じられるであろう代案がある場合のみ、言及させてもらう」
いつも通りの表情で話す四谷に、想はちょっと呆れた表情を浮かべた。
「そういう後出しルール、あといくつあるんだ？」
「確かにそう取られても仕方がない。先に謝罪させてもらおう。すまなかった。われわれ超幸運は人知を超えた存在であり、契約者がどのくらいのスピードでどの程度われわれを受け入れるかはその人物によって違う。契約者の理解度にあわせて公開していくルールはいくつかある」
――じゃあ俺が、超幸運とやらを信じて受け入れてるって判断されたってことか。
なんとなく恥ずかしい気分が心の底からはみだしてくるのを感じて、少年は超幸運から少しだけ視線を外した。
――でも、確かにそうか。だってこうやって遊びに来ちゃってるわけだしな。
それに、四谷と話すことは想にとって、少し「面白いこと」になっている。それをあっさり認めると心がラクになって、少年は視線を戻すとふっと笑顔を浮かべた。
「わかったよ。俺はまだちょっと半信半疑なんだけどね」
「問題ない。代案を採用した場合、二ヶ月で問題は解決する。そし

て明日から解決の日まで諫山　ルミは息子のために手料理を作らない」

「マジか」

それは恐ろしく魅力的な提案だった。

ほんのちょっとだけ考え、少年は大きく頷き、超幸運に向けて言った。

「俺の母親の料理の腕、上達させてくれ」

「お前の願いを叶えよう。この願いは今からちょうど二ヵ月後に叶えられる」

コンビニで飲み物を買って、少年は家へと戻った。

なんとなく帰宅の挨拶をすると、リビングでくつろぐ両親も少し微笑んだような顔で「おかえり」と返してくる。

――あったか家族かよ。

鼻の辺りに皺を寄せて自分の部屋に戻り、ペットボトルの蓋を開ける。プシュっという音と同時に、ドアを叩く音がした。

「想、ちょっといいか？」

父親の声だ。こんな風に部屋にやってくることなんて、今までにあったかどうか。記憶の中にはなかったそのイベントに少年は少し驚き、黙ってドアを開けると、父親が中へと入ってきた。

「何か用？」

「ああ。夕食のことなんだが」

小さな、ささやくような父の声はこう続いた。

「友達のところで食べてきたのは、母さんの料理が食べたくないからなんじゃないのか？」

「え？」

「ほら、下手だろう、料理が。お前のために、って言ってるけど、美味しくないもの用意されたら迷惑だよな」

――親父もそう思ってたのか。

これは少しおかしくて、想はニヤリと笑った。

「まったくね」

「やっぱり。母さんのために言わないでいてくれたんだろう?」

これはすぐに肯定できず、少年は真顔で黙る。

「……すまなかったな。これは父さんが言うべきことだった。もっと早くに言えたのに。料理教室まで通ってたから、なかなか言いづらくて」

鼻のあたりをポリポリと掻く父親に、想は小さくこくこくと頷いた。それだけで気持ちは通じたようで、父はちょっと情けない笑顔を浮かべて息子の肩を一度叩くと部屋を出て行った。

リビングから夫婦の話し声が聞こえる。

ちょっと大きな、母の怒ったような声。なだめる父の低い声。涙で震える、母の声。

順番に聞こえてくるそんな音に少しだけ意識を向けながら、想はいつものようにネットサーフィンをした。お気に入りの痛いニュースのまとめブログに目を通す。

――俺のことも、きっと痛いニュースに分類されるんだろうな。

やる気のない息子に幻滅して不倫相手と殺人計画を立てる母。

料理がマズイからって食べない息子に、激怒する母。

父の作戦がどんなものかしらないが、うまくいくのだろうか。

超幸運の力の見せ所だな、なんて考えて、想は馬鹿馬鹿しさに少

しだけ笑う。

――すっかり信じちゃってるのかよ。ナンバー4、黒の、超幸運のことを。

いつの間にか、リビングからは何も聞こえなくなっていた。

明日の朝、とりあえず手料理がなければちょっとくらい信じてもいい。そんなことを考えながら、想はペットボトルの中身を空にして、ベッドにゴロンと身を投げ出すとそのまま眠った。

０１０　・　少年の未来に広がる可能性について

次の日の朝、諫山家の食卓に出てきたのは、トーストと目玉焼きだった。

塩でもコショウでも勝手にかけて、と調味料も一緒にならんでいる。

――まあこれは、手料理ってジャンルには入らないか。

それを黙って食べて、いつものように言葉少なに短い家族の時間を終えると想は学校へ向かう。マンションのエントランスを出たところで、目に入った。向かいのアパートの一〇三号室のボロいドアが開き、自分と同じ制服に身を包んだ男子高校生が出てくる。

それに特に声もかけずに歩いていく。四谷も黙って少し離れた後ろをついてくる。

なんだか子分でもできたかのようなムードに、想は小さく笑う。

相変わらずだらだらの学校生活を終えて家に帰ると、超幸運の言ったとおりで母の手料理はなかった。かわりにテーブルの上にあるのは千円札と手紙で、母の少し神経質そうな字で「夕食はこれで何か買ってください。ごめんね」と書かれている。

――謝らなくていいのにね。

その手紙はポイとゴミ箱に投げ、お札を手に取ると想はまず着替えを済ませた。そして、向かいのアパートに向かう。

「諫山　想。何か質問ができたのか？」

「すげえ。自動ドアだ」

ノックもいらなければ自分で開ける必要もない。昭和丸出しのく

せに自動で開くボロいドアにふっと笑う。中に入ると昨日出した要望どおりクッションが用意されていて、ますます少年は笑った。
「だっせえクッションだな」
「デザインや大きさまでは指定がなかった」
「じゃあリッチでフカフカのやつにしてくれよ」
「その願いを叶える場合、二十六日かかる。その間、他の願いは叶えることができないがいいだろうか」
「じゃあいいや。っていうかなんでそんなにかかるんだよ。なんでもできるくせに」
「それは」
「いやいや、いい。詳細な理由はいいよ。めんどくさいから」
ぺらぺらな真っ黄色の小さなクッションの上に座る。
「飲み物買ってくりゃよかったな。なんか飲むものある？」
「ない」
そういえば冷蔵庫もないんだったな、と気がついて想は立ち上がった。とりあえずコンビニに向かい、お気に入りの清涼飲料水を買ってすぐにエスポワール東録戸へ戻る。
「お前の言ったとおり、手料理はなくなってたよ」
「諫山　ルミはこれからしばらく帰宅も遅くなる。料理教室へ通い、腕を磨いて二ヵ月後にはまともな味つけの料理を作れるようになる」
「今までも行ってたんだけどな。凄腕の講師でもいるわけ？」
「その質問に答えるには、事前に諫山　想の了承を得る必要がある。その理由を知った場合、少なからず気分を害する可能性があるが、それでも知りたいだろうか」

――またかよ。

ちょっとうんざりした気分になって、想はがっくりとうなだれた。
「料理教室いくだけでなんで気分を害しちゃうわけ？　おかしくないか？」

四谷は黙っている。この質問には即座に答えられないわけで、それが何故なのか少年はしばし考えを巡らせた。

――新しい教室の講師がすごくいいってわけじゃないなら、今までのところに問題があったとか？

そういうことなんだろうな、と妙に納得がいって、想はこの考えにそって推理を始める。

――ああ、そうか。前の教室では料理どころじゃなかったんだ。もしかして……。

「前の教室の先生と不倫してたとかか」

「正解には近いがそうではない」

「じゃあ言ってくれ」

想の命令を受けて、四谷が即座に答える。

「諫山　ルミが料理教室に通うのは今回が初めてだ。今までは料理教室に通うといって、不倫相手とともに外出ないしもしくは」

「あー、そこまでいいよ。うん。よーくわかった」

生々しい単語が出る前にストップをかけ、少年はふう、と息を漏らした。

「ちなみに父親の方は？　浮気とかしてる？」

「していない」

「ああそう。そりゃ何よりだな」

ペットボトルの蓋をいつもより少し力を入れて開け、一気に喉に流し込む。しらけた気分の中の小さなムカつきに気がつき、自分が腹を立てているということにまたイラついて、想は勢いよくボトルをテーブルの上に置いた。蓋のしまっていないボトルから、少しだけ中身が飛び出す。

「知ってんの？」

「諫山　想の父親が妻の不倫を知っているかということならば、知っている」
「……へえ」
頭の中に妙な渦のようなものができて、生まれた思考を次々と飲み込んでいくような感覚。
よくそれで離婚しないもんだな、とか。
もしかしてそれは自分がいるからなのかな、とか。
それともなんだかんだ、愛とやらがあるのかな、とか。
それらはすべてどうしようもなくくだらない発想で、だからきっと、ゴミ箱に全部捨てたいんだろうなと、少年は自分の心の中に発生したブラックホールの存在理由に納得した。
――感傷的とか、ホントくだらない。
両親がどうしようと知ったことではない。そう心にケリをつけて、想は四谷の方に顔を向けてニヤリと笑った。
「この間聞きそびれた質問してもいいか？」
「もちろんだ」
四谷はいつも通り無表情だ。それが妙に安心できると思えるのは何故なんだろうと一瞬考え、少年は質問をぶつけた。
「ハーレム作れるかって聞いただろ？」
「最短の場合のシミュレーションのみ、話した」
「そう。最短じゃなくて、最高に俺好みで美女ぞろいバージョンってのも作れるわけ？」
「もちろんだ。その場合、完成までには四十一年かかる」
「なげえ～っ！」
思わず、のけぞる。

「それってどういう状況になってるんだ？　俺は」
「諫山　想は何年かのサラリーマン生活の末に自分の会社を立ち上げて社長になっている。様々な困難が途中に待ち構えているがそれをなんとか切り抜け、安定した収入を得られる健全な経営をしている。そしてハーレムを作るかわりに独身を貫いており、跡継ぎとなる子供はいない」
「社長ね。で、ハーレムの構成は？　何人いるの？」
「六人だ。会社を立ち上げてニ年目に入ってきた秘書、銀座のクラブでママをしている女性、取引先の会社の社長の娘、行きつけのレストランでウェイトレスをしていた女性、会社の取材にやってきた経済誌の記者の女性、自分の会社で働く若い部下の男性、いずれも劣らぬ美貌の持ち主で皆、諫山　想を慕っておりケンカなどは」
「おい。おい！　一人おかしいのが混じってるぞ」
「最高に諫山　想好みで皆が平和に過ごせるハーレムを作るとそういう構成になる」
「……深いな」
あと四十一年も過ぎれば、趣味とか嗜好などにも変化があるのかもしれない。もちろん、世間の価値観だって時代に合わせて変わるだろう。……という結論になんとか落ち着く。
「じゃあ例えばさ、俺が社長になりたいって言ったら、そのハーレムはついてくるのか？」
「理想のハーレム付きの社長になりたいと願った場合にはなる。ただ社長になりたいだけならば、ハーレムなしの場合、明日にでも叶える事が可能だし、跡継ぎが必要だということになれば先程話したものではない、ややレベルが低く平和のないハーレムがついてくる」
「じゃ、社長になるっていうのはあくまでハーレムのオマケなのか？」
「先程話したシミュレーションの場合はそうなる」
「なるほどね」
よく考えたら男子高校生が二人で真剣に理想の酒池肉林について

話し合っているさまはなかなか滑稽なものではないだろうか、と想はうっかり気がついてしまった。コホンと咳払いをし、なんとなく出てきた気恥ずかしい気持ちを静めていく。

「ハーレムが必要ならば早いうちに願いを言うといい。時間のかかる願いなので、とりかかるなら早い方が」

「いや、いらねえ。別に欲しいわけじゃないし」

こんなことを聞いたのは単純な好奇心からだ。世の中の若い男の代表的な夢や妄想である「自分のことばっかり大好きチュッチュな美女が仲良くいつでも待ってくれているハーレム」なんて、作れっこないだろうという気分で聞いただけに過ぎない。

「大体どうせみんな、金目当てなんだろ？」

「そんなことはない。先程のシミュレーションで出来上がるハーレムは、皆、諌山　想を心から慕っており、諌山　想も全員を平等に大切に扱う」

「バカ言うなよ。心底嘘くせえぞ」

「わたしは契約者に対し、常に真実のみを話す」

――だからって四十一年も待つかっつーの。

想は鼻でフンと笑うと立ち上がり、夕食を用立てにコンビニへと出かけた。

――そんな長生きしたくねえし。

今日はレジ奥の電子レンジで弁当を温めてもらい、そのままエスポワール東録戸一〇三号室へ戻って、無口なクラスメイトそっちのけで少年は一人、食事を済ませた。

０１１　・　力の証明ができそうな願いを試してみる

「今度の試験で一番取るとかって可能？」

少年は四谷の部屋に寄るのが習慣になっていた。毎日毎日、平日の夕食は狭い四畳半で九八〇円のテーブルの上。黄色の薄っぺらいクッションはますますペラペラになっていて、その上に座っては思いついた願いを言った場合どうなるかを聞いて楽しんでいる。

「一番を取ることは可能で、二種類の結果があるがどちらも諫山想にとってあまり良い結果になるとは言えない」

「取れるんだな」

――まずはそっちが驚きだぜ。

いつも通り、飲み物は一人分だ。新しく出た炭酸飲料の味はちょっと奇抜であまり旨いとは言い難い。

「で、どうなるの？　まずは一つ目」

「一つ目は、ほとんどの生徒が満点を取って一番になる」

「ははは」

アホらしい結果に単純に笑う。

「どんなだよ」

「教師全員が試験の回答方法を全て三択にする。少々極端な出題が多かったせいで、勉強していなかったとしても大半の生徒が正解を選べる程度のレベルの低い試験となり、半数以上の生徒が満点を取って横並びになる」

「そんな奇跡的な定期試験があったら伝説になるな」

「まったくだ」

大真面目な顔で頷く四谷に、お前がそういう風に仕組むんだろうが、という気分になって少年はニヤニヤと笑う。

「もう一つは？」
「通常の試験だが、諫山　想が適当に書いた答えが見事に、悉く正解し一番になる」
「いいじゃんか。何が問題なんだ？」
「普段の授業態度、前回の試験の結果などから鑑みて、教師達は諫山　想がカンニングなどの不正行為を行ったと判断する」
「なるほどなあ。そりゃ、そうなるだろうな」
普段から態度がいいとはとても言えない生徒だ。部活動にも、委員会活動にも参加していない無気力丸出しの生徒がいきなりのトップでは疑われるのも当然だと思われて、想は大きく頷いた。
「じゃあ一番計画はなしで」
「了承した」

そんな願いをした割に、勉強しようとか試験でいい点を取るための努力をする気はさらさらない少年は立ち上がるとこの日も夕食を買いにコンビニへと出かけた。ちょっとカロリーが高めの弁当を温めてもらって再びエスポワール東録戸へ戻る。

「電子レンジも欲しいな」
「電子レンジを用意するには二十三日かかるがいいだろうか」
「長いな」
もうすぐ十月になる。ここに入り浸る気なら、電子レンジよりも暖房があった方がよさそうだ。
「床暖房は無理だよな」
「それはこの部屋の構造的に難しい。賃貸物件なのでそこまでのリフォームは不可能だ」
「この部屋にあったものなら、コタツかな」

――で、コタツで二人、ぬくぬくしながら話すのか？

気持ちの悪いシチュエーションにちょっと苦笑しながら、もう既にぬるくなってきた焼肉を口に運ぶ。
「一番じゃなくていいから、試験でいい成績取るっていうのは？」
「それはもちろん可能だ。諌山　想にとって一番いい結果が出る方法は極めて快適で、誰もが喜ぶ素晴らしい結果がでる」
「それで学年何位になるわけ？」
「三十六位だ」

――しょっぺえなあ。

しかし「普段の自分が不自然じゃない程度にいい結果を出す」としたら、それは実に無難でリアリティのある数字だ。少年は勉学に打ち込んでいるとはとても言えない状態で、当然成績は奮わず、このままいけば留年の可能性が充分考えられる。
このままではマズいかなと考えていたが頑張るのはイヤで、――しかし超幸運に願えば自分の努力は必要ないと言う。

――試してみるとするか。

これが叶えば、超幸運の力とやらの証明になるかもしれない。いまだに四谷が自分を徹底的にストーキングしているただの変態という可能性を払拭できないでいる想は、意を決して不思議なクラスメイトに視線を向けると、こう命令した。
「次の試験でなるべくいい成績をあげられるようにしてくれ」
「お前の願いを叶えよう。この願いは、試験が終了する、今から十五日後に叶えられることになる」

「諌山君！」
次の日の朝の教室で、後ろからかけられたこんな声に想は驚いた。

驚いて振り向くことができずにいると、声をかけた本人はわざわざ少年の前までやってきて膝をつき、顔をしかめている想にひどく哀しそうな表情を見せてきた。

「諫山君、怒ってるんだね……」

仲島　廉はイラっとしてしまいそうな程の大袈裟な「哀しみ」をその顔に浮かべている。

「何をだよ」

「今までの僕をだよ！」

――なんだこれ？

「怒ってないけど」

「本当に？」

四谷にボコボコにへこまされたあの日以来、仲島は実におとなしい少年になっていた。いつも友人たち三人を引き連れて教室の中でバカ騒ぎをしたり、放課後一緒にでかけようよと女生徒たちに絡んではウザい扱いされていたのに、それがピタっと止んで平和が訪れていたはずだった。

「……なんて優しいんだろう諫山君は！　きっと天使のように清らかな心を持っているんだね！？」

想は思わず、四谷の方に顔を向けた。これは一体なんなんだと。仲島が変わってしまったのは間違いなくあの容赦のない制裁のせいだったし、突然のこの展開はもしかして、昨日した願いがかかわっているのではないかという気がしたからだ。そんな余所見をしている少年に構わず、仲島　廉の反省会は続いている。

「今までの僕は本当に、本当に最低だったよ……。諫山君がいつも一人でいるのを見て、友達がいないかわいそうな奴だとか、流行にまったく興味のないダサい奴だとか考えては小馬鹿にしていた！　なんて品性下劣な男だろうか、この僕は！　しかし君はそれを責めない！　責めようとしない！」

「うるさい」
「いいや、謝らせてくれ。この僕の愚行を！　これまでの一切合切を！」
「もういいって」
心底うんざりしてため息をついた想に、仲島は更なる追い討ちをかけてきた。
「いくらでも罵ってくれて構わないというのに、君はそれをしないんだね……。なんて、なんて素晴らしいよく出来た人なんだろうか……っ！　君という男はっ！」
とうとう涙をこぼし始める仲島と、学校一のウザキングを泣かせた想に教室中から視線が集まる。
「馬鹿、さっさと自分の席へ帰れよ」
ついでに四谷の方を見て、こいつを何とかしてくれ！　と心の中でシャウトしてみる。
『今はなるべくいい成績を取るという願いを叶えている最中だ。仲島　廉をどうにかするという願いを並行して叶えることは出来ない』
こんな声が頭の中に響く。それは四谷からのテレパシーか何かだったのか、それとも、彼がこう言うであろうなという想像が心に浮かんできたものなのか。
とにかく、おいおいと泣く仲島をどうにかすることはできなくて、しばらくこの馬鹿馬鹿しい茶番劇は続いた。仕方なく頬杖をついたまま我慢していると休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴り、とうとう仲島が立ち上がる。
「いや、すまない。みっともないところを見せたね」
「ホントにな」
「諫山君、君に、今までのお詫びをしたい。そして、素晴らしい人格者である君と、改めて友達になりたいんだ！」
「断る」
仲島の目がカッと開いた。わなわなと震え、目に涙をためたものの何も言わずに自分の席へと戻っていく。

――恐ろしくうぜえ。

授業が始まり、教師がけだるげな足取りで入ってくる。チラリと後ろに目をやると、仲島は祈るように手を組んで、下を向いたままじっと動かない。

容赦ない少年の「お断り」にすっかり意気消沈して、「改めてお友達計画」は頓挫したものだと思っていたら違っていた。授業が終わり放課後になって、仲島はダッシュで再び想の前へやってくると、とびっきりの眩しいおひさま的な笑顔を見せて叫んだ。

「諫山君！　今日、うちに遊びに来てくれたまえ！」

「……はぁ？」

顔の中心部にかなり力を入れて不快な気分を表現してみたものの、仲島には通じなかったようだ。

「もうすぐ試験だろう？　うちに凄腕の家庭教師がくるから、一緒に勉学に励もうじゃないか」

「お断りだって」

明確に返事をしたはずなのに、笑顔の仲島に腕を取られ、思いっきりひっぱられてしまう。

「おい、やめろ！」

「今日は夕食もご馳走になっていってくれたまえ！　シェフに腕を奮ってもらうから！」

とんでもない馬鹿力に引きずられて教室から出るところで、四谷と目が合う。

いつも通りの無表情に歯を剥いて抗議をしてみたが、残念ながら特に返答はなかった。

０１２　・　願いが並行して叶うかどうかの確認

校門の前にとめられていたやたらと長い高級車に無理やり押し込まれて連れて行かれた仲島家は、それはそれは立派なものだった。高い塀に囲まれていて全貌を外から確認することはできず、車が止まったかと思いきや、幅の広いやけにゴージャスな飾りのついた門はなんと自動で開くという代物だ。

自分がいることがあまりにも場違いに思える豪邸の中には、本物のメイドと執事が並んでいた。今流行のメイドさん風サービスの店にいるものではない、ガチのメイドと執事。

「坊ちゃま、お帰りなさいませ」

「今日は新しい友人を招いたぞ！　諫山君だ！」

――友人じゃねえし！

あのウザキングがまさかこんなお坊ちゃまだったとはという意外な気分はあったが、それよりも「お友達」扱いされるのが不本意で想の顔は暗い。しかしメイド軍団はお構いなしで少年のカバンを受け取り、背中を押すように応接間らしき部屋へ案内して、お茶だのお菓子だのを次々と運んできた。

大きくて立派なテーブルの向こう側には暖炉まで見える。体が心地良く沈みこむソファには、豪奢な刺繍が施されていて見るからに高価そうなカバーがかかっている。もし汚しでもしたらクリーニング代がいくらになるかはまったく想像がつかない。壁にはゴテゴテとした額にはまっている絵が並んでいて、描かれた人物たちはみな揃ってドヤ顔で、どうだい諫山君？　と呼びかけてきているかのようだ。

「まずはお茶をどうぞ、諫山君」

「……ああ」

仲島の口からペラペラと紅茶に関する薀蓄が語られている。テーブルの横にはメイド軍団が並んで、お菓子を並べていく。

「遠慮なく食べてくれ。うちのシェフが腕を奮って作ってくれたんだ。夕食も一緒に、ぜひ！」

仲島の後ろにいる白髪の執事っぽいおっさんも、笑顔で頷く。

「いつものお友達はどうしたんだよ。なんで今日は、俺なわけ？」

仲島にはいつも一緒の、通称「三クボ」――小久保、窪山、奥掘――がいるはずだ。

「彼らのことはもう言わないでくれたまえよ！」

「なんかしゃべり方変わってない？」

「変わったとも！　彼らは結局、僕ではなく、後ろのメイドたちが目当てだったんだ！　気がついたんだよ、諌山君。彼らは僕をお財布扱いしているだけで、なんの友情も感じていないってことをね」

「ふはははは」

やけに真剣な顔で話す仲島の様子がおかしくて、想は思わず声をあげて笑ってしまった。

「あの、四谷君に言われた日に気がついた。僕には真の友人と呼べる存在はいなかったとね。みんな、僕の背後にある大きな力に群がる亡者だったんだ。そんな偽りの友情に意味はない。これからは本当の友情を育む努力をしようと僕は決めたんだ！」

「で、なんで俺？」

「君は何にも興味がなさそうだったから。君だけは色眼鏡なしで、僕の事を、まっすぐ僕自身、魂そのものを見てくれそうな気がしたからさ！」

――うっぜえ！　マジでうっぜえ！！

少年の心の中でムカつきは大きくなり、その怒りはしかし仲島ではなく、四谷に向けられた。

彼は言った。仲島　廉は大いに反省し、想を不愉快な気分にさせることはなくなったと。それがどうだろう。今の少年を構成しているのは、イライラとムカムカ。この二つの成分が主ではないか。

眉間に皺を寄せているそんな想の鼻先に、ふんわりと優しい香りが漂ってきた。

視線を落とすと、上品なティーカップには飴のような色の液体が注がれている。そこから漂う香りが鼻をくすぐるたびに気分が妙に落ち着き、少年は思わず手を伸ばして一口、飲んでしまった。

「……うまいな」

「お口にあいましたでしょうか」

横に控える若くてやたらと美人なメイドさんが微笑む。

――くるしゅうない、って、こういう時に言うんだな。

飲んだついでとばかりに、お茶菓子にも手を出すとこちらも極上に美味だった。普段スイーツなど嗜まない少年の全身に、口から入った幸福が心地良く広がっていく。

「これ、家で作ってんの？」

「そうだよ。シェフが作ってくれるんだ」

「すげえなあ。こんな美味いの、初めて食ったかも」

諫山　想は世界に何の期待もしていない無気力な少年だったが、根は割と正直で、いいものにも「くだらねえ」などと難癖をつけたりすることのない素直さを持っていた。目の前に繰り広げられたスイーツの天国にもあっさりと白旗をあげてその魅力に敗北宣言を出し、仲島家おかかえのシェフ自慢のお菓子を思う存分味わう。おかげで今日からできた新しい友人も、その後ろに控える召使い軍団もみんな笑顔だ。

「喜んでもらえて何よりだよ」

「悪いな、なんか」

――お友達になる気、ゼロで。

「いいんだよ。諌山君、今までのお詫びだ」

「サンキュー」

散々おやつの時間を満喫した後は、腕利きの家庭教師が待っていた。そういえばそんなこと言ってやがったな的な、まったく気の乗らないお勉強タイムがスタートする。

余計なお世話としか思っていなかったその時間も、なぜかやたらと快適だった。座りやすい椅子に、優しく丁寧な講師の教え方は自然と頭の中に染み込んでいく。あんたが学校の先生だったらみんな国立大学に合格できんじゃないの？　なんて考えながらも、理解できる喜びで少年の手はよく動いた。

適度に頭を動かした後は、これまた豪華なディナーが待っていた。仲島家の両親が現れたりする余計な展開もなかったので、少年は気楽な気分でリッチな夕食を味わう。

「どうだろう、諌山君。僕の家の夕食は」

「サイコーだな」

外食で同じものを頼めば、一体いくらになるのだろうか。

タダ飯、タダおやつに、タダ家庭教師。なるほどこいつは快適だ、と想はふっと笑い、最後のデザートまできれいに平らげる。

「じゃあ家まで送ろう！」

学校帰りに無理やり乗せられたながーい車に今度は自ら乗り込み、少年がご機嫌な笑顔で仲島君に手を振ると車は自動で開く門から出て、諌山家のあるマンション前まで大切なお客様を送り届けた。

運転手に礼を言って車を見送ると、想は自宅ではなく向かいのアパートへ移動した。

「諌山　想、何か質問があるのだろうか」

「ああ。あるぜ。さっき思い出した」
ゴージャスアンドゴージャスな仲島家に比べて、恐ろしいほど粗末な四谷の部屋。しかし、こちらの方が落ち着くのはやはり小市民の証だろうか。そんな事を思いつつ、ぺしゃんこなクッションの上に座って想はこう切り出した。
「あいつん家、何なの？」
「仲島　廉の父親は仲島重工という大会社の社長だ。その経営は」
「ああ、いいや。細かいところは。ま、ボンボンってことなんだろ、要は」
「その通りだ。仲島　廉は一人息子なのであの高校にも実はボディガードが潜んでいる」
「マジか。その割にあいつ、だいぶバカみたいだけど？」

――大体、なんであんなレベルの低い公立高校通ってんだよ。

「家柄と知力は比例するとは限らない。また、ごく普通の公立高校を選んだ理由は特別に存在する」
「何それ。そんな大層な理由があるわけ？」
「これ以上は話すことができない。仲島　廉に関する秘密事項を話すことは彼の身の安全にかかわることであり、また、私は願いに関する質問以外は必要以上に答えることはしない」
「そうだったっけ？　今までもそうだった？　なあ、どうだった？」
「私は探偵ではないし、諫山　想の便利屋ではない」
大真面目な顔で言い放つ四谷の顔はいつも通りだが、なんとなくちょっとだけ厳しいものがあるようにも感じられる。あーそうですか、と小さな声で呟くと、想はこのことに関する追求は諦め、思い出した肝心な疑問について質問をすることにした。
「あのさ。俺の母親の料理の腕をあげる願い、ちょっと前に二ヶ月かかるって言ってただろ。それと今、試験の成績をあげる願い、同時進行になってねえ？」

仲島家の長いリッチな車の中は快適そのもので、そのおかげで食べた夕食の美味さを思い出したところでこんな疑問が浮かんできた。願いは常に一つというルールだったはずだ。もしも前の願いが取り消されるのならば、四谷はそれに関して注意をしてきそうなものなのに。特に何も言わずに新しい願いを叶えると確かに言ったし、その成果は今日はっきりと実感できている。

「結論からいうと、同時進行にはなっていない」

「なんでだよ。二ヶ月かかるって言っただろ。まだ一ヶ月も経ってねえし。実はいくらでも同時進行できるんなら隠さずに言えよな」

「……一つ目の願いに関しては、実はもう叶えられている。その成果がはっきりと実感できるのが二ヵ月後というだけで、それを知ることで諫山　想が感じる幸せがかなり減ってしまうのでこの事は伏せてあった」

「もう叶ってる？」

「そうだ。これ以上は、今知る必要はない。なので言わなかった」

「なんだよ。何かあるのか？」

四谷は知らん顔で黙っている。その澄ました顔が妙に癇に障って、想は顔をしかめた。

「言えよ。なんだよ」

「未来の幸福に関して、それが減ることはわれわれにとって喜ばしくないことだ。その時を待っていてほしい」

「バカ、幼稚園児じゃねえんだぞ？　サプライズとかホント必要ないから」

少年は散々食い下がったが、結局四谷はいつも通りの無表情で待ち受ける将来に関する暴露をすることはなかった。

０１３　・　シミュレーション通り叶えられた一つ目の願い

すっかり別荘と化している四谷の部屋から出て、帰宅する頃にはもう時間がだいぶ遅い。諫山家では両親が揃って息子の心配をしていた。

「想、どこに行ってたの？　もう九時過ぎよ」

「……ちょっと、新しいお友達のところに寄ってただけ」

思いがけない単語が飛び出したせいか、父も母も少し驚いた顔をしている。

――俺に友達とか、信じられないのも無理はないな。

少年にそんな素敵な誰かがまともにいたことなど、過去に一度だってなかったのだから。

「新しいお友達？　なんていう子？」

「仲島ってやつ。もうすぐ試験だから一緒に勉強しようってさ」

「へえ」

母の顔がぱっと輝く。できれば優秀な子に育って欲しいという親の勝手な願いは、今までに叶えられる気配がひとかけらだってなかった。それがここにきて、友人はできるわ、ご飯はご馳走になって帰るわ、試験のために努力しちゃうわでとんだ超展開を見せている。

「ご飯も頂いたんでしょ？　じゃあ、お礼のお電話しなくっちゃ！」

「はあ？　いいよ、そんなの。あっちが勝手に来いって無理やり連れて行ったんだから」

大体、仲島の家の住所も電話番号も知らない。どうやら学校から車で二十分程の距離にあるらしいということ以外はわからない。

想が手をひらひらと振って自分の部屋に戻り、制服を脱いでいるところにドアを叩く音がした。

「想」

今までと違って、ノック付きになった。そこは評価してもいい。
しかし、返事をする前に扉を勝手に開けるというのはどうだろう。
そんな風に考える少年の母を見る表情は自然と厳しいものになる。
「何？」
「あのね」
年頃の息子の部屋のドアを勝手に開けただけでは飽き足らず、母親は中に踏み込んできて軽く笑顔をみせてきた。
「この間、ちょっと落ち込んでたみたいだったから。何があったのかなと思って」
「……別に、何にもないけど」
「嫌なことがあったって、言ってたでしょ」
――言ってねえし。
確かに、父に嫌なことがあったのかと聞かれた時に頷いてはいたが。
「もしかして、学校でいじめられたりとかしたのかなって思って」
「そういうことはない」
――苛められるほどの付き合いがある奴もいないし。
「もしかして、新しいお友達に助けてもらったとか」
「違うよ。全然」
「じゃあ、もしかして……彼女とケンカしたとか？」
この母の言葉に、想は思いっきり大きなため息をついて抗議をした。
「そういうのもない」
「本当に？」
少年は早く出て行ってほしい一心で、うんうんと黙ったまま頷く。

――原因はアンタだっつーの。

ちょっと冷たい視線を送ると、母はそっか、と小さく呟くように言うと部屋を出て行った。

――今までの態度、反省しましたってか？

いつものようにパソコンのモニターの前に座る。映し出されるたくさんの情報をぼんやりと見ながら、想は考えた。

――少し前まで、俺のことを心底迷惑に思ってたんだよな。

しかし今は、違う。今までまともに向き合おうとしなかった息子と、正面からぶつかろうとしているように思える。

――ああ、だからか。だからかえって、こんなに優しくなったんだな。

息子の人生が自分の将来の邪魔になるとまで思いつめていたからこそ、久しぶりに長い眠りから覚めた「母性」の影響が強いのだ。邪魔者扱いして悪かったとか、自分はなんと恐ろしいことを考えていたのだろうかとか。マイナス要素が強かった分、今、はりきってしまっているのかもしれない。

そんな結論がこれまたうざったくて、少年は再度大きなため息をついた。いつもピリピリとしていて息子へかける言葉は小言だけ、よりはマシかもしれないが、急に可愛い可愛いみたいな扱いをされるのも正直、気持ち悪い。

――ぼくのおかーさんがウザイんですけど。

しかし、四谷にはまだ頼めない。願いの同時進行が無理だというなら、今は試験対策を優先すべきだ。

やれやれという気分でマウスを動かし、ふっと思い立って想は検索エンジンの小さな窓に「仲島重工」と打ち込んだ。あっという間に立派そうなお堅い企業のホームページが出てきて、その中の会社概要とか沿革とかなんとかを順番にクリックしてみてみると、なんだか想像を絶する数字がぞろぞろと現れた。資本金とか、経常利益とか、従業員数とか、グループ会社の案内とか。

――あいつん家すげえんだな。息子はあんなにアホなのに。

今日出来た新しいお友達と、そのお家と、美人揃いのメイドたち、極上のお食事を思い出す。口の中についさきほどまで広がっていた味の豊かさときたら、少年の想像をはるかに超えた、天上の世界のものと位置づけていい程だった。

――たとえば、あいつと俺の生活、まるまる入れ替えて、なんて願いも叶うのかな。

そう考えて、少年はふっと笑った。

そんなことをかけらも望んでいないのに、なんでそう考えたのか。自分の俗っぽい考えが少し、可笑しい。

「諫山君！　今日も、うちに寄って行ってくれたまえよ」

朝、教室へたどり着くなり、尻尾を振った可愛らしいボンボンが駆け寄ってきた。

「いいぜ」

「良かった。昨日、あまり楽しそうではなかったように見えたから。何か粗相があったか心配していたんだよ」

「粗相なんかないだろ」
実に完璧だったメイドさんたちの様子を思い出す。一人ばあさんが混じっていたが、それ以外はみな若くて、しかも美人で上品な笑顔の持ち主ばかりだった。動作も丁寧で声も落ち着いていて、文句をつけるところなどありゃしないじゃないか、と。

仲島のアツい友情以外は心底快適なボンボンのお友達体験を、想は思う存分楽しんだ。
土日もお迎えが来るからというだけの理由であっさりと招かれ、お茶菓子を堪能し、家庭教師から知識を吸収して、夜はディナーに舌鼓。

気がつけば、試験の日程は無事に終了していた。以前は面倒くさくて問題用紙に目を通すことすらやめてやろうかと思っていた程なのに、今回の諫山　想は違う。あれ、これ知ってる！　うん、知ってる！　みたいな雰囲気でペンが走る。
帰ってきた答案にはかつてない程の赤い丸が踊っていた。もちろん満点にはまだ遠いが、一学期にやる気のなさの塊が受けた時とは比べ物にならないほどの高得点だ。

答案用紙を渡してくる教師の顔も明るい。
「諫山、今回は随分頑張ったんだなあ」

――うるせえよ！

そんなことを思いつつ、内心はほんのりと嬉しい。それに気がつくとなんとなく恥ずかしくて自分にムカつきを覚えるが、毎回こうなら留年の危機はないだろうし、大体、仲島家の食事は最高に美味だった。

つまり、今回の願いが叶ったのは、とても良い事だった。

目をキラキラさせて自分を見つめている仲島を無視して、想は放課後になると即、教室を飛び出して自宅への道を駆けた。時折後ろを振り返っても、四谷の姿はない。つかず離れずなんじゃないのかよ、なんて考えながら帰宅の前にエスポワール東録戸の一〇三号室に勝手に入ると、いつの間に追い越されたのか超幸運は安物のテーブルの前に座って契約者の少年を待っていた。

「何か願いか質問が出来たのだろうか、諫山　想」

「お前、瞬間移動でもしたの？」

「そんなことはしない。この体は地球の物理的な法則に従う」

じゃあ屋根の上でも走ってきたのだろうか。教室は一番に出たはずだと思ったが、想のその認識の方が違っていたのだろうか。

「まあいいや。願い、叶ったな。マジで三十六位だったぜ」

「満足してもらえて何よりだ」

久しぶりの四谷の、いつも通りの無表情。

毎日仲島家でリッチ体験をしている間、ここに寄る事も教室で話す事もしておらず、想が真正面からこの顔を見るのは二週間ぶりだった。

「でもさ、これが本当にお前の力なのかの証明、できてないよな。ただ単に仲島の気まぐれって可能性も充分考えられるだろ？」

「われわれとしてはそれで構わないと考えている。小さな偶然を重ねるというやり方をしているのは、契約者が出来る限り違和感を感じず、生活や日常が普段どおり進行することを優先しているからだ」

「これでお前が強がってるだけだったらマジでウケるな！」

四谷がちらりと想に視線を向けてくる。しかし、やっぱりいつもの無表情だ。

「で、仲島と俺の麗しい友情はいつまで続くわけ？」

「それは諫山　想次第だ。仲島は諫山　想のことをもう既に心からの親友だと信じている」

「うっぜえええ！」
ケラケラと、珍しく大きな声で少年は笑った。体を反らせてしばらく愉快そうに声をあげて、それをピタリと止めるとニヤッと口元を歪める。
「さりげなく部屋がグレードアップしてるじゃないか」
実は先日までちょっと落ち着かないかもしれないと思っていた原因である「外から丸見えだった窓」にはカーテンがつけられていて、部屋の隅にはファンヒーターが置かれている。冷凍機能はないタイプのようだが、小さな冷蔵庫も台所に現れているし、部屋の隅に置かれたカラーボックスには何枚かタオルが入っている。ついでに、部屋の隅にティッシュ箱がちょこんと用意されていた。
「諫山　想はこの部屋がどこよりも落ち着くようだったので、快適性を少し向上させておいた」
「その割に、どれもこれも安っぽいもんばっかりじゃんか。あんな色のカーテン買う奴そうそういないぜ？」
センスの悪い赤紫色のカーテンをどこで仕入れてきたのか、指をさして笑う。
しかし、こんな悪態をつかれても四谷の表情は変わらない。
少年はそれに安心すると、次の願いを何にするか検討するために、まずはコンビニへ本日のドリンクを買いに出かけた。

０１４　・　超幸運たちに定められたルールについて

最近の少年の放課後のパターンは二種類。仲島家にご招待されるか、四谷のボロアパートでだらだらと過ごすかのどちらかだ。

本日は自宅向かいのアパートでいつも通り、新商品のドリンクをチビチビ飲みながら超幸運に話しかけたりちょっと雑誌を読んだりしながら過ごしている。

「何か質問だろうか、諫山　想」

「今夜のサッカー、どっちが勝つ？」

「今夜のサッカーとはどこの国で何時から開催されるもののことをさすかわからないが、どんな試合の結果も私にはわからないし、教えることはできない」

少年が聞きたいのは、もちろん日本とよその国の代表が争う、普段はサッカーなんか興味がないみんなが何故かワクワクしながら深夜まで放送を見てしまう国際試合のことだ。

「なんで」

「未来の事はすべてが未確定だからだ」

秋が深まり、外を吹く風はもう冷たい。エスポワール東録戸の一階の窓から見える風景は寒々しく、葉がほとんど落ちた細い木の枝は力なく揺れている。

「へえ」

いつも通りの無表情で話す四谷に、想はちょっと冷たい視線を向けた。

――四十一年後に理想のハーレムが作れちゃうのに？

「なあ」

口に出さない疑問には、返答はない。
「ホントはわかるんだろ?」
「いや、わからない」
「いいじゃんか。教えろよ」
「諌山　想が本気で知りたいと思っていることと、叶えたい願いがある場合以外の未来についての質問には答えることはできない。私が願い以外の未来について言及した場合、必ずそうなるよう手を加えなくてはならないからだ」
この返答の前半部分にまず、想は少しだけ恥ずかしい気分になった。確かに今夜のサッカーの試合がどうなるか、少年は真剣に、心から知りたいとは思っていない。ただ単に国際試合になると周りがわあわあうるさいので、どうなるのかを知っておきたかっただけだ。
しかし、今の四谷のセリフで重要なのは明らかに後半部分だった。
「必ずそうなるように手を加えるっていうのは?」
「そういうルールになっている」
「なんで」
そう聞いて少年が飲んだ本日のドリンクは、秋らしい洋梨風味のジュースだ。爽やかな甘み!　と商品ロゴの下に書かれているが、そう感じる前にやたらと味が薄いことの方が気になる。
「われわれは契約者の願いを叶えるが、単純な命令を受けたり、未来について予言をするような存在になってはならないからだ」
「だからなんでよ」
「未来を話すことは、契約者の自由な発想を妨げてしまう。よくないことの回避ばかりに目が行き、純粋な願いを叶える機会を逸してしまう恐れがある」
今日の新商品は失敗だったな、という気持ちになりながら、想は四谷を見つめた。
いつも通りの青白い顔を見ていると、ああ、もうすぐ冬が来るな、なんていう気分になっていく。

「……じゃあさ、あの時俺が、母親をなんとかしてよって言わなかったら、もしかしてもう死んでた？」
「何の願いも言わなかった場合はそうなっていただろう」
「へえ」
口元をへの字に歪めて、少年はテーブルの上に置かれたボトルに視線を落とす。
「超幸運なのに、契約者が死ぬの、黙って見ちゃうわけ？」
「その通りだ。なので、諫山　想があの願いを言ったのは幸運な事だった」
――すげえ皮肉だな。
想の中にさまざまな考えが浮かぶ。
いや、本当に死んだかどうかなんて、わからないぞ、とか。
超幸運に出会わなければ、もうとっくに終わっていたんだな、とか。
しかしそれはどうでもよくて、聞きたいのは明確な返答を得られていないこの部分だった。
「でも、未来はわかるんだよな、お前には」
「人々の運命は常に動いている。どこでどう動くか、確実なことはわからない」
「俺が死ぬっていうのは？」
「あの時点での諫山　想の死はほぼ確実だった。しかし、それが一〇〇パーセントだったかと言われればそれは違う。運命を大きく動かす出来事が起きる可能性は常にある」
「呆れたな。なんだよそれ。確実かわかんないならちゃんとそう言っておけよ。しかもそんなこと言ったら、願いを叶えるっていうのも信じられなくなるじゃねえか。シミュレーションが当てにならないってことだろ？」

思わず眉間に皺を寄せた少年に、急に四谷がまっすぐと視線を向けてきた。いつもは暗い瞳が、ギラリと輝く。

「一度聞き入れた願いに関しては確実に叶える。願いを叶えている最中ではない場合の未来については確実ではないということだ。可能性は非常に低いが、予想できないタイミングで大きな運命の渦ができることがある」

「天変地異とか？」

「他の超幸運との契約者が現れた時だ」

――意外なお答え！

「超幸運は人の運命を動かす。どんな小さな願いであったとしても、多くの人生に波紋をなげかけることになり、影響を与える。その余波は、思いもよらないところまで広がる」

「大袈裟じゃね？」

「そんなことはない。地球の裏側で起きたことでもその波紋は多くの人間を介して広がっていく。ここまで届く可能性も充分ある」

「ふうん」

興味なさげな少年に、四谷はいつもより少し強い口調でこう語った。

「諫山　想がその寿命を延ばした事で、その家族の運命も大きく変わった」

死にたいと願った場合どうなる？　という疑問に対して、人が死ぬというのは大変なことだ、と超幸運は言った。考えてみれば、その通りだ。特にそれが、人の手によるものだった場合。

「そっか」

自分の運命が変わらなかったら、警察だって出動するだろうし、

友達が一人もいない奴だとしても記者やらテレビカメラが学校にも来るだろう。犯人である母親や、その不倫相手、そして父親、祖父や祖母をはじめとしたそれぞれの家族……。

あるはずだった多くのものが、丸々なくなった。

「そうだな」

なるほど、この影響は大きいだろうと少年は考える。

「だからなるべく『いい方向に』ってポリシー持ってるわけか」

「その通りだ。われわれは契約者の願いのためを第一に考えるが、その他の人生を犠牲にすることはできるだけ避けている」

「……他人の幸せなんて、望まない奴もいるんじゃないの？　嫌な気分になる奴もいるだろ」

この少年の言葉に、珍しく四谷は小さく微笑みを浮かべた。

「諫山　想は面白い奴だ」

そんな感情表現をしてくることが意外に思えて、想はちょっと気が抜けた顔で目の前の美しい微笑を見つめる。

「どこが？」

「人の幸せどころか、自身の幸せにも興味がないのに、そんな質問をしてくる。人間はいつの世も、不思議で不可解だ」

超幸運はふっと目を閉じ、再びゆっくりと開けると微笑を引っ込めていつもの無表情に戻った。

「あのさ」

そんな四谷に、改めて浮かんだ疑問をぶつける。

「他の超幸運との契約者が現れた場合、元々してあった願いがあったらどうなんの？　やっぱ無理とか、かかる時間がかわるとかそういう事もある？」

「それはない。互いに邪魔を入れることは許されていないので、うまく調整する」

「なんか金は無茶苦茶するって言ってたじゃんか。大丈夫なの？」

金の超幸運

――例えば、地球の支配者になりたーい！　なんて無邪気な願いも叶えちゃうのか？

「金（きん）であっても邪魔をすることは許されない。わたしは諫山　想の願いを必ず叶える」

「頼もしいね」

妙に力強い言葉に、想もふっと笑う。

「世界征服したいとか、金（きん）なら叶えちゃうの？」

「叶えようとはするだろう」

四谷の言葉はそこで終わった。その後の沈黙の意味を、少年はしばし考える。

――世界を征服ったって、どうやってするんだって話だよなあ。

地球上に数多く存在する国を、一つにできるのか？　言葉は？　人種は？　どうやってこの世の支配者だと、全人類に浸透させる？

「無理っぽいけど」

「方法は必ず見つけ出すだろう。金（きん）ならばそれを提案する。しかしそれが果たされるまでの道のりに潜む危険に関しての警告も、身の安全の保障もない」

その願いへの道筋の途中に隠れている落とし穴の数は……。想像すると、無限大以外の答えが出てこない。

「やっぱ無理じゃね？」

「そうだな」

「その辺どうなの？　超幸運としては」

あっさり認めた超幸運は、少し視線を落としたままこう答えた。

「叶えるまでの経過にこそ、充足感を感じる願いもあるだろう」

それは確かに、真理だろうなと少年は考えた。夢や希望は叶えるまでの苦労がどうのこうの……というところに差し掛かったところ

で自分のつまらない思考にガッカリし、意地悪な気分になって四谷にツッコミを入れる。

「……それ言っちゃうとさ、超幸運の存在意義に係わってくるんじゃないの？」

「その通りだ。だからこそわれわれには、方針の違いなどの個性がつけられている」

答えになっているようないないような返答に、想は顔をしかめた。すっかり常温に戻った洋梨ジュースを喉に流しいれ、この商品は二度と買わないぞと心に決める。

「ちなみに今のままだと、俺の寿命って何年くらい？」

「それを答えることはできない。不確定な将来に関する安易な発言は、契約者の自由な発想を妨げることになる」

案の定な答えに、少年はいつも通りの返事をかえす。

「あっそ」

「最初にされた質問に答えよう。私が願い以外の未来について言及した場合、必ずそうなるよう手を加えなくてはならない。契約者に嘘をつくことはできないからだ」

「言っちゃった場合は、つじつまあわせしないといけないとか？」

「その通りだ。だから、未来に関して予言のような発言をすることはしない。未来を作っていくのは人間の仕事であり、われわれではないからだ。迂闊に未来に関して言及し、必要のない運命を操作することは許されていない」

――で、結局未来はわかんないってこと？　本当は……。

超幸運は未来を見通せる。四谷の話はそう捉えられるように聞こえた。

しかし、きっとこの質問に関しては明確な答えが得られないだろうなと考え、少年は口を噤む。

——超幸運にも、本音と建前があるってことかな。

意外とお役所的だと考え、想はニヤニヤと笑った。

大体、言っていたではないか。できるけど、やらない。そんな、強がっているだけの小学生みたいなことを。それを思い出すと、ますます愉快な気分になっていく。

一気に通常運転に戻って、エスポワール東録戸には静寂が訪れた。

もう外は暗い。じっと正座をしている四谷を残して、想は今日も夕食を用立てに近所のコンビニまで出かけた。

０１５　・　高校生の極めてノーマルな日常

レインボー２４南録戸三丁目店（トゥエンティフォー）は想の家から一番近い距離にあるコンビニエンスストアだ。広めの店内は新商品が毎週のように入荷されてくるし、業界一位なだけあって弁当はどれも美味。「毎日違うお店の味を試した～い」などという類の希望のない想にとって、ここさえあればすべてが事足りる、と思える便利な場所だった。

タルタルチキン弁当と、そのお供に緑茶も手に取って想はレジへと向かう。今はキャンペーン中で、弁当とドリンクがセットで五十円引きだ。おかげで夕方の店内はいつもより少し混み合っていて、店員の前には列が出来ていた。

――四谷（あいつ）の奴、なんか隠してるよな。

結局疑問は何も解決していないよな、と少年は考える。

――何でも真実を答えるとか言うくせによ。

例えば、超幸運がいつ契約者と出会うのか。それも「わからないこと」なのだろうか。

改めてそんなことを考えながら、列が進むのをじっと待つ。

――まあ、あいつも神様ってわけじゃないとかそういうことか。

じゃあ自分は「神」なんてものを信じているかと言うと、それは違う。想は思わず、ニヤリと笑った。では「超幸運」は信じるのか？　自分は、信じているのだろうか。

――面白いとは思うけどね。

母親の態度の変わりようは？　確かに、手料理攻撃は収まってる。仲島家に招かれてお坊ちゃまの御友人ごっこに至った事は？　成績だって、どんぴしゃの三十六位。

――警部、これは、信じるに足る証拠になるのではないでしょうか！

仲島の家に招かれた時に見た、クラブスマイラーズのコントのセリフが浮かんできて、少年の口から今度はため息が出てきた。中に入ってしまえそうな程の巨大なテレビで二時間もＤＶＤの上映会をされて、本当に疲れた。昨日の忌まわしい思い出に、しかし今度は笑いが出てくる。隣で涙を流しながら笑い転げる仲島は、気取ったお坊ちゃまの設定はどこへやら、やっぱりアホなウザキングだった。

「お弁当あたためますかー？」

列はのろのろと進んで、ようやく想の順番がまわってくる。今日はやけに時間がかかると思ったら、どうやら新入りの店員のせいだったらしい。

見覚えのない、頭の上の方で二つに結ばれているピンク色の髪。濃いメタルピンクのシュシュが店内の照明を受けてギラギラしている上、女児向けの猫のキャラクターの小さなぬいぐるみがいくつも飾りつけられてる。

――頭わるそー。

自分だって大した頭脳の持ち主ではないのに、少年は冷めた気分で新入りの若い女性店員にそんな感想を持った。

「お弁当あたためますかー？？」

「はい」
タルタルチキン弁当を渡し、ポケットから財布を取り出す。
「あたためますかー！？」
思わず顔を上げると、ピンクの店員は目を大きく開けて想をちょっと下から見ていた。
「……はい」
声が小さくて聞こえなかったのだろうか。今度はついでに首を縦に振って答える。

――化粧、すげー濃いな。

アイラインとマスカラで黒々と強調された目元。どうやら目を大きく見せたいらしいが、それ以前に目の周囲が黒い怪しげな塊になってしまっていて、魅力とは真逆の印象しか受けない。
真っピンクの唇は、脂っこいものでも食べたの？　と聞きたくなるテラテラ具合で、メイクって一体なんなんだろうね？　と少年に問いかけてくる。

弁当が加熱されている間に代金を払っていると、前方から爆発音がした。
「うわっ！　ちょっと森永さん！？」
ピンクが慌てて振り返る。どうやら爆発したのは少年の頼んだ弁当についていたタルタルソースの袋らしい。
「ソースは外してからって言ったでしょ！」
「すいませ～ん」
レンジの中は悲惨な状態だ。爆発したタルタルソースが庫内のあちこちでしゅうしゅうと音をあげている。
どうやらここからは、いつもより余計に時間がかかるぞと察知した勘のいい客が何人か去っていく。
「すいませんお客様、すぐ用意しますんで」

店長と書かれた名札をつけたおっさんに声をかけられ、少年は小さく頷く。と、思ったらピンクの店員が温め終わった弁当を袋に入れ、ひょいと差し出してきた。
「ごめんね、ちょーっとベタベタするけどハイこれ！」
「ちょっと森永さん！」
すいませんすいません、と店長が謝る。そしてすぐさま振り返り、新人のピンクを連れて店の奥へ去って説教を始めた。かわりに他の店員が慌ててやってきて対応を始めたものの、人手の足りないレジの中は戦争のような状態だ。

結局丁寧に拭いてもらったものの、まだ少しベタつく、添付のソースを失ったチキン弁当を下げてエスポワール東録戸へ戻ったのは二十分後のことだった。

「なあ、レンジに入れても爆発しないソースの小袋作ってくれよ」
「諫山　想がそれを開発するということなら、その願いには十一年と三ヶ月かかるがいいだろうか」
「俺がやんのかよ。くっだらねえ願いだな、それ」
四谷はいつも通りの無表情で、少年に確認をしてくる。
「叶えるのか？」
「なしなし。じゃあさ、この世のすべてのコンビニ店員がソースをレンジで爆発させないようにしてくれ」
「その願いはこれから先にレンジで爆発しない小袋が開発され、すべてのコンビニエンスストアで採用されるようになるまでずっと叶え続けるという状態になり、終了するまでに十九年と八ヶ月かかるがそれでもいいだろうか」
「もっとくだらねえな」
大真面目な返答にハハと声をあげて笑い、想は超幸運にこう答えた。
「それもなしで」

「了承した」

――何か、大発明が出来るってのはいいかもしれないな。

くだらない願いだと思ったが、よく考えてみればそういう新しい発明というのはなかなかいい発想ではないだろうか。少年は、何か自分にとって素晴らしくいい新商品はないか考えながらチキン弁当を口に運ぶ。

いつも通り、四谷はテーブルの向こうでじっと正座したままだ。超幸運は必要ないとはっきり断言した通り、一度も食事をする姿を見せたことがない。

「お前、マジで飯、食わないの？」

「必要ない」

学校での昼休みにも、四谷は教室にいることがなかった。

――こっそり便所飯とかしてたらマジで受けるんだけど。

「寝るのも必要ないんだよな。夜とかどうしてんの？」

「何もしていない。諫山　想から連絡があった場合に備えているだけだ」

――今度こっそり覗いてみようかな。

実はどこかに布団でも隠していて、夜はぬくぬく寝ているのではないだろうか。

それとも、じっとこの部屋で正座をして座っているのだろうか。

――どっちにしてもウケるわ。……いや、ちょっとホラーか。

結局自分にピッタリの大発明案は浮かばない。そもそも、日常で

それ程不便をしていることもないし、情熱的に欲しいと思っているものもない。

次の日の昼、やたらとゴージャスな重箱入り弁当を仲島と一緒に味わっている間に、想はこんな質問をお友達にぶつけてみた。

「仲島」

「なんだろうか、諫山君」

「お前って、何か夢とかある？　すげえ欲しいものとか」

仲島の目がくわっと開く。

「何そのリアクション」

「いや、諫山君から何か話しかけられるなんて、初めてな気がして」

大きく開いた瞳はうるうるとしている。

――何こいつ。気持ち悪っ！

「いつも僕からばっかり話しかけていたから、もしかして迷惑がられているんじゃないかと思ってたんだ」

「そんなことねえし」

「よかった……。本当に、よかったよ……」

想はちょっとだけ笑う。

――うっぜー！

その内心を知る術もない仲島は、友人の顔に珍しく笑みが浮かんだことに素直に喜んで涙を引っ込めた。そして、嬉しそうに話し始める。

「夢ね。僕の夢、欲しいもの……。そうだなあ、今度やる、クラッカアンドサイダーの単独ライブのチケットが欲しいよ」

「……そんなの、お前なら簡単にゲットできそうじゃんか」

「電話受付が始まってすぐにかけたんだけど、つながらなかったんだよ！　やっぱり人気がすごいから。つながったときにはもう売り切れだった。開始十分で完売だったんだよ？　信じられるかい？　ファンクラブ用の抽選も外れたし、もうお手上げだよ！」

――律儀な奴だなー。

財閥パワー使わないの？　という言葉を飲み込む。もしかしたら、庶民の暮らしを体験しなさいとかなんとか、そういう処置をされているのかもしれない。お家ではお坊ちゃま無双の状態だが、その外の世界では一高校生として暮らしているとか、そんな設定をされているのではないかと想は考えていた。

――普通の高校生は、こんな弁当持ってこないけどね。

何人分と想定しているのか不明な、三段重に入っている四角い何かを口に運ぶ。

「これ何？」

「鴨のテリーヌだよ」

教室の奥の方では、かつての仲島のお友達軍団、三クボ――小久保・窪山・奥掘――がじっとりとした目で二人のお食事風景を見ている。

――悪いね、君達。

ついでに姿を探してみたが、四谷はやはりいないようだ。

「諫山君、もしチケットが取れたら、その時はライブに一緒に行こうじゃないか！」

「お断りだね」

仲島のショックを受けた顔にふっと笑う。

その笑顔をどう思ったのか、お坊ちゃまもなぜかにっこり笑って、二人の奇妙なランチタイムはしばらく続いた。

０１６　・　超幸運が人間社会に紛れる際のルール

仲島家のリムジンに送ってもらい、少年が帰宅したのは午後八時。
両親はまだ帰っておらず、家の中は暗い。

テーブルの上には、いつものように千円札が一枚置かれている。
息子のために料理を用意しなくてごめんなさいという、母からのお詫び代わりの千円だ。
そんな日々が一ヶ月以上続いて、想の手元には使われていない千円札が十二枚。

――思わぬ臨時収入だね。

これほど貯まった理由は、もちろん仲島君の厚い友情のおかげだ。
彼の家に招かれると夕食代はかからない。今日はお友達の家でご馳走になったらからこれは要らないよ、なんて報告をする殊勝さは少年にはなくて、財布は毎日、少しずつ太っていく。
仲島家の説明をするのは面倒くさいことだと想は思っていた。そんなにお世話になっているならお礼を、という話になったらもっと面倒だし、大体あのお宅には何を持っていってもお土産になると思えない。

――あいつが勝手にお招きしてくるだけだしな。

今までのお友達関係にはよっぽど懲りたのか、三クボにはもう見向きもせず、仲島は想にばかりすり寄ってくる。少年はそれに、ちょっとうぜえよ？　気分で微笑みながら答える。
諫山　想と仲島　廉の友情は少し歪な形に、かなりのローペースで、しかし順調に育まれていた。

厚くなった財布をポケットに突っ込んで、少年は深夜の散歩に出かける。ちょっと飲み物を用立てに、いつものコンビニへ。
その前に、マンションのエントランスでふと足を止めた。

――超幸運は、眠らない、って？

エスポワール東録戸の一〇三号室の裏側に回り、狭い庭になっている部分を通って窓の前で立ち止まる。カーテンも閉められているし、中のあかりもついていない。つまり、何も見えない。
と、思ったら、突然窓が開いた。
「うわっ」
「何か用が出来たのだろうか、諫山　想」
薄暗い部屋の中に、青白い顔が浮かんでいる。
「お前、怖えよ」
「諫山　想が尋ねてきたので出迎えた。中に入るのなら、玄関からの方が誤解が少なくて良い」
「いや、用はないから」
そう答えると、四谷は黙ったままゆっくりと窓を閉めた。想も、そのまま庭を通り抜け、レインボー２４へと向かう。

――あいつんとこに泊めてもらえばわかるのかな？

しかし、布団はない。あったとしても、枕元でじっと正座されていたら多分、気持ち悪い。

――まあいいか。

もうすぐ次の日になろうとしている夜の街に、コンビニだけが明るく光を放っている。棚の中に目新しい商品はない。昔からある定

番のコーラを手に取ると、少年は家に帰ってしばらくＰＣの画面を見つめた。

次の日。いつも通り、少年は超幸運の家でだらだらと過ごす。
「宝くじ買って、一等当てるとかっていうのは可能？」
「可能だ」
「すげえな」

――これが一番早いよな。超幸運が本当だっていう証明。

「例えば俺が買う宝くじは、これから先全部当たっちゃうとか、そういう願いも叶う？」
「もちろんだ」

――じゃあ困ったら、そう願えばダラダラ生きていけちゃうな。

ふっと笑う想に、超幸運は注意を促してきた。
「諫山　想、この国で定期的に売り出されている高額当選が見込めるくじに関して、毎回必ず一等を取らせ続けるということはできない」
「何それ」
「不自然すぎるからだ。あまりにも高額の当選が続けば当然何かしているのではないかと怪しまれるし、不必要な危険を招く可能性もある」
「じゃあ例の、オススメしないってやつになるのか？」
「その通りだ」
大真面目な四谷の顔に、想は大きなため息をついた。
「こうるせえな、お前」

――黙って願い叶えてろよ、ホント。

そんなことを考えていたものの、この願いを少年は叶えようと思っていなかった。人生に窮した時の最終手段、くらいでいい。その程度だ。連続して当たる必要などない。

喉の渇きを覚えて、少年は立ち上がった。秋晴れの爽やかな空気の中、いつも通り飲み物を買って再びボロアパートへ戻る。

一〇三号室のドアに手をかけて引こうとすると、突然隣の部屋から誰かが出てきた。

「あ！　こんにちはー！」

構わずに中に入ろうとした想の腕を、隣の誰かが掴む。どうやら今の声は少年にかけられたものだったようだ。振り返るとそこに、見覚えのあるピンクの頭が揺れている。

「こんにちはー。先週、一〇五号室に引っ越してきた森永っていいます！」

コンビニでタルタルソースを爆発させた、新入りの店員で間違いなさそうだ。こんなピンク色の頭はそういないし、真っ黒に装飾された目元も特徴的だった。

「四谷、お客さんだぞ」

掴んできた手を振りほどいて、中にいるクラスメイトに呼びかける。正座をしているかと思いきや、もう玄関まで来ていた超幸運は、現れたご近所さんの前に立つと軽く微笑んだ顔で常識的な挨拶をした。

「彼は僕の友人で、ここの住人ではありません」

「あ、そうなんだ。ごめんなさい」

「四谷です」

「四谷君ね。私、森永（もりなが）　果林（かりん）っていいます。これ、ご挨拶に」

小さな紙袋を差し出され、四谷は素直にそれを受け取る。

「ご丁寧にどうも」

「高校生？　一人暮らししてるの？」
「ええ。では、失礼します」
まだ話したりなさそうなピンク頭を無視して、ドアが閉められる。
部屋の奥で座っていた想は、戻ってきた四谷に笑いかけた。
「お前、何今の。すげえ普通じゃん」
「普通に応対しなければおかしい状況だったからだ。学校でも、教師や他の生徒に対しては今のような応対をしている」
「そうだったっけ？」
四谷が誰かと話している姿を見たことはなかったな、と想は考えた。

――いつもあの口調じゃ、まあ、おかしいわな。

「何もらったの？」
「洋菓子の詰め合わせだ」
超幸運に差し出された紙袋から中を取り出し、包装紙を破って開ける。
「これ、そこのコンビニに売ってるやつだな」
レジの奥の棚には、贈答用の詰め合わせが飾られている。見覚えのある内容に、少年は思わず頷いた。

――店員割引でもあんのかな。

「食っていい？」
「もちろんだ」
安い味のクッキーをかじりながら、いつも通りのだらだらモードに戻る。
「お前、いつも昼ってどこにいんの？」
「人のいないところだ」
「ははっ」

意外な答えに、思わず大きな笑いが漏れる。
「寂しいね四谷君！」
「わたしには食事が必要ない。食物を体の中に入れても消化されないし、後に処理をしなくてはならないので体内に何か入れる事は必要ない限り避けている。しかし、何も食べずにじっと席に座っていると周囲が心配などの反応をするので、毎日昼休みの時間は人の目がないところに移動している」
「へえ」

――何でもできるなら、ご飯のフリなんかも簡単そうだけど？

想がじっと見つめると、四谷は続けて更に「お昼に不在の理由」について話し出した。
「諫山　想、私の体は毎年二月十七日に入れ替わる。来年の二月になれば『四谷　司』はいなくなるので、普段からあまり記憶に残らないよう、人との交流は極力しないようにしている」
「……お前、なんでもできるんだろ？　自分のことだけみんなの記憶から消しちゃうとか、そういう風にすりゃいいんじゃないの？」
「記憶の操作はそれほど単純なものではない。四谷　司という男子生徒がいたという事実以外の記憶にも関わってくるものが必ず存在し、それらをすべて消していくと余計な影響が及ぶ可能性がある」
「はあ？」
お近づきのご挨拶のクッキーはパサパサしていて、ちっとも喜びのない味だ。口の中の乾燥を飲み物で押し流して、残った分は蓋をして袋に戻しておく。
「例えば仲島　廉の場合、四谷　司がいたという事実だけを消すと、誰かに蹴られて罵られた記憶が非常に危ういものになってしまう」

誰かに蹴られた挙句、つまらないと罵倒された。それから大いに反省して、態度を改めて、友人選びもやり直したわけなので、確か

にそこだけが曖昧になると混乱するかもしれない、と想は考えてみた。

しかし、それ以前に致命的に大きなツッコミどころがある。

「それはお前が悪いんだろ？　そんな事情があるなら自分で蹴ったりするなよ」

「あの時は一番効果があるやり方がああだったのでわたしが蹴り、注意をした」

「注意か？　あれ」

仲島の悲しそうな表情を思い出し、想はケラケラと笑う。

「制裁だろ」

「どう思ってもそれは諫山　想の自由だ」

澄ました顔にますますおかしい気分になって、笑いはしばらく続いた。朗らかな時間が終わり、出てきた涙を拭きながら少年は改めて超幸運に質問をぶつける。

「仲島以外に、四谷君の思い出が何かあるヤツは誰かいるの？」

「いる。同じクラスの女子生徒である柿本（かきもと）　史絵（ふみえ）は四谷　司の容姿が好みなので、好意を持ってよく観察をしている」

「モテ自慢かよ？」

今度は呆れた気分で声をあげる。しかし、いつも通り四谷は無表情のままだ。

「じゃあ柿本とやらは甘酸っぱい片思いのまま、お前とお別れするんだな」

「その通りだ」

――澄ましやがってよ。

心の中でケケっと笑う。しかしその後すぐに、では二月を迎えた後この秘密基地はどうなるのかという疑問が浮かんできた。

この少年にとっては珍しく、それは惜しいなという気分になって、想は相変わらずのマジメな顔に視線を向けた。

０１７　・　契約者と超幸運の初めての約束

「二月十七日になったら、お前、どうなるの？」

「契約をした」あの日に諌山家で、超幸運に定休日があるという説明は受けていた。ではその日に何があるのか。これは聞いておく必要がありそうだ。

「今使っている肉体を処理し、新しい体で諌山　想の近くで暮らせるよう、必要な手続きなどをしていく」

「処理」

「この肉体は九ヶ月前に死んだ、とある人間のものだ。誰かに発見された時に不自然に思われないような処置を施す」

少年はそこで、気がついた。

来年の二月十八日にこそ、超幸運が真実だと、証明される。

これが最も確実な「超幸運という存在が真実か」の証明になる。宝くじが当たったとしても、それは偶然かもしれない。証明にはなるとは言い切れない。どのような形で新しい姿を現すのかはまだわからないが、それがナンバー４だと確信できれば、それが確かな証拠になるのではないだろうか。

「ええと……」

少年の頭に、次々と疑問が浮かんでくる。何から聞くべきか、知っておきたいと思うことは色々とあった。の、はずが、思わず口をついて出てきた質問はその中でも最もしょうもないものだ。

「じゃあこの部屋はもう、使えなくなるのか？」

「どうしてもこの部屋にいて欲しいということならば、そのようにする。『四谷　司』はこの部屋を出ていくが、その次に設定した新しいわたしがまたここに住むことは可能だ。ただし」

「ただし？」
「違う人間が暮らし始めているのに、諫山　想がかわらずこの部屋に入り浸るのは、ここへの出入りを知っている人間がいた場合、疑問を持たれる可能性がある」
――そりゃあまあ、そうだな……。そんな人間、いるかはわからないけど。
しかし、誰が何を見ているかなどわからない。週に三、四日はここに来ているので、目撃者はそれなりにいるだろうと思われた。
「お前、次はどんなキャラになっちゃうわけ？　また同じクラスに潜り込んだりできんの？」
「利用できる肉体は数が限られているので、高校生として入り込めるかどうかはまだわからない」
「誰かが探してなくて、損傷が少ない、だっけ？」
「積極的な他人からの捜索を受けておらず、死んでから時間が立っていない、肉体の状態がいいものだけが選ばれる」
考えれば考えるほど、そんな人間がいるのだろうかと疑問が湧いてくる。この平和な日本で、そんなにもロンリーな死者がどれほどいるだろうか。
そして、やはり未来はわからないのかという疑問が沸いてくる。超幸運は「確実ではない」と述べているので、やはりそれを信じるべきなのかもしれないが。
「ちなみに、なんで二月十七日なの？」
「人類が一度滅んだ記念日だからだ」
――何それ？　滅んだことなんかあったっけ？
よく見ると青白い顔は薄く笑っている。もしかしてなにか、気の

利いたジョークだったとかそういうことなのだろうか。
「お前なんなの。たまに笑うけど」
「諫山　想が面白い人間だからだ」
そんな評価をしてくるのは、この「超幸運」だけだ。今までにされたことのない評価に、少年は顔をしかめる。
「そうか？」
四谷は目を閉じてまだ微笑んでいる。人間ではないというなら、面白さの判断の基準もどこかズレているのだろうと考え、想は次の疑問をぶつけた。
「じゃあ次はいきなり爺さんとかの可能性もある？」
「ある。年齢、性別、人種など、どのような肉体を使うことになるかは当日になるまでわからない」
「え。マジで？　さすがに赤ん坊とかはないよな」
「乳児は話すことができないので除外される。自立して動くことができ、一人で生活しているのが不自然ではない肉体を選ぶ。更に現在は諫山　想と契約をしているので、諫山　想と交流があっても不自然ではない条件を満たした物を選ぶようになっている」
「契約してない場合はもっと適当でいいんだ」
「われわれ超幸運は五つ。一年を迎えるたびに、契約者がいない場合は拠点を移し、世界を廻る。選ばれる肉体は、その地域にいて不自然でないものならばどんなものでもかまわない。幼児であっても、老人であってもだ。毎年移動をして、多くの人間に平等にそのチャンスを与えるようにしている」
「じゃ、もう日本には他の超幸運は来ないわけ」
「しばらくの間は来ない」
「ん？　ダブる可能性もあんの？」
「諫山　想一人のために他の日本人にチャンスが与えられなくなることはない。われわれは人種や国によって契約者が重複させないようにしているわけではないからだ。当選の可能性はすべての十四歳以上の個人に与えられているので、他の地域で当選する者が現れな

い場合は、ちゃんと順番通りに他の超幸運が各地を廻り、結果として日本にやってくる可能性は充分にある」

「へえ」

――じゃあこれからは他の四つで、世界を廻るってわけか。

それじゃあ、超幸運に選ばれた二人の男が日本を舞台に繰り広げる戦い！　みたいなドラマティックな展開もあるわけだ……、というところまで考えて、想はふっと笑った。

――マンガかよ。

目の前に正座している黒の超幸運が「超能力バトルやりたいぜ！」なんて願いを叶えるわけがない。物理的に無理なことはさせないと最初に言われている。

――でも、相手が「金の超幸運」で、なんでもありの契約者に戦いを挑まれたら……。

そこでまた、少年は笑った。馬鹿馬鹿しすぎる。そんなのは勝利と友情と努力がウリの、少年コミックでやればいい。

「十四歳以上って決まりがあったんだな」

「そうだ」

こっそりと追加された超幸運のルールに、ふっと笑う。

「他の超幸運もお前みたいに固いしゃべり方すんの？　他のやつにも会ってみたいぜ」

「その願いを叶えることは可能だ」

「はえ？」

思わず、だいぶ間が抜けた声が上がってしまった。意外すぎる答

えに、想は思わず身を前に乗り出す。
「会えんの？」
「会うだけならば二月十七日に可能だ。われわれは古い肉体を捨てた後、一度集まって現状の報告をし合う事が義務付けられている」
――超幸運が大集合ってか。
「じゃあ会わせてくれよ。超幸運の大集会に参加させてくれ」
「その願いは、二月十七日にしか叶えることはできない。命令するのならば、直前に言った方が良いと思われるが、叶えても構わないだろうか」
「あー、まあそうか。じゃあ前日とかに言うよ」
「了承した」
来年の二月まではあと三ヶ月ある。その間に、期末試験もある。母の料理の腕がどうなったかもわかっていない。いざという時のために願いの枠をとっておいたほうが良さそうだ。少年はそう考え、気を利かせてくれた黒の超幸運にニヤリと笑顔を見せた。
「親切設計だな」
四谷からの返答はない。
じっと黙るその青白い顔とは、あと三ヶ月ほどでお別れになるらしい。
「次も四谷のままの方がラクなんだけど」
「いつまでも同じ体を使い続けることは出来ない。じっくりと触れられればこの体が生きていないことがわかってしまうし、何らかのアクシデントが起きた場合、契約者にとって面倒な事態に巻き込まれる可能性がある」
「……へえ」
確かに顔色はいつも悪いし、何も飲まないし食べない、眠りもしない。人間としては不自然極まりない男子高校生に、興味が集まると確かに厄介そうだなと思える。

「その辺、なんとかできないわけ？」
超幸運からの返答はない。
その沈黙が何をさすのかちょっとだけ考えてみたものの、すぐに、なんかめんどくさそう、という結論が出て追求は中止された。
「今までにもいた？　超幸運の会合にでる契約者って」
「いた。大抵の者がそれを希望し、二月十七日にその願いを叶えている」
「ふうん。それってどこでやんの？」
「どこ、という説明はできない。最初に契約の説明をした時と同じで、特別な時間を過ごしてもらうことになる。場所の移動や時間の制約はなく、途中での退席はどんなタイミングでも可能だ」
――なんなんだよ、特別な時間って。
その間、世界の時間は止まっているとかそんな雰囲気なのかな、と少年は思っている。最初の契約の際にも、気がつけば古文の授業に戻っていた。クソババアの間延びした声は、暗闇に入る前と出た後で、違和感なく続いていたように思う。まじめに聞いていたわけではないので、「多分」という推測に過ぎないのだが。
「途中退席可能って、もしかしてつまんない集まりなの？」
「誰もが参加して損をしたという感想を持つようだ」
「ははは」
――じゃあやめようかな。
四谷のような話し方の超幸運が五人も集まって、大真面目な顔でこっちはこうだのああだの話し合いをしているところを見ていても、あまり面白くなさそうに思える。が、やはり、なんでもやっちゃうという金の超幸運には会ってみたいという好奇心の方が少しだけ強い。

「それってもう帰るってお前に言えばいいの？」
「その通りだ。声に出して言う必要もなく、もういい、と思えば途中でいつでも退出できる」
「気が利いてるじゃんか」
「苦情が多かったのでそう対応することになった」
おかしな答えに、声をあげて笑う。
「みんな興味津々で行って、つまんなくてムカついちゃうんだな」
「つまらない、という単純な理由だけではなく、もっと様々な要素が」
「いいって。想像するだに面白くなさそうだぜ」
――とにかく、来年二月のお楽しみができたわけだ。
そこまでに死ぬ訳にはいかないな。少年は人生で初めて、そんなことを思った。

０１８　・　育まれる友情と、未知との遭遇

今夜の夕食は、「絶品ソースが美味しい！　ステーキ弁当」に決定した。最近テレビで活躍している有名なシェフが監修したとかで、別添えのソースをかけて食べると最高に旨いと、雑誌などで取り上げられている。

尤もこれを選んだ少年は、たまたま行きつけのコンビニに置かれていたからそれを選んだだけで、ＰＯＰに印刷された、微笑みを浮かべているシェフに興味はない。

想はいつも通り、ペットボトルのお茶と一緒に選んだ弁当を持ってレジに行き、笑顔でそれを受け取った店員を見て眉間に皺を寄せた。

――こいつか。

バーコードリーダーがピっと音を立て、本日の夕食代がいくらになったかが告げられる。財布から千円札を一枚取り出している間に、悲劇は再び起きた。

「森永さんっ！」

「わあ」

絶品ソースは案の定、レンジの中で爆発した。超幸運にこの間の願いを叶えてもらうべきだったかと、少年の心にちょっとだけ後悔が浮かんでくる。

「ソースはちゃんと取ってって言ってるでしょう！」

「すいませーん」

反省のかけらも見られないピンク頭の胸に、「☆かりん☆」と書かれた名札がついている。レインボー２４の店員は皆、フルネームがかかれた名札を左胸につけるようにしているはずだ。が、このピンクは勝手にミルキーブルーのペンで自分のそれを他の店員よりも

ちょっと可愛くアレンジしてしまったらしい。

――可哀想な電子レンジ。

夕方の店内に、絶品ソースのいい香りが漂う。レンジの中でベタベタにアレンジされた弁当はど派手なネイルのついた手で拭かれ、レジ袋に入れられた。

「ちょっとベタベタするけど、ちゃんと拭いたから！」

ピカーっと輝く笑顔で差し出され、想はちょっと、笑った。

「これ、ソースなしでも美味いの？」

「え？　んー、どうかなあ。あった方が美味しいんじゃない？」

あっけらかんと答える☆かりん☆の前に店長が素早く入り込み、すいませんすいませんと必死にお詫びをしてくる。

「今新しいのと交換しますので！」

「いいよ、別に」

ぱあっと笑顔を浮かべたピンクから袋を受け取り、オプションのようについてくる店長に手を振ってコンビニから出ると、いつものように少年はエスポワール東録戸へと戻った。

「味気ないわ」

やはり別添えの絶品ソースは必要だったらしい。

「四谷、ソース出してくれよ」

「われわれは単純な命令は受けない」

「じゃあオトモダチとして頼むっていうのは？　この味気ないステーキ弁当を美味しく食べるために、一肌脱いでくれ」

「わたしと諫山　想の関係は、友人と呼べるものではない。超幸運と契約者であり」

「言っただけだよ」

チッと舌打ちをして薄く塩コショウがされただけのペラいステー

キ肉を口に運ぶ。
「なあ、期末試験、今度も一位とか取れる？」
「そう願えばもちろん可能だ。その方法は前回シミュレーションで話したものと同じで二種類あり」
「やっぱりカンニングを疑われる？」
「その通りだ」
まだまだ、教師の信頼が篤い生徒にはなれていないらしい。
「仲島家のお招きは？　また入り浸りオッケー？」
「それを願いとして叶えるのか？」

――珍しい言い回しだな。

その理由がなぜか、考える。そして答えはすぐにわかった。
「お前に頼むまでもないな」
仲島君、今度も一緒に試験勉強に励まないか？　とでも言ってやれば、あのボンボンは笑顔で「いいとも！」と答えるだろう。

「なあ仲島、もうすぐ期末試験だなあ」
次の日の昼休み、いつものようにランチにお呼ばれしながら想がこう呟くと、お坊ちゃまは嬉しそうに笑顔を浮かべながらポットからお茶を注いで親友に差し出してきた。
「今度もまた先生に来てもらうことになってるんだ。諫山君も一緒に、ぜひ！」

――こちらこそ、ぜひ！

少年が笑みを浮かべるとそれだけで約束は完了し、秋が終わりを迎える頃、毎日楽しいボンボンのお友達ライフが再び始まった。リムジンでの送迎・美味しいお食事・わかりやすいお勉強、そしてお

やつまで付いた生活は快適そのものだ。

――こいつさえ押さえておけば、超幸運なんかもういらねーんじゃないの？

そんなことを考える想に、こんな質問が飛んでくる。

「諫山君は、クリスマスはどう過ごすんだい？」

「別に。なんもないけど」

スプーンで触れるとすーっと、ありえないレベルですーっと切れるビーフが転がるシチューを食べながら、少年たちは軽やかな会話を交わしていく。

「僕はオーストラリアの別荘に行くんだ。良かったら、一緒にどうかな？」

朗らかな仲島の笑顔に、少年はちょっとだけビビった。

――マンガかよ、ホント、こいつは。

「いいよ。パスポートもないし」

「更新をし忘れているのかい？」

――まず、持ってないって発想がねえんだな？　このセレブ野郎。

「だらだらしたいんだよ。年末年始は」

「そうなのか。それじゃあ仕方ないね」

――俺が、うん、いきたーい！　って言ったら即、連れてってくれんのか？

自家用ジェットとか、プライベートビーチとか、そういうものを

持っているんだろうなと考え、想は親友に視線を向けた。顔立ちは、良くも悪くもない。最近世話になりすぎていて、なんとなく、品があるように見えてきた気はする。

「今のうちに更新しておくといいよ。修学旅行だってあるわけだし」

「海外だったっけ？」

「去年は沖縄だったかなあ」

――じゃあ、いらねーじゃん。パスポートなんか。

とろりと口の中で溶けるビーフを味わっていると、心の中にふっとこんな考えが浮かぶ。

――オーストラリアで、超幸運に出会っちゃったりしてな。

「どうしたんだい？　何か楽しいことがあったのかい？」

「別に」

少年のそっけない答えに、仲島がちょっと悲しげな表情をする。その様子がおかしくて想がまたふっと笑顔を浮かべると、お坊ちゃまは安心した様子で食事を再開させた。

もしも仲島が超幸運に出会ったら、どんな願いをするだろう？

帰り道、フカフカの座席に身を沈めながら少年はそんなことを考えてみた。

――クラッカアンドサイダーに会いたい！

――お前の願いを叶えよう。この願いは、今から三日後に叶えられることになる。

ひゃっほーと飛び上がって喜ぶんだろうな。そう考えて想はふふ

んと笑った。きっとそういう、小市民的な願いを叶えていくに違いない。家は広いし、快適だし、困ったときには執事アンドメイド軍団が飛んでくる。学校にはボディガードが潜んでいるという。

――いや、案外、お父さんとお母さんと過ごせる時間を増やして、とか。

あれだけ自分を慕ってくるあたり、さみしんぼうなんだろう。想は仲島にそんな印象を持っていた。超幸運に願いを叶えてもらってからこの二ヶ月強で随分お邪魔させてもらったが、仲島の家族にはお目にかかったことがない。あれだけ広い家に、一人ぼっちだ。人はいても、使用人だ。家族ではない。

――金持ちもラクじゃないね。

そんなことを考えている間に自宅マンションの前につく。

今日はなぜか、仲島家執事の権田（ごんだ）が車の扉を開けて想に一礼をしてきた。

「どーも」

「毎日遊びに来ていただいて、ありがとうございます」

突然のお礼に少年は面食らう。おかげで、妙にかしこまってこんな返事をしてしまった。

「いや、こっちこそどっぷりお世話になっちゃって……」

「お坊ちゃまは諫山様を随分慕っておられます。どうぞ、末永くお付き合いを」

丁寧な言葉に、はあ、と頭を下げる。どうやら本気で親友扱いをされているらしい。

――俺みたいなロクでなしの、どこがいいんだか。

リムジンを手を振って見送っていると、突然後ろからバンと背中を叩かれた。
「うぉっ！？」
「すっごい！　何あのながーい車っ！」
想がムカつき丸出しで振り返ると、メタルピンクのシュシュに街灯の光を反射させている☆かりん☆が笑顔で立っていた。
「ねえねえ、君ん家の車？　なんだっけ、ロールスロール？　そういうの？」
「俺の家のじゃねえし」
少年の冷たい視線をものともせずに、ピンク頭はまだまだ笑顔だ。
「え？　じゃあなんで乗ってたの？　もしかしてタクシー？　どこで乗れるの？　駅前とか？」
「あれは友達の家の車」
「ウソーっ！　お友達の車？　すごいすごい、わたしも今度乗せてっ！」
あまりにも軽い発言に、想は思いっきり顔をしかめた。

――頭わるそーと思ってたけど、マジで悪いんだな。

「中にミラーボールとかついてるんだよね！」
興奮する黄色い声を無視して、エントランスに向かう。
「ねえ、乗せてよー！」
そんな声がするのと同時に、腕にしがみつかれる。ふわんとした体が当たって、さすがの少年も焦って思いっきり腕を振り払った。
「何だお前っ」
振り払われた側は、目をまんまるにして驚いた顔だ。しかし、返答はこう。
「かりんだけど」
「……」
少年にとって、「絶句する」という体験はこれが人生で初めての

ものだった。意思疎通ができそうにない生物との衝撃的な邂逅に、冬だというのに額に汗が浮かんでくる。

「かりんだけど？」

「……それは知ってる」

「え？　ホント！？」

嬉しそうに輝くピンクに、少年は思わず怒鳴った。

「お前は俺のこと知らねえだろ！？」

大声に驚いたのか、果林が体をすくませて一歩下がる。その隙にマンションのエントランスを通って、想はエレベーターではなく階段を駆け上がって家へと帰った。

０１９　・　少年を待ち受けていた幸福　　１

「諫山、今回も頑張ったじゃないか」

教師から笑顔で答案を返され、少年はそれに、はあ、と小さな声で答える。どうやら補習やら親の呼び出しといった負のイベントは起こさずに済んだらしい。教壇から自分の席に戻る間に目が合った親友に、ほんのちょっと笑顔を見せておけば試験は無事に終了だ。

冬休みはもう目前に迫っている。年末年始はイベントが目白押しだが、諫山　想という少年には関係ない。クリスマスだろうが、正月だろうが、いつだって通常運転で生活に変化はない予定だ。コンビニは一年中、三百六十五日、時には三百六十六日、二十四時間いつだって開いている。それさえあれば、彼の生活は何の問題もない。

「ねえ、想、今日は寄り道しないで帰ってくれる？」

二学期の最終日、いつも通り学校へ出ようとしている息子に母からこんな声がかかった。

「なんで？」

「大事な荷物が届くの。午後に来るから、受け取ってもらっていい？」

今までにされことのない頼みごとに、想はちょっと首を傾げる。

「何それ。宅配ボックスじゃダメなわけ？」

「……入れられないものもあるのよ。信書とか」

「へえ」

――めんどくせえなあ。

本心はそれに尽きるが、朝から親子喧嘩も気が重い。親友の仲島

君は本日学校が終わればオーストラリアに発つ予定だし、それ以外に行く場所は四谷の部屋しかない。黒の超幸運に急ぎの用があるかといわれれば、ない。
「わかったよ」
「ありがとう。良かったわ」
ルンルンと喜ぶ母の姿からプイと視線を逸らして、クタクタのスニーカーに足を入れる。エレベーターで一階まで降りると、向かいのアパートからおなじみの姿が現れた。
「四谷」
「なんだろうか」
「お前、コートとかないの？　さすがに見た目、寒そうだぜ」
もう十二月もあと少しで終わる。朝の冷え込みは半端なくて、コートもマフラーも、ブレザーの下にセーターも着ていない男子高校生の姿はやたらと寒々しく見える。
「われわれは寒さを感じない」
「そうだろうけど、目立つぜ？　制服だけで平気そうな顔してさ」
――顔色が悪いから、保健室へ誘われるかもしれねえよ？
「目立つのダメって言ってなかったか？」
「わかった。対処することにしよう」
――案外、抜けてるよなあ。
一体どのくらいの期間人間のフリをしてきているのか知らないが、結構脇が甘い。そんなことを考えながら学校への道を歩んでいく。
終業式はあっという間に終わる。通知表を受け取り、机やロッカーの中を空にして生徒たちは学校を後にする。高校生に、クリスマスに騒ぐなというのは無理な話で、みな浮かれた足取りで家以外の

場所へと繰り出していく。
もちろん、カラオケだのパーティだの、誰かの家だのに行かない生徒だって多い。塾にいく受験生もいるし、友達のいないさみしんぼうもいる。

「じゃーな」
家の前で超幸運と別れ、珍しく寄り道をせずに少年は家へと帰った。
いつも通り、ドアに鍵を入れてまわし、薄暗い廊下を歩いてリビングへと向かう。

「おかえりなさーい！」
ドアを開いた瞬間、いつもは決してしない母の声が響いた。
「……」
明るい笑顔の上には、三角のメタルグリーンの帽子が載っている。
「驚いた？」
「……まあね」
仕事に行っていると思っていたら、違っていたらしい。リビングは完全なクリスマス仕様に作りかえられていて、無駄に大きなツリーはピカピカとライトを順番に点灯させているし、その下には誰宛てなのかわからないがプレゼントがいくつか置かれている。
テーブルにはいつもはかかっていない白いクロスがかけられ、上には大きなチキンや、サンドイッチ、更にはケーキが並べられていた。
「想とクリスマスパーティしようと思って」
「じゃあ……」
――信書がどーのこーのっていうのは、ウソだったわけか。
「じゃあ、なあに？」

「いや、別に。着替えてくるよ」
自分の部屋に戻り、コートをポイとベッドの上に投げる。
――もしかして、これか。四谷の言ってた、二ヵ月後にわかる幸せって。
苦い笑いがこみ上げてくる。ふっと息を漏らして、少年は着替えを進めていく。
――バカじゃねーの？
こんなことで喜ぶのはお子様だけだ。コケにされたような気分に腹が立ち、少年はパソコンを立ち上げると四谷にあてて苦情のメールを書いて送った。
「想、着替え終わった？」
「今行くよ！」
乱暴に制服を脱ぎ捨て、着替えを終える。重たい気持ちを引きずりながら、短い廊下を進む。
リビングに入れば、諫山家のパーティはスタートだ。
「父さんハブっていいわけ？」
「お父さんは夜一緒にやればいいんだもの。お母さんはちょっとだけ、想と二人きりで過ごしたかったの」
――キモッ！！
鳥肌がぞわぞわと、二の腕から全身に広がっていく。
少年が虚ろな瞳で見つめていることに母は気付かず、下を向いたまま小さく笑みを浮かべると話を始めた。
「まずは謝ろうと思って。ホントに、ごめんね、想」

――ぶっ殺そうとして？

「お母さんね、一カップのこと、三〇〇ｃｃだと思ってたの」

「……はあ？」

「お料理の時に計量するでしょ？　一カップって、二〇〇ｃｃなのよ、本当は。ずっと間違って覚えていたの！　ついでに、小さじは大さじの半分だって勘違いしていたのよ。本当は、三分の一なんだけど」

母の言葉の意味が理解できず、想は眉間に皺を寄せた。思いっきり深く。

その絶妙な表情にようやく気がついて、母は情けない顔をして笑った。

「今まで、お料理する時にずっと間違った分量で作ってたのよ！　ホント、ドジで嫌になっちゃうわね」

――ああ、なるほど。レシピ見てるくせになんで？　って思ってたら、そういうことだったのか。

マズイ料理の作り方載せてんじゃねえよ、と本に対して向けていた苦情はどうやら筋違いのものだったらしい。

「お料理教室に通って、ようやくわかったのよ。まずそこのところが間違ってたって」

――バカだなあ。

お料理教室には過去にも行った事にしてあるのに。設定をもう忘れてしまったのだろうか。そんな事を考えながら、今日はやたらと動く母親の口元を見つめる。

「おなかすいたでしょ？　一緒に食べましょう。このチキン、買ってきた物じゃないのよ？　お母さんが作ったの」

「……」
「朝から頑張って作ったの。想に食べてほしくって……」
「すごいね」
ちっとも感情の入らない褒め言葉に、母は悲しげな表情を浮かべる。
「大丈夫よ、味見したんだから」
――今までは？　してたの？
していたんだとしたらとんだ味オンチだし、しないで息子に出していたんだったらまあ、バカにした話だ。
想の冷たい視線を横顔に刺しつつ、母が動く。自信作を二枚の皿に取り分けると、自分と息子の前にそれぞれ並べた。
「二学期、お疲れ様。試験の成績も良かったんでしょう？　頑張ってたのね」
「……試験って？」
ジンジャーエールがグラスに注がれ、小さな泡をパチパチと弾かせる。
「先生がお電話くださったのよ。すごくよくなったって。お母さん、あなたのこと全然わかってなかった」
――やる気出したとかじゃないんですけどね。
勝手に感動している母がグラスを持ち上げ、息子に乾杯を促してくる。
しぶしぶ、少年もグラスを手に取って持ち上げる。
「乾杯！」

――何によ？

ため息をつくかわりに一口グラスの中身を飲み込んで、やむを得ず、わざわざ骨の部分にリボンまで巻いてあるチキンに手を伸ばす。

「食べてみて！」

複雑に入り乱れた感情が、手の動きを止める。

持ったものの、口まではやってこない、クリスマス仕様のチキン。

それをじっと見つめる、母。

――めんどくせ。

少年は母親にちらりと目をやる。

母は、息子のしらけた視線に気がつく。

「……そうよね、こんなの、今更すぎるわよね……」

突如泣き出す母親の姿に、想は思いっきり顔をしかめた。

「今までちゃんとしてこなかったんだもん……。自分のことばっかり優先させて、あなたのことほったらかし。ご飯だって全然美味しくないのに、食べないなんてって怒ったりして……」

グスグスという嗚咽が、号泣へとグレードアップする。

――四谷くーん！　僕のお母さんがうざいのをなんとかしてくださーい！！

心の中で必死に超幸運を呼ぶが、答えはない。口に出されない願いは叶わないし返事もない。

自分でなんとかする以外にこの状況を切り抜ける方法はなく、少年は手にしたチキンにガブリとかじりついた。

「あ、うまっ、これ美味い！　すげえ美味い！」

「本当？」
「ホントホント。だいぶ上出来。だって普通に食えるし」
――俺もオーストラリアに行きゃあ良かった！
パスポートを作らなかったことを心の底から後悔しながら、諫山想の悲しいランチはこの後もしばらく、続いた。

０２０　・　少年を待ち受けていた幸福　２

重苦しい空気が漂うリビングで、母と息子のランチが終了する。
クリスマスの飾り付けの醸し出す浮かれたムードと裏腹に緊張感漂う空気の中、沈黙を破った勇者は、母親の方だった。

「想、怒ってる？」
「何を？」
イライラはしている。しかし、母の聞きたい事は少年の今現在の心情についてではない。
「今までの事。仕事ばっかりでほったらかしだったから」
「怒ってないよ」
そうだ。怒ってはいない。
「本当に？」
怒っていたことはあった。それは、ずっと昔、小さな子供だった頃のことだ。
「怒ってないよ」
うんざりしながら答える息子に、母が顔を近づける。
「本当の気持ちを教えて。今日はもう、全部聞かせて欲しいの」
「何をよ？」
「想がどう思ってるか。お母さんのことも、お父さんのことでも、何でもかんでも教えて」

――ホント、何なの、これ？

目を閉じると、四谷の青白い顔が浮かんできた。澄ました無表情が言っていた、少年の感じるべき幸福。それは一体、何なのだろう。
それはこんな、母との心のぶつけ合いなのだろうか？
「私は、想がちゃんと学校にも行って、大きくなって、何不自由な

く暮らしてるんだから、それでいいんだって思ってた。仕事を辞めたくなかったし、ずっと家にいるなんて息が詰まるからイヤだったし、お父さんもいいって言ってくれていたから。全部これでいいんだって思ってた」

「……」

「だけど、そうじゃないよね？　想はいつも怒ってる。不機嫌だし、何も話してくれない。全部私達のせいでしょう？」

――その通り！　とでも言えば満足すんのかよ？

目を開けて、すぐ前で泣きそうな顔をしている母を見つめる。胸のうちに湧き上がってくるのは、ただひたすら、うんざりばかりだ。

「想、話して。なんでもいいの、お願い」

「……わかった」

――超幸運、この時間を、できるだけ早く、終わらせてくれ。

当然ながら返事はない。知っているはずなのに、ついそんな事を考えた自分にふっと笑う。

息子の顔に浮かんだ笑みに、母は、息を呑む。

「どうでもいいよ。ホント、全部、何もかも。怒ってない。怒る理由がないし」

――不倫してようが、へたくそなお料理に張り切っちゃおうが、仕事に打ち込もうが……。

――子供のこと、ほったらかしだろうが。

「なんとも思ってないから。別に。アンタの好きにすればいいんじ

ゃねえの？」
「……」
泣きそうな顔が、泣いた顔に変わっていく。それを見たらたまらない気分になって、少年はこう吐き捨てると家を飛び出した。
「ついでに言っとくよ。寂しくなんかもねえ。これが、俺の思ってることの全部！」

家を飛び出した少年の向かった先は、もちろんすぐそこにある超幸運の隠れ家だ。上着もない状態で飛び込むには一番ちょうどいい超ご近所さん宅へ勝手に入ると、想はまず正座して座っている四谷の頭をパカーンと思いっきり叩いた。
「お前、ホントふざけんなよ？」
「ふざけた覚えなどないが」
傾いた体がゆっくりと戻り、四谷　司の姿はいつも通り、まっすぐ背筋を伸ばした状態で座る。

オンボロアパートの一〇三号室にはいつの間にか、コタツが用意されていた。部屋の中は冷えるので、舌打ちをしながらその中にまず足を入れ、少年は思いっきり顔をしかめて毒づく。
「来るのわかってんだったら電源入れとけよ」
四谷は何も答えない。
「なんか飲み物買ってきて」
「われわれは単純な命令は受けない」
「今すぐあたたかーい飲み物が欲しいぜ！　心からな！」
想が声を荒げると、予想外なことに四谷は上半身だけくるりと振り返り、ガサガサと音を立てて袋から缶コーヒーを取り出して少年に差し出してきた。しかも、ホットだ。
「意外なことすんなよ。……ビックリするだろ？」

「お前の願いは叶えられた」
やってきた時の勢いを思いっきり削がれながら、少年は大きなため息をつき、コーヒーの蓋を開けて一口すすった。
「やっぱお前、わかるんだな？　未来が」
「その質問に正確に答えることはできない。わかる未来もあれば、わからない未来もある」
「設定ブレてんぞ？」
「そう考えても問題ない。わたしにはこれ以外の答えを示すことは不可能だ」
「なんだよそれ」
缶コーヒーはあっという間に空になり、コタツの上にカーンと音を立てて置かれる。
温まってきた足元とは逆に冷え切った心をどうしたらいいのかわからず、想は天板の上に突っ伏して、両手で髪をぐしゃぐしゃとかき回し、しばらくしてから手を止めるとポツリと呟いた。
「なあ、あれが俺の幸せなのか？」
「あれとはなんだろうか」
「おかーさんと息子の、心のぶっちゃけ合いだよ。さっき俺ん家で繰り広げられたホームドラマもどきのこと」
「違うようだな」

――じゃー何なの？　っていうか何だよその曖昧な答え。

「未来の幸福って言ったよな？　あの時、願いが並行してないか確認した時に」
「確かに言った。それはまだ、諌山　想の元に訪れてはいない」
「いつ来るの、シアワセとやらは、俺のところに。いつだよ、四谷」
「すぐに来る」
冷静な声に、少しだけ顔を上げる。

――本当かよ。

とてもそんな風に思えなくて、少年は両手に力を入れてぎゅっと握った。

――もう終わりだ。だって、言ってしまった。

決して言ってはいけない言葉を、口にしてしまった。どうでもいい。何でもない。興味なし。無関心。

過去に一番、自分が傷ついてきた扱い。ずっと心の奥底に封じ込めてきた悲しい気持ち。

――だって仕方ない。そう思われたら、自分もそう思うしかないじゃないか。

――どうでもいいって。何もかもどうでもよくなきゃ、やってられない。

「四谷……」

「なんだろうか」

「なんでこんなめんどくさいんだ？　もう単純にさ、俺のこと幸せにしてくれよ、頼むから」

「諫山　想。今日この瞬間からわれわれの契約は、仮のものから正式なものに変化した」

「はい？」

突然の宣言に面食らって、少年は顔をあげた。もうちょっとで出てしまうところだった涙は引っ込んで、涙腺の奥でやれやれと呟いている。

「何言ってんの？」

「仮契約だったものが、正式なものに変わった」

「今まで仮だったんだ？」

「その通りだ」
意外な事実の暴露に、想は今日何度目かわからないため息を吐き出して四谷の大真面目な顔を見つめた。
「一応聞いておく。なんで？」
「諫山　想が超幸運の存在を真実だと認め、そのように扱ったからだ」
「そんなことした覚えないけど」
コタツを挟んで向かい合い、超幸運の言葉を待つ。
「黒の超幸運と契約した人間のうち、本契約まで進んだのは諫山想が四人目だ」
「そんなに難しいんだ、本契約って！」
歯をむき出しにして、ついでにムカつきもむき出しにしてイヤミったらしく吠える。もちろん、四谷が動じる気配はかけらもない。と、思ったら謎の微笑を浮かべてこう答えてきた。
「難しいようだぞ」
「説明したいんだったらお好きにどうぞ」
「諫山　想。超幸運と契約をする人間はそれなりの数存在する。設定されているキーワードは難しい物ではなく、言葉を発する際の条件も非常識なものにはしていない」
「ちょっと頑張れ、ね」
「しかし、超幸運について理解をし、信じる者は少ない。疑う者はとことん疑い、疑わない者はまったく疑わない。そして、信じない者も信じる者も、他人に黙っておくことがなかなかできない」
「……へえ」

――まあ、確かに、そーかもねえ……。

はなっから信じなければ、誰か他人に、ネタの一つとして話してしまうかもしれない。
頭っから信じてしまう単純な人間は、言わずもがなだ。つい、浮

かれて話すのだろう。

「諫山　想のように、信じるでも信じないでもなく、一人きりでわれわれを試そうとしてくる人間は稀だ。最近は特にそうで、この五年間、当選者は何人か現れたものの、その真偽についての情報を求める間に権利を失っている」

「どういうこと？」

「インターネットだ。超幸運に関して、知っている者はいないかということを調べる」

「調べただけで権利がなくなるのか？」

「調べているうちに、同様の体験をした者を発見することができるのだ。自分も会ったのだが、これは一体何なのか。こんな書き込みをすると権利が失われ、真実を知ることはできなくなる」

「書き込みって掲示板とか？　そういうとこに書くのも、話したことになる？」

「その通りだ。なので、超幸運は現在、都市伝説のようなものになりつつある」

「ははは！」

「笑い事ではない。迷信の類として認識されかけているので、超幸運と契約をし、その力を行使できる人間は今後ますます減っていくだろう」

「何か困るの？　それで、お前らはさ」

「困りはしない。残念には思うが」

ここで少年は、はたと自分が何をしに来たのかを思い出した。

――笑ってる場合じゃねえし。

「おい四谷。それより、俺の母親だよ。うざすぎ。なんとかしてくれ」

「それはできない。他人の心理の操作は無効だ」

「俺のことは？　もう単純なアホにしちゃってくれよ。わーい、お母さんが優しくなったーって思えるくらいのアホな子にしてくれよ！」

ダン、とコタツの天板に拳を打ち付ける。

そんなナイーブな男子高校生を、超幸運はこう諫めた。

「われわれは契約者に変化を求めない。それに、それは幸福な状態とはいえない」

ジロリと、その顔を想は睨む。

「われわれは願いを叶える。それは、契約者を幸せにするという意味ではない」

「何が言いたい？」

「しかし、わたしの叶える願いは、契約者の幸福に繋がるようになっている」

「じゃあ今日はちゃんとママと向かいあえとか、そういうことか？」

「不幸を知る者のもとにこそ、真の幸福は訪れる」

澄ました顔は、珍しくこう続けた。

「……らしいぞ」

「何だそれ」

「わたしは人間ではない。が、多くの人間を見てきた」

――そこから悟りを得ましたってか？

また、ため息が少年の口から漏れる。

帰る場所は家しかない。財布も上着もない。それらを今すぐ出せといっても、超幸運は叶えない。

想は仕方なく立ち上がると、四谷に向かって軽く手を挙げ、冷たい空気の漂う外への扉を開けた。

０２１　・　少年を待ち受けていた幸福　　３

エスポワール東録戸から出ると、道路の向かいのマンション前に母が立っているのがすぐに見えた。
息子のコートをぎゅっと抱きしめるように持って、キョロキョロと周囲を見回している。
「想！」
すぐに息子を見つけて駆け寄ってくる母を、少年はじっと立ち止まって待つ。

「ここ、誰のおうちなの？」
「クラスの奴だよ。近所に住んでるって言ってた奴」
「そうなの。良かった、上着も着ないで行っちゃったから……」
グスグスと鼻をすすりながら、母が息子にコートを手渡す。
息子は仕方なく、それを受け取って羽織る。
「ごめんね、ごめんね、想、今まで、ごめんね」
「いいよ、もう」
めんどくさそうに答える少年の胸に、母がしがみついてくる。
「今更かもしれないけど、今日からちゃんと、想のお母さんにならせて……」
「わかったから。もうやめろよ、こんな道端でさ」

クリスマスイブの真昼、住宅街を歩く人影はない。それでもこんなシチュエーションは恥ずかしさの限度を超えていて、想は思わず、母の体を自分から引き剥がした。
「怒ってないって言っただろ。いいんだよ、今更もう……」
母の泣いた顔が目前にある。涙で化粧が崩れて、まるでオバケのようだ。
「ひでえ顔になってるぜ？」

「ひどい」
「だったら早く直しなよ」
体の向きを回転させ、自宅へと母の背中を押す。暖かい部屋に戻って、顔を元通りに直した母と二人で無言のティータイムを過ごすと、父親も帰宅してきた。

穏やかで会話の少ないクリスマスパーティの参加者は三人。変な緊張感があって、楽しくはない。
「母さん、腕が上がったな」
「単に勘違いしてただけだったの」
何も言わない息子のかわりに父と母がたまにちょっとだけ言葉を交わしていくと、いたたまれない空気が発生してますます息苦しくなっていく。
「想、これ、クリスマスプレゼント」
やっぱりそれほど美味しくない母の手作りケーキを食べ終わったところで、父から封筒が差し出された。
「何これ？」
開けてみると、中からはチケットが出てきた。
「わーお」
「今、若い子に大人気なんだろう？　実は仕事の関係で手に入ってな」
――俺、興味ねえんだけど！
出てきたのは、クラッカアンドサイダーの単独ライブのチケットだ。しかも二枚。
――奴にやるか。

これで散々してきたタダ飯へのお礼ができるかもしれない。仲島はきっと天井を突き破るくらいの勢いで飛び上がって喜ぶだろう。

――いや、一緒に行こうって言われんのかな。うぜーな。

「良かったわね、想。お友達と一緒に行ったらいいじゃない」

「そーだね」

「プラチナチケットってやつらしいぞ。販売開始十分で売り切れたって」

「知ってるよ。サンキュー」

この次に、母親からのプレゼントを渡される。中身はこちらも流行の携帯音楽プレイヤーで、息子が使う予定のないアイテムだ。

「ありがと」

「ううん」

控えめな礼の後、沈黙がリビングを支配した。諫山家ではそれはいつものことだったが、今日の静寂は何か、どこかが違っていた。少年はそれを敏感に感じ取って、ゆっくり、そっと、目だけ動かして両親の様子を探る。

「想……」

夜の沈黙を破った勇者は、父だった。

「何？」

「父さんと母さんは、離婚することになった。お前は、どっちと一緒に暮らしたい？」

――あらまあ。

昼間の四谷との会話が、心の中に蘇る。

「ははははは」

笑い出す息子に、両親は困惑の目を向ける。

――契約者に変化は求められない。自分が好きなように選んでも、幸福に繋がってるってことだよな、四谷！

「どっちもお断りだね。二人とも、どっちとも一緒に暮らしたくなんかない」

「そうか」

「そうか、じゃないわよ。そんなのダメよ」

「アンタが言うなよ」

――今日のあれこれ、なんだったんだよ。

――何が、今日からお母さんにならせて、だよ！

ただ単に自分の感傷に息子を付きあわせただけの茶番。本日の母と子のドラマの意味をそう断定して、少年はまた笑った。

「いいじゃんか。自分の好きな相手と仲良く暮らせば？」

「……！」

母の顔は驚きでひきつる。

「親父は俺となんか暮らしたくないだろ？　一人の方が気楽じゃない？　新しい可愛い彼女でも見つけろよ」

「……」

父の顔は下を向く。

「昼にも言ったけど、マジでどうでもいいから。二人とも好きにしたらいい。俺もそうする」

大きくため息をついて少年は立ち上がり、自分の部屋に戻ると上着と財布を持って玄関へと向かった。

「想、どこに行くの？」

「すぐそこ。二人ともどうするのか決めといて。帰ってきたら聞くよ」

ボロいドアはノブを引けばすぐに開いて、少年はまずその事に疑問を投げかけた。
「お前って鍵はかけない主義？　それとも、俺が来る時だけ開けてんの？」
「普段はきちんとかけている」
「へえ」
では事前にいちいちあの正座の状態から立ち上がって鍵を開けているのだろうか。想像するとやけにおかしくて、想はケラケラと笑った。しかし足を突っ込んだコタツの中は冷たい。
「おい、電源入れておけよな！」
パチンとスイッチを入れると、ぬかりのあったお詫び代わりなのか、ホットのお茶がすっと天板の上に出された。
「ドリンクのサービスは今日から始まったのか？」
「本契約になった記念だ」
「ははは」
はちみつ入りのお茶は柑橘類がブレンドされていていい香りがした。一口飲んだ少年の体に、じわっと熱が広がる。
「そういや、仮から本契約になった場合の変化、聞かなかったな」
「諫山　想にとって、体感できる変化はない。また、願いの叶え方や願いを伝える方法などにも変化はない」
「変化なしってことか？」
「いや……」
何故なのかは不明だが、四谷は首にマフラーを巻いている。それがやけにおかしくて、少年はプっと噴出してしまった。
「なんだろうか」
「なんでもねえよ。で、変化は？　何かあるんだったら教えてくれよ」
「変化は一点のみ。私の力の解放だ」
「カイホー？」
「解き放つ、と書く解放だ。これから先、諫山　想の願いを叶える

ために使える力が増すことになる」
「へえ」

――今までは出し惜しみしてたってことか？

「じゃあ何でもアリになるわけ？」
「そうではない。ルールなどに変化はない」
「何が変わるか具体的に頼む」
「私のやる気だ。諫山　想により良い人生を歩んでもらえるよう、今までよりも力を入れさせてもらう」
「バカじゃねえの？」
適当な返事に対して、少年はこれまでになくゲラゲラと大きな声で笑った。
「仮だと本気出してもらえないわけだ」
「黒の場合はそうだ」
「へえ」
笑いすぎたおかげで出てきた涙を指で拭う。
しかし、笑いが収まっても涙は止まらなかった。心にじわじわと侵食してきた哀しみのせいか、少年の体はブルブルと震える。
「四谷……」
「なんだろうか」
「幸せって、何？」

しかし、超幸運からの返答はない。

――もしかして、今聞くと俺の幸せが減るってやつか？

そう考えると、ようやく涙が止まった。
「お前を信じていいんだよな？」
「わたしは契約者に、真実のみを告げる」

スッと、ティッシュが箱ごと差し出される。
少年はそれを受け取って鼻をかむと、涙は手の甲で拭って下を向いた。
「もうちょっとここにいてもいい？」
「聞くまでもないことだ」
四谷の部屋には何もない。話が弾む間柄でもないので、やたらと静かだ。
静寂の中に、どこで流しているのか、クリスマスソングがかすかに聞こえてくる。そのうち、それがおそらく隣の一〇五号室からなのだろうと予想がついた。音楽に合わせて、ひどく能天気な女の歌声が聞こえてきたからだ。

――あいつかな？　森永　☆かりん☆

気分が乗ってきたのか、声は少しずつ大きくなる。音程を外しながらもやけに愉快そうな歌声に、少年は脱力して笑った。
「へたくそだな」
「まったくだ」
意外な同意にまた笑う。
「お前もそういうこと言うんだな」
返答は特にない。

少ししてからようやく立ち上がり、想は一〇三号室から出た。扉の前に出ると、隣の部屋から相変わらずご機嫌な声が聞こえて、それに見送られながらゆっくりと自宅へと少年は戻った。

「で、どうすることになったの？」
諫山家のリビングで、今後の家族のフォーメーションについての

話し合いが始まる。
母はじっとうつむき、父は覚悟を決めた顔で息子にこう話した。
「この家をお前にやろう。生活費も渡す。私たちは出て行く」
「はあ……」
――随分思い切った結論、出したもんだな。
「これから一人で暮らしてみて、気持ちが変わったらまた一緒に暮らそう。父さんでも、母さんでも、両方でも、お前の希望通りにする」
両方は無理じゃねえの？　と少年は少し呆れる。
「行くあてとか、あんの？　二人とも」
「なんとでもなるだろう」
寂しそうに呟く父の横顔を眺める。そういえば、じっくり話をしたことがない。それは父が望んだことなのか、自分が望んだことだったのか。
「そんな無責任でいいわけ？」
息子の問いかけに、父は小さく微笑んで答えた。
「今までも充分無責任だったから。何も変わらないだろう？」
「斬新だね」
母が不安げな顔で息子の顔を覗き込んでくる。
「今のままでもいいのよ」
「無理しなくていいよ」
「無理なんかしてないわよ」
この言葉に、想はニヤリと笑った。
――嘘つき。
「解散するのは正月が過ぎてからでいいかな？」
「いいよ」

父の言葉に大きく頷く。
不思議な気分だった。さっきまではあんなに悲しかったのに、いざここに戻ってみたら何故かひどく落ち着いている。少年はその理由が何なのか考えてみたが、答えは出ない。

妙に落ち着いている息子に、父はそっと、小さな声で自分の希望を伝えた。
「お前が呼んでくれる日を待ってる」
「はい？」
「やっぱり行かないでって言ってくれるのを待ってるからな」

――何それ？

父と母が揃ってシクシクと涙を流し始める。

――一応、愛情表現ってやつなのかな。

そう考え、少年はちょっとだけ笑ってこう答えた。
「努力するよ」

こうして諫山家のクリスマスパーティは、お開きになった。

022　・　リスタートされた人生

不思議に思っていた。
年明けに出て行くと行った割に、何の準備もしていない両親の事を。

――まあ年末じゃ、引越し業者も休みだしな。

少年はぼんやりとそう考えていたが、それは間違いだった事が判明する日がとうとうやってきた。

「想」
年末の休暇に入ったらしい父に呼ばれ、少年は自分の部屋を出てリビングへと移動する。そこには父がじっと、座って待っていた。
母の姿はない。
「何か用？」
「この間の話なんだが……」
そこで言葉が止まる。

――行かないで、お父さん！　お母さん！

というのを待っているんだろうな、と考え、ニヤリと笑う。

――言うかよ、そんな事。

「この間の話って？」
「……」
父の瞳がぎゅうっと閉じて、口からは苦しげなため息が出てきた。
少年は知らん顔でそれをじっと見つめる。

「すまなかった。この間の話、出て行くっていうのは嘘だ」
「はい？」
「行かないでくれと言ってくれるものだと思っていた。想が許してくれるなら、やり直そうと母さんと決めてたんだ」
「許してくれなかった場合はどうするつもりだったわけ？」
「それは……」

――一人暮らしなんて無理ー！　パパー！　ママー！　って言うまで待とう、とかか？

息子の冷たい視線に気がついて、父は頭をくしゃくしゃっと掻くと、観念したような顔でふうと息をついてまた話し始めた。
「とにかく、あれは嘘だ。ちゃんとやり直そう。家族として」

――おーい、四谷！　これが待ってた幸せかー？

しょうもない結末に呆れながら、少年は簡潔な返事を父に告げる。
「いいけど」
「いいのか？」
「何でもいいって言っただろ？　別に、なんだって俺は構わないんだよ」
息子のセリフに、父の顔は複雑だ。今の言葉が、許しなのか、それとも投げやりなものなのか判別がついていないらしい。そしてどう判断したらいいのか戸惑いつつも、こう続けた。
「想、頼みがあるんだ」

――嘘ついて息子試した挙句、頼み？

「何よ」
「来年家族が増える。母さんは仕事を辞める。体調が良くないから、

家の事、手伝って欲しいんだ」

――あ、こっちか？　幸せって。もしかして？

いつの間にそんなことになっていたのか、母の年齢がいくつだったか、もしかして「これが人間の幸福だ」とか超幸運が言い出すんじゃないかとか、そんな思考が頭の中をギュンギュンと飛び交い、そのすべてに呆れた気分になって想は唸った。

「それマジで父さんの子なの？」

「どうしてそんな事言うんだ。いくら何でも許しがたいぞ、そんな……」

苦しげに怒る父の様子に、気分が妙に悲しいものに変化していく。

「ごめん。悪かったよ」

「いや、こっちこそ悪かった。お前は悪くない。全部私達のせいだ。とにかく、このタイミングでその……お前に兄弟ができることになったのは、多分ちゃんとやり直せっていうことだと思うんだ。みんなでちゃんとした家族になろう。私もちゃんと父親になる。母さんもだ。想も、いいか？」

複雑で、苦いものがこみ上げてくる。

少年はふうと息を吐いてそれを全部吐き出すと、可哀想な父にかすかな光を与えた。

「……いいんじゃないの？」

「想」

「でもあんま、期待しないで」

座ったまま動かない父に手を振って部屋に戻ると、上着と財布を持って玄関に向かう。

その途中、寝室から母が飛び出し、一目散に駆け込んだトイレから嘔吐する音が聞こえてきて、そこに父が走ってくるのを見届けてから少年は家を出た。

「何なの、あれ」
足を突っ込んだコタツはまた電源が入っていない。仕方なく、身を屈めてスイッチを入れる。
「あれとはなんだろうか」
「来年俺に可愛い弟か妹ができるんだってよ！」
「素晴らしいな、この少子化の時代に」
「それ、ジョークのつもり？　全然面白くないんですけど」
四谷の部屋は寒い。コタツの中も、コタツから出ている部分もやたらと冷えて、想はすっかりムカついた状態だ。
「あれ、ついてるところみたことないけど」
部屋の隅にはファンヒーターが置かれている。しかし、作動していることは今までに一度もない。
「節電しているからな」
「お前ん家、家計が厳しいの？」
「その通りだ」

――うぐぐ。

おかしいが、笑ってしまっては負けな気がして少年はぐっと歯を食いしばった。
「今日は飲み物を買いに行かないのか？」
「ドリンクのサービスは？」
「あれは本契約が完了した日のみの特別な処置だ。今は通常通り、飲食に関する対応はなくなっている」

――畜生！

家から持ち込んだ怒りが脱力のせいで霧散していく。一〇三号室

を出て、プルプルと震えながらコンビニへと走り、暖かい飲み物を調達して想はまた超幸運の部屋へと舞い戻った。

「で、家族のやり直しっていうのが俺の幸せなの？」

「それもあるが、それだけではない」

「じゃー何よ」

牛乳がたっぷり入ったコーヒー飲料をぐっと飲み干す。まだ少し熱いが、冷え切った体にジワリと心地良く染み込んでいく。

「諫山　功とルミの夫妻は、自分たちの育児の成果がいかなるものかハッキリと認識し、息子の状態を理解した。これから先、より良い親子関係を築けるよう努力するようになり、次に生まれた第二子への接し方の参考にするので諫山……」

なぜか、言葉が途切れた超幸運に、想が怪訝な顔を向ける。

「どうした？」

「諫山家の第二子はまっすぐな子供に育つ」

「お前もしかして、名前とか性別とかわかってて、言いそうになったんだろ？」

「そんなことはない」

「いいんだぜ？　どんな名前か、男か女か、最初っから知ってても俺は別に。サプライズとかそういうのはいらねえって言っただろ？」

黒の超幸運は澄ました顔でだんまりを決め込んでいる。

そこに、ドアを叩く音がした。

「お客だぞ、四谷」

しかし部屋の主が立ち上がる前に扉は勝手に開いて、客は笑顔で中に飛び込んできた。

「こんばんはー！　四谷君、いるー？」

もう見えているだろうが、と思わず突っ込みたくなる呼びかけとともに、段ボール箱を抱えたピンク頭が現れる。

「います」

「あのねー、懸賞でお鍋セットが当たったんだよ！　美味しいお肉

と野菜のセットなのー！　でも量が多いしお鍋はみんなで食べるものだから一緒にどうかなーと思って……」

そこまで笑顔で言って、ようやくもう一人の姿があることに気がついたようだ。靴をポイと脱いで勝手に上がりこみ、想に向かって近距離からはてなマークを連射し始めた。

「どこかで会ったよね？　話したことあるよね、かりんと！　誰だっけ、あれ、ああ、そうだ、ロールスロールに乗ってた人だよね！　あの長い車、いつ乗せてくれるの？　中でワインとか飲めるんだよね！」

「おい四谷、早くなんとかしろよ」

「連絡いつ来るか待ってたのに。あれって予約が必要なんだっけ？」

猛烈な勢いで電波を受信している果林の前に、四谷が立つ。

「森永さん、申し訳ありませんけどこの家には鍋がありません」

「うちにあるから大丈夫だよ！」

「調理器具もありません」

「コンロないの？　コタツがあるのに？」

――すげーなコイツ。

かつて出会った事のないタイプの人類の登場に、想はただひたすら感心するばかりだ。

「じゃあもってくる！　卓上ガス！」

段ボール箱をボカンとコタツの上に乗せると、果林はダッシュで部屋から出て行った。

「おい、鍵かけとけよ」

「了承した」

四谷が立ち上がり、施錠を済ませる。しかし、これは逆効果だった。

「あれー！　開けてよー！　ガス持ってきたよー。ガスだよー、ボーってするやつ！　お鍋もあるよー！　重いから早く開けてー、開

けてー！」
やかましい事この上ない。ドアもガンガンと、下の方から音がする。おそらく蹴っているのだろう。
「四谷くーん！　四谷くーん！」
「諌山　想、開けてもいいだろうか」
「好きにすれば？」
このままではドアが壊れてしまいそうだ。居留守をするには無理があるし、大体当選した賞品が置き去りになっている。
仕方なく開かれたドアから入って来て、果林は目をまあるく開いてまずこう言い放った。
「オートロックだったんだね、ビックリしちゃった」

――桁違いのバカだな。

四谷の穏やかな制止はまったく耳に入らない仕組みになっているようで、果林は勝手に卓上コンロをコタツの上に乗せ、更に鍋もセットしていく。
この強敵に超幸運はどう対応するのか、想は黙ったまま、ただ見守る。
「困るんですが」
「何で？　絶対美味しいよ。国産和牛だもん！　食べたことある？」
「コップや皿などもありません」
「ホントにー？　じゃあ果林の貸したげるね！　あとで持ってくる」

――どうやったらこんなモンスターが生まれるんだろうなあ。

果林が嬉々とした様子で鍋の準備をすすめていく。
そして段ボールの中から当選品を取り出したところで、はたと動きを止めた。
「ねえ、君の名前知らないかも！」

突然標的にされて、少年は苦笑しながらこう答える。
「だろうね」
「私、森永　果林！」
「知ってるよ」
ピンク頭がどひゃーっと驚く。
「なんで？　私は君の名前知らないのに、なんで果林のこと知ってるの？」
「そこのコンビニによく行くからさ」
「ああ、そうなんだ。それで知ってるのかー！　いつもご利用ありがとうございます！」
ニッコリ笑う顔は、相変わらず化粧が濃い。目を細めると、黒い塊が集まって得体の知れない何かが出来上がる。
「四谷君、おはしちょうだい！」
「ありません」
「じゃー持ってくる！」
再び、ズダダと果林は部屋を出て行った。おそらく、すぐに戻ってくるだろう。
「四谷、いいのか？」
「……止むを得ない状況のようだ」
それはなんでもできる存在の割りに随分弱々しい発言で、想はしばらくゲラゲラと大きな声で笑った。

０２３　・　晩餐会　～エスポワール東録戸にて～

「ねーねー、四谷君なんで食べないの？」

エスポワール東録戸一〇三号室で始まった鍋パーティ。部屋の主は正座をしたまま、コタツに足もいれず、皿にもコップにも手をつけずに黙っている。

果林がわあわあと、食べない事への追求をしている様子を少年はニヤニヤとしたまま見つめた。さすがの超幸運も、こういう常識の通じないタイプへの対応は難しいらしい。

「ねーねー、四谷君、国産和牛だよ、サンジューサンなんだよ？」

――サンジューサン？

「森永さん、それはミエ、と読みます。サンジュウと書いてミエです」

「ミエ？　ミエって何？」

「県名です」

「頑張ったってこと？」

「違います。一生懸命の懸命ではなく、都道府県の一つ、三重県のミエです」

まったく理解が出来ない様子の果林と、冷静で丁寧な説明を続ける四谷の会話は漫才と化している。

「そんなの知らないよ！　初めて聞いたけど。ねえ、高田君！」

「俺？」

頬を膨らませている果林の顔に、少年は思わず噴出す。

「高田じゃねえし！」

「あれ、そうだっけ。ごめん。でも、ミエは知らないよね！」

自信満々で確認してくるその姿に、苦笑しながら想は答えた。

「常識だろ」
「ほら、四谷君！　ミエなんか知らないのは常識だって！」
――おおう！
どこまでも斜め上方向に進んでいく会話に驚く。そして突如、果林は更にその上へのステージへと勝手に上がっていってしまった。
「あ、もしかして四谷君……外国の人なんだ？　だから、お鍋食べられないんだね、ごめんごめん」
何故そんな結論が急に出たのか、当然理解できないままチラリと視線を動かし、少年はぶぅっと噴出した。
――四谷、安心してるし！
超幸運はこの展開が都合が良かったのか、軽く頷いている。
果林が懸賞で当てたのは四人前の肉と野菜のセットで、お構いなしにすべてが放り込まれた鍋はこんもりと山を作ってどうにもならない状態になっていた。いつ崩壊してもおかしくない野菜の山は少しずつかさを減らしていっているものの、全部が中に収まるのはやはり無理な話で、時間が経っても食べられる状態にはなかなかならない。
「なあ、これ、上の方ちょっとよけたらどうだ？　これじゃいつまで経っても食えないぜ」
「そうかなあ。そのうちシューっとへこむと思うよ」
――魔法かよ。
「無理だろ」
このままでは果林のワンマンショーがいつまでも続いてしまう。

自分だけ離脱することは可能だが、それではさすがに超幸運が気の毒だ。少年は箸を取ると、上の方でパリパリとしているまだ生の野菜を元のケースの中に戻し、鍋の大きさにふさわしい量まで減らしていった。はじめは不満そうだった果林も、すぐにぱっと笑顔を浮かべる。

「わあ、すごい。もうすぐ食べられそうだよ？」

――規格外だな、こいつは。

ちらりと四谷に目をやると、いつもの青白い顔に水滴がついている。死体が汗をかくとは思えないので、それはおそらく水蒸気がついているのだろう。澄ました顔がしっとりしている様子はやけにおかしくて、想は思わず下を向いて笑った。

「ふわー、もう、おなかいっぱい！」

最初に全量投入された三重産の和牛はすべて二人の若者の胃の中に収められて、野菜は半分程送られてきた発泡スチロールのケースの中でしょんぼりしている。

「四谷君、残念だったね、美味しかったよ？　国産和牛は」

「そうですね」

「そうだ、どこの人なの？　アジア？」

「その通りです」

「かりん、外国の人といっぱい話したの初めてかも。ねえ、四谷君は、日本語上手なんだねえ」

澄ました顔で果林のボケにどこまでものっていく超幸運に、笑いを堪えきれずに少年は下を向いてプルプルと震える。

「ねえねえ高田君、美味しかったでしょ？」

「俺？」

「うん。どうだった？　国産和牛は！」

確かに美味だった。しかし。

「高田じゃねえし……」
笑いを堪えながらなんとか顔をあげると、ピンク頭が困った顔をしている。
「あれれ、かりん、君の名前知らない気がする」
「さっき自分でそう確認してたじゃんか」
「えー、大久保君だったっけ？　中野君だったっけ？」

このまま自分の名前が何に落ち着くのか、見守りたい気もした。
しかし、少年の脳裏に一瞬、寂しげにうつむく父の姿が思い起こされてきてしまって、それがどうにも振り払うことができない。
思いも寄らぬ会食に招かれたおかげで、カーテンの端から見える外はもう真っ暗になっている。携帯電話も持っていない自分を、両親はもしかしたら心配しているかもしれない。
多感な少年に突然もたらされた、新しい命の誕生のご報告。もっと幼い子供なら、わあい、僕にも弟か妹ができるんだね！　と受け止められるそれは、高校生にとってはやたらと生々しい「両親の夜の何とか」に進化している。そんなことまでわざわざ考えて、想はふうと息をついた。
別に両親に心配かけたくない、なんて殊勝なことを考えているわけではない。ただ、今の両親の精神状態を想像してみたら、なんとなくいつもよりめんどくさい反応がありそうでそれがイヤだ――。
しょうがないからそろそろ帰るか、と決意して、想は口を開いた。

「諫山　想、だよ」
またコンビニで会う可能性は高い。自己紹介をしておけば、面倒くさいことも少しは減るだろう。そう考えて、能天気なピンク頭にとうとう名乗る。
「イサヤマソウ？　それって、どういう草？」

――バーカ。

「俺の名前、苗字が諫山で、名前が、想」
「そうって、どういう字書くの？」
「想像の想だよ」
「ああ、つくるって読むやつね！　へっへー、かりん、その漢字わかるよ！」
「違う。あとは四谷に聞いて。俺、帰るから」
冬の夜の訪れは早くて、窓の向こうに広がる闇では時間がどれくらいかの判別はもう難しい。
超幸運の部屋には時計がない。やってきたのは三時を過ぎたくらいだったはずで、鍋パーティが始まったのは四時。かさの減らない鍋を見守って、それに片をつけて食べて……。今は大体、六時前くらいかとあたりをつける。

――夜飯にしちゃ、ちょっと早かったな。

上着を羽織り、一〇三号室のドアを出て、少年は軽くため息をついた。道路の向かいに、暗黒のクリスマスイブ同様、父が息子の姿を求めてキョロキョロしているのが目に入ったからだ。

――しょうがねえなあ。

うんざりした気分になりながら足を踏み出そうとすると、背後でドアが開いた音がした。
「そーちゃん！」
その大きな声が聞こえたらしく、父の注目が息子に向く。
なんとなく見られたくない、ピンク頭との絡み。
「そーちゃん、帰っちゃうの？」

その甘えるような声に、仕方なく想は振り返った。何の用かはわからないが、さっさと決着をつけて帰りたい。
「そうだけど」
「……果林のお部屋に寄らなくていいの？」
「悪いけど後片付けは四谷とやってくれ」
「え？　でも四谷君食べてないから」
「ちょっと急ぐからさ」
待っている父の元へ向かおうと振り返ると、いつかとおなじように腕にぎゅうっと、やわらかいものがしがみついてきた。当然慌てて、振り払う。
「なんだよいきなり」
「ホントに来なくていいの？」
「どこにだよ？　お前のとこ？　なんで行く必要があるんだ」
ちょっと強めにこう答えると、果林は何故かモジモジと足を内股にして、とんでもないことを言い出した。
「だって、おうちで一緒にご飯食べた後はエッチしないといけないんだよね？」
「……」
頭の中に、ごちゃっとした何か、黒とか茶色とかで構成された思考のゴミが溢れる。
苦い表情でしばらく立ち尽くし、なんとか脳内のゴミの山を端っこの方に片付けてから、少年は口を開いた。
「誰がお前にそんなこと言ったんだよ」
「テツオ君」
頭をぽりぽりとかいて大きなため息を吐き出すと、少年とピンクの間に白いもやがふわあっと広がる。その向こうに見える果林の顔がムーディかというと、そんなことはない。
「お前、騙されてるぞ。別にしないといけないなんて決まりはねえ

から」
「……四谷君も？」
「当たり前だ」
つい先ほど交わした謎の会話の正体が、ここでわかった。「一緒に食べた相手と」という条件ならば、厳密には四谷には適用されない。そういうことなんだろうと考え、あまりにもアホすぎる目の前の女子にちょっとだけ悲しい気分になってつい、想は言ってしまった。
「っていうか、お前がイヤなら、相手が何言ったって関係ないんだぜ？　もうちょっと自分のこと大事にしたら？　あぶねえだろ、そんな風に自分から切り出すなんて。安売りしすぎもいいとこだと思うけど」
じゃあな、と手を振り、また振り返る。父がじっとこちらを見ていることに気がついて、至極めんどくさい気分になりながら足を踏み出す。
と、思ったら、またまた腕にぎゅうっと、しがみつかれてしまった。
「何だよっ！？」
さすがにそろそろしつこくて、大きな声が出る。目の前にあるのは適当に書いた落書きの花のような、力の抜けた、しかしやたらと幸せそうな笑顔。
「見つけた！！」
果林がふにゃふにゃなスマイルを浮かべたまま叫ぶと、世界は突然、暗闇に包まれた。

０２４　・　少年を襲った悲劇的喜劇的衝撃

すぐ、本当にすぐ目の前に人がいる状態。少年にとってそれは、初めての経験だった。

ふわふわに広がったピンク色の髪が遮って、視界には光がまったく入ってこない。そんな暗闇の中感じるのは、唇に当たる少し湿った柔らかい……多分、果林のテカテカリップだ。

突然巻き込まれたラブシーンに体が固まり、しかし、すぐに我にかえって少年はえいやっとレディを思いっきり突き飛ばした。一体どれくらいの時間、密着していただろう。ひどく長かったような、ほんの一瞬だったような。

「なにすんだよっ！？」

いや、時間の長さは関係ない。全然嬉しくない相手とシチュエーション。父の観覧つきの、さんまの内臓のような苦すぎるファーストキスに憤って、怒鳴る。しりもちをついた果林は、目の端に涙を浮かべたままぷうっと頬を膨らませていじけた。

「キスだけど」

「いや、だから……」

この相手に真剣に怒るのは無駄なのだろうか、と思えるこの脱力感。想は手の甲で自分の口をぐっと強く拭ってから、勢いを削がれた怒りをなんとかひねり出して果林にぶつけてみた。

「なんで、したんだよ？」

「そーちゃんはかりんの王子様でしょ？」

「はい？」

ますます、体から力が抜ける。

――落ち着け、相手は人外だ。質問をする時には具体的に、はっきり要点をつかないとダメだ。

「王子様って何のこと？」
「あのね、サッチが言ってたの。すぐにエッチしない男の子が、かりんの運命の王子様なんだよって」
「……ごめん、ちょっとわかんねえわ」
果林は座りこんだまま、じっと上目使いで想を見つめている。妙にうるうるとした瞳は、なんとなくチワワを想起させる。がしかし、少年はチワワを可愛いと思ったことがない。
「サッチはね、男の子はみんなエモノだって言ってた。だけどその中に、エントロピーがいるはずだから、そういう素敵な王子様と付き合うんだよって」
想の眉間にかつてないほどの深い皺が寄る。

――お手上げだ！

「……ちょっと急ぐから、俺、行っていいか？」
「うん、いいよ。そーちゃん、またね」
あっさりと笑顔で王子様を見送るピンクに、何度目かの衝撃を感じつつ、少年は振り返った。道路の向こうの父は、そっと斜め下のあたりに視線を向けて少し小さくなっている。
それにはあっとため息をついて、想は弱った足取りでいつもよりゆっくりと家へと歩いた。

諫山家のリビングには、ソファでぐったりと横たわっている母の姿があった。
「想、おかえり……。お友達のところに行ってたの？」
「まあね」
父がコホンと、わざとらしく咳をする。それにムカついて、少年は顔をしかめた。

「さっきの、別にカノジョとかじゃねえからな」
「……じゃあ何なんだ？」
「俺が知りたいよ。さっきいたのはクラスのやつの部屋で、その隣にあの女が住んでて勝手に来て勝手に暴れたの！」
「へえ」
初めて見る、父の冷たい視線。絶妙なムードを醸し出している父と子の対峙する姿に、母は困惑した表情を浮かべた。
「何があったの？」
「いや、別に」
親子で完全に同じセリフを口にしてしまって、想はますます顔をくしゃくしゃにした。

「想、明日携帯電話の契約に行くぞ」
「あん？　俺の？」
「そうだ。母さんが安定期に入るまでは何かあった時にすぐ連絡が取れた方がいいから」
父の言葉を受けて、視線を動かす。ソファの上でぐったりしている母は、つわりとやらで参っているらしい。
「高齢出産は色々とその、大変なんだ」
「高齢ね」
先ほども出てきた、黒とか茶色でできた思考のクズが頭の中にまた積もっていく。考えても答えが出ない、焦げついた色んな感情をブルドーザーで全部隅っこに押しのけて、少年は大きく頭を振って答えた。
「わかったよ」
「ありがとう」
母の声は震えている。
「何？　泣くほど嬉しい？」
「うん」
どうしたことか、ソファの上に涙がぽろぽろと落ちている。

「何あれ？　情緒不安定なの？」
「そうだ。妊娠するとちょっとしたことであああなるから、あんまりキツイこと言うなよ」
小さい声で、こそこそと渋い顔の父と会話を重ねる。面倒くさい気分でふうと少年が息を吐き出すと、父親が背中をバシンと叩いてきた。
「期間限定のことだから。とにかく、無事に生まれるまでは頼む」
「はいはい」

部屋に戻り、ごろんとベッドの上に転がる。
頭の中に詰まれた、最近起きた色々な出来事。どれもこれも角がとんがっていて、触れるとケガをしてしまいそうな痛い出来事。
思わず、少年は唇に触れた。先ほどの、あまりにも唐突で理解不可能な事件。記念すべき、ファーストキス……。
ここまで考えて、げえっと舌を出す。何か飲み物が欲しい。立ち上がって、上着を持って家を出る。
「ちょっとコンビニ」
「想、なにかレモンが入ってる飲み物買ってきてくれないか？」
「……いいよ」

――妊娠したら酸っぱいものが食べたくなるってか。

エレベーターのボタンを押し、エントランスへひゅうっと降りていく。扉が開くと、一気に冷気に晒されて、体がブルっと震える。

――離婚するって言ってたの、なんだったんだろうな。

息子を試すために、両親がついた嘘。……が、正解だろうか。一人暮らしなんてイヤだから、行かないでと言われたいあまりにあん

なことを言ったのか。もしそうなら、悲しい話だと少年はふっと笑った。あんまりにも自分のことが理解できなくて、ここまで大がかりな仕掛けを用意しなければならなかったのだから。

――あの時、グスグス泣いてたのってもしかして？

クリスマスの悲しいディナー。母の頼りない姿が脳裏に蘇る。妊娠のせいで情緒不安定らしいところに、自分のあの態度はないよなあとケラケラ笑う。小さく笑うたびに息がふわふわっと白く宙に舞って、愉快そうに少年に同意してきた。ほんとだぜ、想、お前はひどい奴だ！　と。

コンビニでレモン入りのドリンクと、自分用のお気に入りの清涼飲料水を買って、寒い道をまた歩く。ちらりと向かいにあるボロアパートが目に入って、想はふと立ち止まった。あの鍋パーティの始末はもう終わっただろうか。超幸運はあのイカレピンクにどう対応したのだろう。先ほどの強引な扱いには腹が立ったが、規格外のバカに振り回される四谷の様子の面白さがちょっとだけ勝利して、想の口からはまた小さく笑いが漏れた。ついでに、笑うことができた自分に安心する。

――ほんと、甘酸っぱい思い出だこと。

惨劇を忘れることに決め、エントランスをくぐる。エレベーターは誰も使う者がいなかったのか、一階でじっと少年を待っていてくれた。

翌朝、契約に行く前に父に買い物を頼まれ、想は家を出てとりあえず四谷の部屋を訪れた。

「諫山　想、何か相談か願いができたのだろうか」

「別に。昨日あの後どうだったのか聞こうと思ってさ」
さぞかし困った事態になっただろうと、ニヤニヤしながら聞く。
部屋の中は寒い。窓が開け放たれているからだ。カーテンが時折窓の端でゆらゆらと揺れて、空気が入れ替えられていく。
「諫山　想が帰宅した後、森永　果林は非常に上機嫌で片づけを済ませ、この部屋に持ち込んだ荷物を自分の部屋に持ち帰ったがまた戻ってきて、わたしに諫山　想についての詳細を質問してきた」
「なに!?　お前、なんか余計なこと言ってないだろうな?」
「想という字をどう書くか教えるのに三十分を要し、かけるようになったら満足して帰っていった」
「それだけ?　それだけならまあいいか……?　いや、なんか気持ち悪いな」

――大体、そんな難しい漢字じゃねえだろうがよ……。

プシューっと音を立てて心がしぼんでいくのを感じて、少年はふうとため息をついた。
「喜んでいたぞ」
「なにを?」
「想の字に、『木』の字が入っていることをだ」
「はあ?　なんで?」
「『自分の名前には木がたくさん生えているから』らしい」

――わっかんねえ。つーか怖え。

体がブルブルっと震えたのは、窓が開いているからなのか、コタツの電源が入っていないからか。
「あいつのことなんとかしてよ」
「なんとかして、というのは具体的にはどういった方法を取ることを指すのだろうか」

「他の王子様用意するとか？」
「その願いを叶えるには二年と十五日かかるが叶えてもいいだろうか」
「長えよバカ！　明日用意しろ！」
「それは不可能だ」
――何でも叶うんじゃないのかよ、超幸運！？
「諫山　想、明日用意できる他の王子様では、森永　果林に非常に不幸な運命をもたらす」
「いいよ、それで」
想がなげやりに答えると、超幸運は鋭い視線を少年に向けてきた。
「本当か？」
「……」
今までになかった気迫あふれる確認に、思わず目を閉じる。
――あいつのあのテンションで、新しい王子様が来て、不幸な運命が……。
ありとあらゆる悪い展開が想の頭の中を駆け巡る。あまりにも簡単にポンポンと浮かんでくるバリエーション豊かな鬱展開に、少年はこくこくと小さく頷いた。
「ま、確かにイヤな気分になりそうだな」
四谷はいつもの無表情だが、どこか、なんとなく満足そうな雰囲気で頷いている。
「お前さ、なんか口数増えてない？　そんなこと言うキャラだったっけ？」
「本契約になったからな」
――やる気が出ちゃってるって事？

「やる気は俺のために出すんじゃねえの？」
「今断ったのは、諫山　想が不愉快な気分にならないための処置だ」
「あっそ」

しかし自分が王子様扱いされる日々が続くのかと思うと、そちらもだいぶ不愉快で、想はちょっと厳しい視線を超幸運に向けたがあっさりと無視されてしまった。

０２５　・　超幸運と契約者の運命の共有について

家に戻った少年は、具合の悪そうな母を一人家に残し、物心ついてから初めてかもしれない父と二人きりのお出かけをした。

色とりどり、その機能もさまざまな電話機が並ぶ中、息子が手に取るのは流行の最新型ではないものばかりで、父はついこんな質問をしてしまう。

「スマートフォンじゃなくていいのか？」

「通話できりゃいいだろ？」

シンプルな機能の電話機は、店頭にはあまりないらしい。シニアかジュニア向けの簡単なタイプものではさすがに見た目があんまりだったので、想は仕方なく無駄に色んな機能が搭載されている黒いものを選んだ。

「ゲームとかネットとかしないんで」

店員は、あらそう、みたいな顔で仏頂面の少年を見ている。

一番安い料金プランで契約を済ませると、親子は年越しのための買い物に向かった。

「帰ったら大掃除をするから手伝ってくれ」

「……わかった」

「夕飯は何がいい？」

「何でもいいよ」

会話が弾まないことこの上ない。間が持たないことに父は悩み、息子は知らん顔をしている。

家に帰ると、男二人の大掃除が始まった。普段から誰かが散らかすことのない家の中は整然としていて、キッチンだってまともに使ったのは今年に入ってから四回程度。つまり、必死になって清掃をしなくてはいけない場所はそれほどない。父が風呂場を担当し、息

子は玄関と廊下を美しくしていく。
掃除機をブンブンかけていると、母がトイレに駆け込んでまたげえげえし始める。
想は風呂場に顔を出し、壁をスポンジでこすっている父にこう聞いた。
「トイレ掃除は？」
「……今はいい」
そいつはラッキー、と少年はふふんと笑う。
諫山家の小規模な大掃除は、夕方になる前に終わった。

誰かが腕を奮うディナーというものは、先日のクリスマスを除いて諫山家には長い間存在していない。今夜の食事も出来合いのものだ。適当に買ってきたものを適当に食べて済ます、いつも通りの夕食の光景。一つ違うのは気分の悪そうな母の姿で、こちらはフルーツをちょっと食べるくらいで終了する。
夫が妻をいたわっている横で、その息子はまた知らん顔をしていつものように夜の散歩へ出かけた。

四谷の部屋にドリンクのサービスはないので、まずはコンビニへと向かう。
心配はしていた。それは見事に的中して、店に入るなりレジの中からピンク色の声があがる。
「そーちゃん！　いらっしゃいませー！」
さすがに仕事中ということを弁えているのか、果林が突然抱きついてくるようなことはなかった。しかし、やってきたお客の高校生に手がブンブンと振られている様子を他の客も店員もジロジロと見ている。
それに構わず、想はホットドリンクのケースからコーヒーを取り出して男性の店員が立っているレジに向かった。
「そーちゃん、かりんはこっちだよー！？」

男性の店員は、どうやら加藤君というらしい。二十歳そこそこくらいに見える加藤君は、少し困惑した表情で同僚と客を交互に見つめている。
「お願いします」
「あ、はい」
「そーちゃん、なんでかりんのレジに来ないのー？」
声のする方に顔を向けずに、しかしちょっとだけしかめる。
「そーちゃんの意地悪ー！」
「百二十六円です」
財布から小銭を取り出し、台の上に並べる。
「でも大好きー！　そーちゃん、一緒に紅白観ようよー！」
「うるせえよっ」
さすがに注意した想を、加藤君が驚きの表情で見つめている。そんな彼から小さなビニール袋入りのコーヒーを受け取って、少年は顔をしかめたまま店を出た。

「やっぱり他の王子様を用意してくれ」
「今から用意するとなると、二年と四ヶ月かかるがいいだろうか」
「なんで伸びてんだよ……」
悪態をつきつつ、コタツのスイッチを入れる。相変わらず動作する気配のないファンヒーターは部屋の隅でじっと黙りこくっていて、それに舌打ちをしながら想はコーヒーの蓋を開けた。
「それって最善の場合にかかる年数なんだろ？　なんで俺があいつに最善の運命用意しなきゃなんねーんだよ」
「そうではない。諫山　想、最初に説明をしたはずだが」
「何をよ」
「他人の邪魔をする場合の条件についてだ」
想の脳裏に、契約をした日の放課後の光景が思い起こされる。確

か、野球部のうるさい掛け声を封印してくれと頼んだ時の事だった。

「……相手のためになって、かつ、俺のためにもなる場合はいいんだっけ？」

「その通りだ」

少年の口から、今年最後で最大級のため息が漏れ出てきた。

「なんだ、それ？　意味がわかんねえ。邪魔ってなんだよ」

「森永　果林にとって、諫山　想と時間を共にすることは人生における重要な成長の機会となる。この機会を失うのは森永　果林にとって大きな損失となり、その運命を不幸なものへと変貌させる」

「知るかよそんなこと！」

「また、森永　果林と時間を共有することは諫山　想にとってもより良い人生を歩むために必要な要素となっているので、それらを超えてもっと良い状態になるためには二年と四ヶ月の時間がかかる」

――はい？

ピンク色の花で囲まれた能天気な笑顔がポンっと脳裏に浮かぶ。

「俺にとって必要な要素ときたか」

「そうだ」

――どの辺が？

思考のゴミが降ってくる。焦げた色の、大小さまざまなゴミが心の中に降り積もっていく。

「どの辺がどうなのか詳しく頼む」

「それをすべて説明するのには二時間と十五分かかるが時間は大丈夫だろうか」

「長えわ」

――どんなドラマが待ってんのよ、あいつと俺に。

心の中のブルドーザーのエンジンはなかなかからない。積もって山になった黒い感情の燃えカスをどうしたものか。悩みつつ、想は口を開いた。

「俺ってあいつと付き合うことになるわけ？」

「付き合うというのが男女間における恋愛関係のことを指すのだとしたら、違う」

「違うんだ。じゃあ友情？」

「愛情よりは友情の方が近いだろう」

「そういう曖昧な言い方やめてくれない？　何だよ。友情でも愛情でもないものって」

四谷がぴたりと動きを止める。想はそれを見咎めて、眉間にぐっと皺を寄せた。

「また止まったな。なんだそれは、超幸運さんよ」

「なんでもない。諫山　想と森永　果林の間に発生するものは、表現が非常に難しい。しいていうのなら」

「しいていうなら？」

「親愛、が適当だと思われる」

目を閉じ、眉間のあたりを小指でぽりぽりと掻く。

「わかんねえわ」

少年が呟くと、超幸運は少し小さな声でこう答えた。

「何もかも理解する必要はない」

――このやろう。

澄ました顔にムカっとしつつも、どうやらあのアホピンクと恋人同士にならなくても良さそうだという話にはほっとして、コーヒーを流し込む。

そこに、けたたましい電子音が鳴り響いた。電話だ。呼び出し音

の設定は、デフォルトの「パターン1」。
『想、どこにいるんだ?』
「すぐ帰るよ」
父からの問いに簡潔に答えて通話時間は七秒で終わる。見事な携帯電話デビューを済ませ、少年は立ち上がった。
「諫山　想」
ドアの前で聞こえてきた、珍しい超幸運からの呼び止めに振り返る。
「なに?」
「明日この家を訪れると、森永　果林が現れて一緒に紅白歌合戦を観ることになる」
「……ははは!」

――とうとう白状しやがったな!　未来が読めるって!

いつも通りの無表情に向けてニヤリと笑い、つっこみを入れようとした瞬間、ふと気付く。
「どこで観んの?　テレビがないのに」
「一〇五号室へ強引に連れ込まれ、それが諫山　想にとって年頃の女性の部屋に入った初めての経験になる」
「最近の四谷君は随分余計な事を言うようになったんじゃないか?」
これも本契約になったからなのだろうか。想は少し考える。しかし、こんな風に未来の予定に関して簡単に言及してくるのはやはり不思議だ。そこには少年を不快にしないための配慮以外の何かがありそうな気がして、更に考える。

そして出た、一つの結論。
「もしかしてお前もあいつが迷惑なんじゃねーの?」
「その通りだ。われわれが一番困るのは、ああいった思考の回路が乱れているタイプの人間で、ベタベタと触れられたり、思ったこと

を即大声で口に出されると対応に苦慮することになる」
「あはははは！」
あまりにも正直に白状した超幸運に、少年はゲラゲラと大きな声で笑った。
「おまっ……、なんでもアリなくせに……！　はははは！」
「諌山　想、本契約をした契約者と超幸運は運命の一部を共有することになる。われわれは超幸運と契約をしたことのある人間以外には伏せられておくべき存在だ。少しだけ、契約者にも付き合ってもらわねばならない場合もある」
「いいぜ！　全っ然、問題ねえし！」
まだケラケラと笑う想に、四谷はキリリとした顔でこう告げる。
「ただし諌山　想が森永　果林とともに明日の紅白歌合戦を視聴したい場合には私にそれを止める権利はない」
その言葉で笑うのをピタリと止めると、少年は「そんなわけねーだろ！」と捨て台詞を吐いて、エスポワール東録戸を後にした。

０２６　・　超幸運の体の交換についての対策会議

新年がやってきた。

しかし、少年の暮らしに変化はない。具合の悪い母、家の事であたふたする父は正月どころではなく、高校一年まで成長した息子は両親が手伝わなくとも大抵のことは自分でできる。年始まわりもなく、親戚が大挙してやってくる習慣もない諫山家は元日から通常営業だ。周囲の店が閉まっているのと、テレビ番組のプログラムがやたらとめでたい雰囲気以外に違いはない。

超幸運にメールを送る。

隣のおかしな女がいつ襲撃してくるのか、確認するためだ。しかし、返信はない。ほんの少しムカついてみたものの、よく考えてみたらどうやってメールを受信しているかもわからなかった。

仕方なく立ち上がり、父に一声かけて出かける。町は正月特有の静けさに包まれ、外に人影はない。とりあえずコンビニへ向かい、入る前に中を覗くとピンクの姿は見あたらなかった。

「いらっしゃいませー」

ホットドリンクの棚の前に立ち、ゆずの入った日本茶に手をかける。

――いや、もしかしたら家にいるってことか？

そして四谷と二人でコタツに入っているところに突撃してくる可能性は何パーセントくらいだろうか。

――いや、正月だし、帰省してるとか。

そういえば森永　果林について、残念すぎるアホだということ以外何も知らない。それにちょっと笑いながらレジへ移動し、肉まんを一つ注文する。
「あ、そーちゃんの人？」
「はあ？」
いきなり声をかけてきたバイトの加藤君をジロリと睨むと、バイト店員はひどく慌てながらバーコードリーダーでお茶をピっとした。
「すいません」

――あいつ、何か余計なこととか話してそう。

果林だって、想のことはおそらく何も知らないはずだ。隣に住んでいる四谷の友人で、何故か一緒に鍋をつついた事があって、安易な肉体関係になることを拒否したナイスガイで……。

――その他に知ってるのなんか、名前くらいだろ？

ふう、と小さくため息が出てくる。

――あれか。ロールスロールに乗せてくれる人でもあるのか。

今度は小さく笑う。お茶と肉まん入りの小さいレジ袋を受け取って、店を出た。

少年が向かったのはもちろん超幸運の部屋で、勝手にドアを開けようとすると珍しく鍵がかかっていた。と、思ったら、内側から扉が開く。
「諫山　想、何か質問か願いができたのだろうか？」
「いや、別に」
中に入ると、四谷がしっかりとドアに鍵をかけている。

「もしかしてあいつ、勝手に入ってくんの？」
「その通りだ」
大真面目な顔に、笑いを堪える。
「諫山　想が自由に出入りしているので、それを真似たらしい」
「なに？　俺のせいなわけ？」
「そんなことは言っていない」

――言ってるじゃねえか。

「諫山　想」
コタツのスイッチは相変わらずオフだ。もちろん、ファンヒーターも。コタツ布団に手を入れて、スイッチを入れながら答える。
「何？」
「あけましておめでとう。今年もよろしく」
「……おう」

――ウケ狙いじゃねえよな？

本契約になって以来、やけに無駄口を叩くようになった超幸運をじっと見つめる。相変わらずの澄まし顔に、ふと思うことがあった。

――来月、変更なのか……。

次はどんな顔の者になるのだろう。なんとなく不安を感じて、想は袋からお茶と肉まんを取り出し、向かいに座る四谷に尋ねた。
「次に使う体って、俺が選んじゃダメなの？」
「次に使う体とは、二月十七日に交換されるわたしの肉体のことだろうか」
「それ以外にねえだろ」
「それは不可能だ。われわれは限られたものの中から、契約者とそ

の生活や周囲の状況にとって最もふさわしいものを選ぶ。契約者の意思で選ぶことは許されていない」

「なんでだよ。しょっちゅうお前の顔を見ることになるんだぞ？　俺の都合に合わせてくれたっていいんじゃねえか？」

超幸運の動きが、ピタリと止まる。

「お前、ピタって止まってる時は何なの？　処理落ち？」

「違う」

――じゃあ、どこかにある超幸運の本部と通信でもしてんのかな……。

その謎は明かされることなく、四谷の視線はまっすぐ想に向いた。

「心配しなくてもわたしは候補がいくつかある場合にはより諫山想の好みにあったものを選択する」

「好みってなんだよ……」

「たとえば女性の肉体しかなかった場合、より美しく、より胸の大きいものを選ぶようにする」

「おい！　バカ！　お前！　バカ！」

思いっきり歯を剥いて怒り、しかし無表情な超幸運の顔を見て、一気に萎える。

――この野郎、絶対わざと言ってるだろ。

「顔と胸はどちらを優先にしたらいいだろうか」

「うるせえよ！　女なんか選ぶなよっ！　絶対だぞ！？」

「参考にさせてもらう」

肉まんとお茶をプリプリしながらたいらげ、想は自宅へと戻った。

のんびりとした空気の中、母は最近すっかり指定席になったソファの上でだらんと座っていて、父はその横に控えている。

「おかえり」
「うん」
「なあ、想」
父に呼び止められ、仕方なくそばに座る。
「父さんはもう五日から仕事だから、学校が休みの間母さんのこと頼むぞ」
頼むぞ、の具体的な内容はわからない。ただ、今の父のようにつきっきりでいろといわれたらかなりのうんざりが蓄積しそうだ。息子の顔が険しくなった事に反応して、母がそっと口を開く。
「頼むっていっても、ちょっとお買い物に行ったり、掃除手伝ってくれたらいいから」
「わかったよ」
「安定期になったら具合もよくなるから」
それにも、わかった、と返事をして少年は自分の部屋に戻った。
パソコンを立ち上げて、「安定期」について検索を始める。
――五ヶ月くらいから?
その前に、母が一体今妊娠何ヶ月なのかが不明だ。父と母、二人の間に愛が戻ってきた日……などと考えると、妙に生々しい話になってきて、想は考えるのを止めた。
――しーらないっと。
おそらく今年の夏頃に、可愛い弟か妹ができる。そしてその子は……まっすぐ育つ。
四谷の言葉を思い出し、少年はニヤニヤと笑った。
――良かったね、おとーさんおかーさん。

ちょっと前まで、妻はよそのおっさんと不倫、夫は家族に無関心だったわけで。

――可愛い天使はまっすぐ育つんだってよ。

なにせ、地球からの贈り物の折り紙つきだ。まったく、心強いことこの上ない。

――名前、何になるんだろうな。

多分、超幸運は知っている。あの時絶対、名前を言いそうになったはずだ。

最近、本契約になって以降どうも口数が多い。あの変化は一体何なのだろう。少しだけ面白くて、想はふふんと笑うとベッドに転がって、そのまま眠った。

「想、電話だぞ」

新年になって三日目、少年はこんな父の呼びかけで目を覚ました。

「誰から？」

「ナカシマ君だって」

家に電話をかけられるなんて一体、人生で何回目だろうか。そんなことを考えつつ受話器をあげると、ウザキングはテンションの高いしゃべり方で新年の挨拶を述べ、宴を催すから遊びに来ないかと想を誘ってきた。

「いいぜ」

「じゃあ今から迎えをやるよ！」

――今からかよ。

どうも最近周囲には勝手な連中しかいない気がする。そんな考えが少年の頭をよぎる。

「ちょっとでかけてくる」

「ナカシマ君の家に行くのか？」

「うん」

「そこの、目の前のアパートに住んでる？」

「違う。それとは別」

父と母が見つめ合って微笑んでいる。どうやら、息子を招いてくれる友人が激増中なのが嬉しいらしい。今までゼロだった、掛け算すらできない数字だったのが、今では二に増えたのだ。

父からのクリスマスプレゼントと、契約したての携帯電話を持ってエントランスへと降りる。

――あいつがバイト中か確認できたらいいのに。

果林が在宅していて、ふっと出てきてリムジンと遭遇するとおそらく、面倒くさい。

しかしわざわざ家までいって、いるかどうかの確認をするのもおかしい。

――おーい四谷！　あのピンクは今どこだ！？

当然ながら返事はない。ポケットには携帯が入っている。どこからでもメールを送ることができるようになったが、質問を送っても返事は来ない。

仕方なく歩いて、一〇三号室の扉に手をかける。すると、鍵はかかっておらずノブはクルっとまわった。

――ということは。

今なら果林が勝手に入ってくる心配はないということだ。イコール、どこかに行っていて、留守。

安心しつつマンション前に戻ると、すぐに仲島家の車がやってきた。

「諫山様、あけましておめでとうございます。本年もお坊ちゃまをよろしくお願いいたします」

「こちらこそ」

想は珍しく満足そうにニッコリ笑うとフカフカのシートに体を埋めて、久しぶりの仲島家へ、優雅な気分で出かけた。

０２７　・　超幸運と契約者の親密度によっておきる変化

「やあやあ、よく来てくれたね諫山君！　あけましておめでとう！」
「おう」

仲島のご機嫌な笑顔は、こんがりと日に焼けている。それに、ああ、南半球は夏だったんだなと納得しながらいつも通り、リッチなソファで想はくつろいだ。
息苦しい自宅に比べ、座り心地といい、室温といい、美人揃いのメイドさんがズラリと並んでいる様といい、最高に快適で少年の気分は良くなっていく。
「仲島、これやるよ」
いい気分で、去年のクリスマスプレゼントを差し出す。
「なんだい、これは」
「いつも世話になってる、礼」
安っぽい封筒からチケットを二枚取り出したボンボンは、そこに印字されている内容を確認するとそのまま後ろにドーンと倒れた。
「坊ちゃま！」
「きゃあ、廉様！」
慌てて執事とメイド軍団が駆け寄ってくる。後頭部に若干痛みはあったようだが、お坊ちゃまはすぐに意識を取り戻して、集った軍団に笑顔を振りまいた。
「いやいや、大丈夫だ。あまりの嬉しさにちょっと、意識がね」
「何なのですか、それは」
「ふふふ……ははははは！　みんな見るんだ！　この、僕達の輝かしい友情を！」
ババーン！　という効果音を背負いながら仲島がチケットを前に突き出す。執事の権田は、それをふむふむと確認し、ちょっとのけぞると大きな声を挙げた。

「これは！　我々が全員で電話をしたのに予約が取れなかった……！！」
「そうだ！　クラッカアンドサイダーの単独ライブの！　ティケッツ！」
――うぜえーっ！
学芸会のようなその大げさな展開に笑う。
そんな半笑いの想に対して、仲島の目には涙が光っていた。
「僕のために……何か無茶をしてくれたんじゃないだろうか、諫山君！」
「いや、してねえよ。たまたま親父が手に入ったって言って、くれたんだ」
「んふー！　なんという、なんという導き！　やはり諫山君は僕と親友になる運命だったんだね！　わかった一緒に行こうじゃないか、この喜びを二倍、いや、四倍、いやいや、無限大にするために！」
「俺興味ないから、誰か他のファンのやつと行けよ。その方が楽しいだろ？」
「なん……て、無欲な男なんだ君は！　本気で言ってるのかい！？」
――お前のテンションにはついていけねーっつーの。
一緒に行けば、その後何週間もきっと「あの時のエキサイト」について話し続けられるに決まっている。そんなのはご免こうむりたい事態でしかなく、少年としては一緒に行くことは絶対に避けたい。
仲島にうんうんと笑顔で頷いていいお友達のフリをし、想は用意された中華風のおせちに手を伸ばした。
「これ何？」
横に控えるメイドさんがニッコリと微笑む。

「北京ダックでございます」
「へー、これがあの。旨いね」
「恐縮です」
　他にもおいしいものがぎゅうっと詰まった箱に、少年はすっかりご機嫌だ。思い起こせばロクなことのなかったとんだ年末年始だったな、なんて思いながら次の何かに手を伸ばす。
「これも旨いね、何？」
「あわびだよ、諫山君」
「これがあの、ね。納得だわ」
「ねえ諫山君、本当に君はライブに行かなくていいのかい？」
　真剣な顔で目の前に迫る仲島に、想はちょっと眉をひそめた。何せ、距離が近い。キスでもしそうなその距離感に嫌な思い出が蘇って、体をそらす。しかし、仲島はそれを追ってさらに迫ってきた。
「いいって言ってんだろ？　興味ねーんだから」
「じゃあ、僕が、僕がその……あの、おおおおおんなの子と行っても、怒らないかい？」
　思いっきりかみまくったお坊ちゃまに、思わず吹き出す。ツバが何粒か顔にかかったというのに仲島は微動だにしなくて、とてつもなく不気味だ。
「怒るかよ。勝手に行けよ」
　つっけんどんな口調に、仲島が哀しげな顔をする。
「やっぱり怒るんだね？　ごめん、やっぱり誰か……権田、一緒に行こうか？」
「怒ってねえよ。行きたいやつが行くのが一番だろ？　誰でも好きなやつと一緒に行けばいいじゃねえか」
　――めんどくさいヤツだな、ホント。
「本当にいいんだね？」
　迫りくるボンボンにちょっとだけ笑顔を浮かべてうんうんと頷く。

それでようやく、仲島が離れた。
「ああ、ありがとう。なんて素晴らしいんだろう、今日と言う日は。やっぱり諫山君を招いて正解だった！」
「ようございましたな、お坊ちゃま」
――よかったね、仲島クン。
いい事しちゃった感に満足して、次の何かに手を伸ばす。今度は見た目でわかる。海老だ。
「ねえ、諫山君にはお付き合いをしている女性は、そのー、いるのかい？」
「いないぜ」
「そうなのか。過去には？　誰かその、素敵なサムバディはいたのかな？」
「ノーバディだ」
そっけない返事に、仲島はほっと安心したような表情を浮かべた。それに対して、少年は渋い顔だ。恋バナなんか一番したくない話題であり、しかも相手はウザキング――。いい予感は皆無だ。だからこの話には一切乗らない。
「そうか。僕は今、片思いをしているんだ。この切ない気持ち、どうしたらいいのかって思い悩んでいるんだよ。オーストラリアでは言い寄ってくるレディもいたけれどすべてお断りした！　僕のこの一途な思いを邪魔することはできないんだよ！　大体、海外の女性のあのアグレッシヴさは僕にはちょっと合わないんだよね。日本女性の奥ゆかしさこそがやはり、日本人である僕には合っているわけで……」
目を閉じて熱く語る親友を無視して、フカヒレのスープを啜る。
「旨いなこれ。おかわりってある？」

「はい、ただいまご用意致します」
いつも壁に沿って並んでいるメイド軍団の、いつも左から三番目の子が一番可愛い。そんなことを考えている少年の耳に、坊ちゃまが語る恋愛論が届くことは最後までなかった。

「諫山様、今年も坊ちゃまをよろしくお願いいたします」
「いえいえこちらこそ。ごちそうさま」
リムジンで送ってもらい、ご機嫌で権田と挨拶を交わす。ブロロと長い車が去っていくと、道路の向かいに立っている人物と目が合ってしまった。

――ゲッ。

「そーちゃん！　かりんも乗せてねって言ったのに！」
ピンクの髪が揺れながらパタパタと駆けてくる。想はくるりと身を翻して家に帰ろうとしたが、やはり間に合わなかった。
「そーちゃん、どこ行ってたの？　ロールスロール乗ってどこ行ってたの？」
「ロールスロイスだろ、アンタが言いたいのって」
「ロールスロイスだっけ？　あれれ、ロールじゃないの？」
「大体、リムジンって言うんじゃねえの、ああいう車って」
「リムジンって何？　うがいするやつ？」
面倒くさいなあ、と少年が顔をしかめても果林には効果がないらしい。ぱあっと力の抜けた笑顔を浮かべたまま、やっぱり腕にしがみついてきた。
「あのねえ、果林のお部屋に来てもいいよ。今からご飯作るから一緒に食べよ」
「いっぱい食ってきたところだから、悪いね」
絡んだ腕をほどき、ぽいと外す。

「えー、何食べてきたの？　美味しかったの？」
「おせちだよ。中華の。旨かったぜ」
「いいなあー、そーちゃん、いいなあ」
「いいだろ。じゃあな」
想が手を振ると、果林はそれにゆるーく手を振り返してきた。どうやら対応はこれで良かったようだ。

「想、おかえり」
「うん」
家に帰ると父が出迎えてくれた。母はソファの上でぐったりとして、手だけをひょいとあげてくる。
「ご飯は？」
「食ってきた」
「そうなのか。仲島君だったっけ？　お礼の電話しないといけないかな」
「いいよ。あいつん家はいつも大量に作って余らせるらしいからさ」
適当なことをいって父の気を散らすと、少年は自分の部屋に戻った。満腹になった腹をさすりながら、ＰＣのモニターをぼんやりと見つめる。

――いいもん食ったなー。

思い出すと口の中に蘇る、豊かな味のハーモニー。そして、まぶたに浮かんだのは倒れていくお坊ちゃまの姿。

――あいつ、失神してたな。

よっぽど嬉しかったんだろうなと考えて、思わず笑う。あんな風

に直立の姿勢のまま倒れる人間を見られることは早々ないだろう。
「想、どうした？」
「は？　……なんでもないよ」
ドアの外からかかった父の声にこう答える。どうやら、笑い声がリビングまで聞こえてしまったようだ。なんとも恥ずかしい気分になって、少年は首をブンブンと振った。そして気がついた。いつものアレ、お部屋で過ごす時の必須アイテムがない。
「ちょっとコンビニ」
「いってらっしゃい」
喉の渇きを潤す本日の一本を求めて外へ出る。冬の空気が顔をなでつけて、想はブルっと震えた。道路の向かいにエスポワール東録戸が見えて、果林がいないであろうことに安心しながら行きつけの店に入ってホットドリンクを用立てると、帰りに一〇三号室へ寄った。
鍵が外れる音がして、ドアを開く。いつもの挨拶の言葉は何故かない。
「よう。アレ、言わねえのか？　諫山　想、何か願いか相談が、ってやつ」
「そろそろ飽きてきたのではないかと思われたので、違う挨拶を考案しているところだ」
――何それ。
「新年は色々違うんだな」
「冗談だ。ドアを開けた状態で話すと、森永　果林が在宅をかぎつけてやってくる可能性が高いので、声を出すのを控えた」
――何、それ。

「諌山　想、何か願いか相談ができたのだろうか」
「ねーよ。お前、最近ウケ狙いすぎじゃねえの？　俺に何を求めてるんだよ」
「私は契約者には何も求めない。これは、本契約になったひとつの効果だ」
「本契約だとお前が面白くなるのか？」
四谷は黙って首を静かに振った。さらさらと、長い髪が左右に揺れる。
「本契約になると、契約者と超幸運の親密度が我々に影響をもたらすようになる」
「親密度ときたか」

――そんなに仲良くなったっけ？

「契約者が超幸運を信頼すればする程、われわれは……」
「何？」
「表現が難しい」

少年はじっと待ったが、超幸運はうまい表現が見つけられなかったのか黙ったままだった。
想が特に追求をしなかったせいで、結局何がどうなるのかは解明されないまま、この日の訪問は終わった。

０２８　・　高校生の極めてノーマルな日常　２

ダラダラと冬休みを浪費し終えて、とうとう学校生活が再開した。なまりきった体に鞭を打って家を出る。外は寒いが、学校が歩いていける距離にあるのは救いだ。一時間以上もかかったり、満員電車に揺られる通学なんてまっぴらごめんな少年は、それを第一の理由にして県立録戸高校を選んだのだが、その近さが本日からは悩みの種になってしまった事に気がついた。

想がマンションのエントランスを出ると、向かいのアパートから四谷の姿が出てきた。

程なくして隣のドアも開く。そこから飛び出してくるのはもちろん、果林だ。

「そーちゃーん！」

何故か両手で顔を覆って、ちょっとだけ指を開けて作った隙間で確保した視界を頼りに駆けてくる。

「なんだお前」

「どこいくの？　四谷君と一緒に」

「見りゃわかるだろ？　学校だよ」

「そっかあ。高校？　だよね？　どこにあるの？　かりんも行きたいなあ」

「受験すれば？」

まだ願書の受付はこれからだ。その前に疑問はいろいろとあるが。

――こいつ、何歳なんだっけ？

「受験かー。かりん、そんなのしたことないよ」

「そ」

簡潔な返事をして、構わずに歩く。手で顔を覆った果林は、歩き

づらそうに一生懸命ついてくる。
「何で顔隠してんの？」
「まだメークしてないんだー。でもね、そーちゃんがどうしても見たいんだったら見せてもいいよ」
「別にいいよ」
ぶう、という声が聞こえた。どうやら怒っているらしい。
髪もいつもの形に整える前のようで、ふわふわの長いピンクの髪はだらしなく広がっている。
「前が見えないのに歩いてたら危ないだろ。もう帰れよ」
「かりん、そーちゃんの学校行ってみたいな！　ダメ？」
「ダメだろ。生徒以外のヤツ、入れないと思うぜ」
「ダメなの？　じゃあ生徒になったらそーちゃんと一緒にお勉強できるかなあ」
答えるのが面倒臭くて、想は四谷にチラリと視線をやった。もちろん、超幸運は完全にスルーしてくる。
「四谷、なんとかしてくれよ」
「なんとかしてくれとはどういう意味だろうか」

――お前だって迷惑なクセによ。

果林の表情はよく見えないが、弾むような楽しげな足取りでずっと想の隣を歩いている。しかし、よく見れば部屋着らしいピンクのスウェットの上下しか着ておらず、足元はサンダルでひどく寒そうだ。
「お前、寒くないの？　なんにしても学校には入れねえし、そんな格好だし顔も出せねえんだろ？　帰りな」
「そーちゃん……」
果林の足がピタリと止まる。思わず、少年の歩く速度が落ちる。
「そーちゃんって優しい！」
そういうとピンクがぎゅうっと、背中に抱きついてきた。ぐるっ

と胸のあたりに絡んできた腕から抜け出ようと想は体をひねる。
「わあ！」
――誰だこいつ！？
ノーメイクの果林だ。
「そーちゃん、大好き！　やっぱりかりんの王子様なんだねー。うふ。今日お昼からバイトだから、遊びに来てね！」
大きく両手をバイバーイと振って、ピンクが帰っていく。
「おい四谷、今のって森永　果林で間違いないんだよな？」
「その通りだ」
――化粧ってすっげえ！
「おっそろしい詐欺だな」
超幸運は何も答えない。
それにしても、あんな起き抜けのような状態で上着も着ずについてくるあたり、本当に慕われていると考えて良さそうだ……と考えて、少年は大きくため息をついた。
「あいつ何歳なの？」
「本人に聞いてみてはどうだろうか？　おそらく、喜ぶだろう」
「それがイヤだからお前に聞いてるんだろ？　勿体ぶらないで教えてくれ」
「森永　果林は現在二十歳三ヶ月の女性だ。職業はコンビニエンスレインボー南録戸三丁目店のアルバイト店員で時給は八五〇円。深夜帯には更に手当てがついて」
「そういう細かい情報はいらねえ」
――あれで四つも年上なのか。

受験をしたことがない、と言っていたあたり、高校には通わなかったのだろうか。

そんな自分の思考に、少年は顔をしかめながら歩く。別にあんな電波系の近所の残念な二十歳の詳細など、知りたくもないし考えたくもない。そのはずだ。

「おはよう諫山君！　おはよう諫山君！」

「よう」

――なんで二回言った？

面倒な果林が去ったと思えば、ウザイ仲島が出迎えてくる。最近どうも、想の周囲は無駄に騒がしい。

「今日、例のライブに一緒に行って欲しい相手、誘おうと思うんだ。で、あの、諫山君もつきあってくれないか？」

「はあ？」

目をキラキラとさせるお坊ちゃまに、想はもともと大きくない目を細めて答えた。

「女誘うのにお友達付きってどんなチキンだよ、お前」

「あう……」

確か正月に言っていたはずだ。女の子を誘いたいと。それは、同じ高校の生徒だったわけだ。

「一人で行けよな」

「わかった。これが諫山流の叱咤激励なんだね！　僕は頑張るよ。親友の励ましに応えようじゃないか！」

――ポジティブですこと。

勝手に元気を取り戻した親友を、ちょっとだけ笑顔を浮かべて見

送る。
　再開したばかりの学校生活の一日目はあっという間に終了して、帰り支度をすると少年はしばらくじっと、自分の席に座ったままで過ごした。混み合う廊下や玄関が、相変わらず好きではないからだ。
　そろそろいいか、と思って立ち上がると、廊下からやけに大きな足音が響いてきた。
　早足で歩くその音は、どうやら二人分のように聞こえる。特に気にもせずに想が教室の出口まで歩くと、その音の主達とまんまと遭遇することになった。
「あ、諫山君、ちょうどよかった」
　一人は仲島だ。その少し手前には、女子生徒がいる。肩より少しだけ上までのボブカットに、赤いチェックのフレームのウェリントンタイプの眼鏡をしている。少し鋭い目に、ちょっと大き目の鼻。
　確か、同じクラスの女子生徒だったな、とぼんやり想は考えた。ただし、名前は知らない。
「俺、帰るから」
「ちょっと待って、あの、えーとね、彼女が話があるんだって、君に」
「彼女なんて、気安く言わないでほしいんだけど」
「いや、この場合の彼女っていうのは、いわゆるステディな関係をさすカノジョではなく、英語で言えば『Ｓｈｅ』にあたる代名詞的な使い方をしているのであって、決して気安い気持ちで言ったんではないということは理解してもらいたいんだけれども」
「ああ、そう」
　少々冷たそうで、理屈っぽそうな女だ。見た目はまったく、少年のタイプではない。どうやらちょっと、お胸のサイズは大きそうに見えるが。

「俺になんか用？」
「ええ、あの、諫山君、って、四谷君と仲良しだよね？」
お坊ちゃまに対する冷たい態度とは打って変わって、今度はちょっと上目遣いに、ほんのりモジモジとした様子だ。その変わりようを目の当たりにして、仲島は少々ショックを受けたような表情を浮かべている。
「別に。仲良しってことはねえけど」
「嘘……、だって、いつも一緒に帰ってるよね？　おうちにもよく、遊びに行ってるでしょ？」
メガネの発言に、想は思いっきり眉間に皺を寄せた。
「何なのアンタ。どっかで人の事見てんの？」
「え？　ううん、全然！　そんなことないよ。そんなー、えー、話をちょっと聞いたような気がしたってだけでえ」
教室の中にまだ、契約者に付き合って超幸運が残っているはずだ。
「用はそれだけ？　四谷ならまだ中にいるぜ。あいつに用なら直接言えば？」
「ええっ、いや、そんなそんな……。まさかまさかのそんなバカな、ですよー」

――なんだこいつ。

気持ちの悪い反応をしてきたメガネの言葉を無視して教室の中を覗きこんでみると、いつの間に出て行ったのか四谷の姿はない。

――あの野郎、逃げたか？

「いなかったわ。とにかく、用がないなら俺は行くぜ」
「あ、うん。えーと、ごめんね、なんか変なこと聞いちゃってー、あははは！」
「じゃーな、仲島」

「あう。うん、では諫山君、また明日」
クラスメイトに片手をあげて、教室を去る。
廊下を歩いている想の背中に、お坊ちゃまの声が届いた。
「あの、柿本さん……、それで、ライブの件なのだけれど……」
――柿本？
どこかで聞いたような気がするな、と少年は考えた。
階段を降りて玄関に向かうと、扉の向こうに四谷が立っている。
それが目に入った瞬間、思い出した。
『柿本　史絵は四谷　司の容姿が好みなので、好意を持ってよく観察をしている』
昼間一人ぼっちで過ごしている理由を話している時に出てきたプチ自慢。
――あいつなんだな。
靴を取り出し、床に放り投げて履き替える。
――お坊ちゃま、切ない片思いじゃねえか。
ふふんと笑いながら、上履きを下駄箱に突っ込み、そして少年は外から吹き込んできた冷たい風に身を震わせた。
――あの女、やっぱり、ストーキングとかしてんじゃねえの？
よく一緒に帰っている、だけならとにかく、家にという発言は聞

き捨てならない。
その真偽を確かめるために、想は足早に外に向かって歩き、超幸運と並んで家路を急いだ。

０２９　・　心が震える理由と心境の変化

「柿本って、お前のことストーキングしてんのか？」
「ストーキングと言える程の事はしていない。ただ単に、一度帰り道についてきて住所を確認し、時折、そこの電柱の影で四谷　司がどこかへ外出しないかなど、行動の確認をしていたくらいだ」
――それこそズバリ、ストーキング行為ってヤツじゃねえの？
ひそひそと男子高校生が二人、話しながら歩いている。
少年と超幸運はいつも帰り道を共にしてはいたが、隣を歩いたことはなかった。こんな風に、歩きながら長い会話をしたのも初めてのことだ。
「お前って外に出ねえよな？」
「ほとんど外出はしない。なので、柿本　史絵は四谷　司に関して、諌山　想が家に気安く出入りしている間柄の友人である事以外の事実を把握できていない」
「しょうもねえ話だな」
学校から二十分も歩けば、二人の自宅に到着する。そろそろ家が見えてくるというところで、少年のポケットに入っていた携帯電話が震え始めた。
小さなディスプレイには、母、と表示されている。
「はい」
息子が応答すると、苦しげな声が小さく、想の耳の中に入り込んできた。
一〇三号室でちょっとダラダラしてから帰ろうという予定は中止

になって、少年は母に付き添い、駅前の産婦人科に来ていた。
本日の午後から診察の予定があって、一人で行こうと思っていたけれど、やっぱり体調が良くないから一緒に来て欲しい。そんなお願いをあんな苦しげな声でされれば、さすがに断ることはできない訳で。

去年、超幸運に出会ってからというもの、想の母への気持ちは実に複雑なものになっている。それまでは無関心でいた。何も思うまいと心に決めて、そのように接してきた。
今の自分の母への気持ちは、少年自身にもスッキリと理解できるものではない。苦しさが少し勝っている混沌。しかし、だからと言って無碍に突き放す程憎しみが強い訳でもない。優しさを前面に出して、暖かい言葉をかけるまででもないのだが。
「ごめんね、想、ありがと」
「うん」
あと十五分したら午後の診察が始まるという産婦人科の中には、たくさんの女性があふれていた。その中になんとかスペースを見つけ、母を座らせる。
「どこかでご飯食べて来たどうかな。ここにずっといるの、さすがにイヤでしょう?」
その通り、絶対にイヤだ。周りの視線が微妙に自分に集っているこの状況。大小のおなかを抱えた妊婦達とその付き添いは、どうやら夫や恋人らしき男性、母親や上の子供であろうチビッコばかり。想はもちろん、廊下に座り込んで絵本を読んでいる二歳くらいの女の子同じ「上の子」にカテゴライズされる存在なのだが、周囲の目はあまりそう判断してくれていないようで、「年増女性と若いツバメ」という組み合わせを想定しているように感じられる。
「午後一番で予約が入ってるから、すぐ終わると思うの。早く終わったら電話するから」
「わかった、じゃあ行ってくるよ」

駅前の中にある定食屋で食事を終えて戻ってくると、母はまだぐったりと待合室のベンチで座っていた。
「まだ診察終わってないの？」
あれからもう四十分経っているはずだ。
「それが、分娩があったからちょっと、遅れるんだって」

――ブンベン？

そんな会話をしていたら、医師らしき白衣の女性がドカドカと廊下を勢いよく早歩きしてきて、診察室の中へ入って行った。
「終わったのかな」
「ブンベンって何？」
「お産よ」
「ああ……」
弾まない会話に顔をしかめていると、診察室の扉が開いた。
「お待たせしましたー、諫山さんどうぞー」
ふらふらと立ち上がる母に、仕方なく手を貸す。一緒になって歩いて扉の前についたところで、看護師らしき女性がおずおずと声をかけてきた。
「えーと……旦那さんも一緒に入られます？」
「息子です」
「あ、ごめんなさい、失礼しました」
慌てて謝る看護師に改めて一緒に入るかを問われ、もちろん、少年は断って待合室へと戻った。

待合室の出入り口付近で立って、母が戻ってくるのを待つ。
初めて足を踏み入れることになった産婦人科の中には、みたことのない類のポスターがあちこちに貼られている。検診がどうの、自治体からの助成がどうの、臍帯血バンクがどうの、妊娠中の食生活

がどうの。それらに目をやり、しょうもないと目を逸らし、また、なんとなく見つめる。

しばらくしてようやく、母が診察室から出てきた。

――よろよろじゃないの。

そう思ったのに、体は動かない。離れたところから見る「母が歩く姿」に目を奪われたからだ。

げっそりした頬に、青い顔。

下を向いていた視線が上がり、息子の姿を捉える。そして、母が少し微笑んだ。

「おまたせ、あと、会計があるからもうちょっと待って」

「わかった」

想はキョロキョロと辺りを見回し、椅子の空いているスペースを見つけて、座るように母に告げた。会計も、かわりに窓口へ行って支払いを済ませてやる。

駅前の医院から家までは、歩いて十二分程の距離だ。

「想、何か食事買って帰ろうか」

「いいよ。俺が後で行くから、とにかく帰って、休んでろよ」

――妊婦なんて太っていく一方だと思ってたけどな。

母は前よりも、痩せてしまっているようにみえる。最近、食事もロクにしていないようなのでそれは当然の結果なのだろうが。

「ありがとう」

涙声で返事をされて、少年は顔をしかめた。

「何、泣いてんの？」

母の返事はなかったが、カバンからハンカチを取り出して目に当

てている辺り、泣いているんだろう。
「何か食べれそうなものないの？　最近まともに食ってるとこ見てないけど」
先日検索した、妊娠についての情報をちょっと思い出す。が、今現在活用できそうな知識は仕入れていない。
「フルーツくらいなら食べれるかなあ」
「フルーツね」
長い間あまり積極的な交流をしてこなかった親子の会話は弾まない。
ただ、黙ったまま冬の弱々しい光の中を、並んで歩く。
マンションに帰り着くと、ソファに座り込み、母はふっと笑みを浮かべて息子にこう話しかけた。
「私、もしかして顔がひどいかしら？」
「ゲッソリしてる」
「ちゃんと食べないとダメよね。心配かけちゃうし、体ももたないし……」
話しながら、カバンの中をゴソゴソと漁っている。そして、想にペラペラの小さな紙を差し出してきた。
「何これ？」
「エコー写真よ。赤ちゃんがうつってるの」
黒い四角の中に、ぼやっとした白いモヤモヤがプリントされている。訳のわからない小さな数字も、白いモヤモヤも、「何がなんだか」としかいいようがない。
「これが赤ちゃんなの」
母が指さしたのは、白いモヤの中にある二つの大きな黒い丸の更に中にある、小さな白い塊。

「へえ」
何がなにやらわからないまま生返事をする息子に、母はふっと笑った。
「七月に生まれる予定なのよ」
「男？　女？」
「まだわからない」
そんなのがわかるのはまだ先よ、と母は笑い、最後にこう付け加えた。
「だけど、両方かもね」
「両方？」
「双子だもの。想、夏からは大変よ。色々手伝ってもらうことになるけど、頼むわね」

夕食用の買い物のために家を出て、想は、エスポワール東録戸の一〇三号室の前でしばらく立ち尽くした。

『諫山家の第二子はまっすぐな子供に育つ』

あの言葉の意味はなんだろう。
第二子、というのはあの時、超幸運が見通した未来で判明した性別だの名前だのを隠すための苦し紛れでした表現だと思っていた。
そう考えれば、第三子、という単語が出てこなかったのも同じ理由だと思うべきだ。じゃじゃーん、なんと！　双子ちゃんでしたー！　的なサプライズのために隠しただけ。それでいいはずだ。
しかし、少年の心には不安が湧きあがってきていた。第二子だけしか生まれないという可能性。母のあのげっそりとした様子、大体、年齢だって四十一歳だ。何か悪いことが起きて、今育ちつつある命の片方が失われるなんてことがあるのかもしれない。

いつもなら簡単に開けられる薄い木の扉に、手を伸ばすことができない。
早く聞いて、早く帰るべきだ。
今までに見たことのない、不安げな顔でぐったりとソファに横たわる母が、自分の事を待っているんだから。

ドアノブに手をかけ、ひねる。くるりとまわった事に、そういえば隣のピンクは昼バイトだと言っていた事を思い出す。

「諫山　想、何か質問ができたのだろうか」
「……もうわかってんだろ？　俺の聞きたい事」
「質問は必ず口に出してもらう必要がある」
想はそれにチッと舌打ちをして、しばらく下を向いたまま黙り続けた。

オンボロアパートの玄関は、外と気温が変わらない。ファンヒーターも勿論、ついていない。
少年が白い息を吐き出している目の前で、超幸運は微動だにせずに黙っている。

――ホントに、こいつ、生きてないんだな。

四谷の前に、白く広がる靄はない。
想の頭の中にある思考はそんなものだったが、口は勝手に開いて、超幸運に質問をぶつけた。
「俺はもう未来について質問をしないって決めた。中途半端に知ってもいいことがないってわかったから。だから、これが最後だ。教えてくれ、超幸運」
「何だろうか」
「……俺の兄弟は、今年、何人増えるんだ……？」

まっすぐに四谷の顔を見ていられなくて、視線を少し、下にそらす。

すると、何故か高校の制服のままの超幸運の胸のネクタイの紺色ばかりが見えた。

「二人だ、諫山　想。双子の性別の内訳、将来与えられる名も聞きたいだろうか？」

「……」

返事のかわりに、暖かい息が大量に少年の口から出て行く。

――脅かしやがって。

「いいよ。それは……、楽しみに取っておく」

「ならば言わないでおくことにしよう」

顔を上げると、珍しく超幸運は微笑を浮かべていた。

安心した反動からか、その笑顔に妙に苛立って、想は思いっきり舌打ちをするとボロアパートを後にした。

０３０　・　少年の心に起きた「革命」

りんごの皮をくるくると剥いていく。
そんな作業をしたのは初めてのことで、長くつなげていきたいはずの皮は分厚く、すぐに途切れていく。最後の赤い部分がテーブルに落ちて、白く、ひとまわり小さくなった林檎の姿に想は苦笑した。体が弱っている人間に、まるかじりスタイルで林檎を出すのか？と。

まな板の上で八等分にして、種の部分を切り落とす。少年はそれを皿の上に乗せると、ソファの上で目を閉じる母の前に置いた。
「……ありがとう」
「林檎なら食べられるかな」
「うん」
瞳を開けて微笑む母。
それから目を逸らして、床に敷かれたカーペットを睨む息子。
「会社ってもう、辞めたの？」
ようやく当たり障りのない質問が見つかって、少年が呟く。
「まだよ。今は有給消化中。もうちょっと落ち着いたら、出社して引継ぎしないと」
想の返事は、ふーん、の一言だ。いつもだったら。しかし、今日はどこか、センチメンタルな気分が心の奥の方から久しぶりに出張してきていて、もうちょっと話したらどうだい？　と提案してきた。少年もつい、それもいいかもしれないな、と応じてしまう。

「いいの？　会社辞めて……」
答えの前に、シャリ、という音がリビングに響いた。
部屋の中は静かだ。テレビも消えていて、親子の息遣い以外に聞こえるのは時計が時を刻む音だけ。

「いいのよ。もう、決めたから」
「ずっと勤めてきたのに？」
そう。ずっと働き続けていた。母は、自分よりも仕事を優先した。
少年の胸にひっかかってしまった小さな骨。大きすぎて、飲み込むことも吐き出すこともできない。
無表情の奥に潜む息子の苦い心情に気がついたのか、母は眉を八の字にして、悲しげな表情を浮かべている。
「離婚するって言ってたのも、マジだったのかついでに教えてくれない？」
「……」
少しだけ齧られた林檎が皿の上に戻り、母の口が小さく開いた。
そこから、なかなか言葉は出てこない。
静かに時計が刻む音が響いているが、それ以上に強烈な静寂がリビングの空気を締め付ける。
「あれは……」
質問から何分経ったのか、ようやく、声がした。小さなため息は決意の証だったのか、ふうとやけに大きく響いた息吹の後に言葉は続く。
「本当は、するつもりだったのよ。想がどうしたいのか、知りたかった。何が嫌で、どのくらい許せないでいるのか、全部知りたかったの。この子たちも、諦めるつもりだった」
少年の心は、まだ動かない。
「あのクリスマスの時は、大失敗だったね。本当はお父さんが帰ってきてからちゃんと聞こうってことになってたのに、すごく感情的になっちゃって、先走って、すごく嫌な気持ちにさせたと思ってる」
母は小さい声で、ごめんねと謝る。
「しかも、その後想のこと、試すようなことをして本当に悪かったと思ってる。二人で、随分反省したの。私達は結局、自分達でなんとかしようって考えていなかったって。想はもう十六歳なんだから、しっかりしてるからって、いい大人のお父さんとお母さんのことま

で決めてもらおうとしてた。バカみたいよね。私達は結局……」
母の目からポロポロと落ちる涙は、最近やたらとよく見かけるようになった諫山家の風物詩だ。
そんなことを考える息子の表情に、陰が落ちる。
「結局、何よ」
「あなたよりも子供だった」

――なんだよそれ。

「自分達のことばっかりだもの。私は母親でいるよりも、妻でいるよりも、仕事をこなしている現役の女でいることばっかり優先してた。お父さんはそれを応援しているフリをして、家庭なんて見ないままずっと過ごしてきた。それは全部、想を犠牲にしてのことだから。未来がある子供を犠牲にして、親が充実した人生送ってますなんて……」
落ちる涙の粒が大きく、多くなっていく。言葉は途切れ、嗚咽に変わる。
それに、少年は、盛大なため息で答えた。
「やめてよ、そういうの。俺、パスだわ」
嫌そうに顔をしかめる息子に、母は何を思ったのか、こんな事を言い出した。
「優しいね、想は」

――えー？

「こんな情けない私達を、許してくれるんだもんね……」
それだけ言うと、後はもう大きな泣き声だけをあげ続ける母に少年はどうしようもなく困って、仕方なくその背中をそっと撫でてやった。

父が帰ってきて、なんとなくぎこちない夕食を終えると、少年は自分の部屋に戻るとため息をついた。

――なんなのかね、アレは。

母が出した結論である「優しい」認定にゾワゾワと寒気を感じて、腕をさする。

今更過ぎる家族ごっこに、辟易するばかり。そう考え、ベッドにゴロンと横になる。

なぜか出てきた涙で、天井が霞んだ。

見慣れたクロスがぼやけて見えて、想は強く、きつく、目を閉じた。

「なあ、四谷」

次の日の朝、いつも通りの登校風景。隣のドアからノーメイクモンスターが出てこなかったことにほっとしながら、二人で並んで歩く。

「なんだろうか」

「俺がすぐに料理できるようになるとか、そういうのって可能？」

「それは、願いとして叶えたいという事なのか？」

「……？」

いつもと違う反応に戸惑い、少年は考えをめぐらせてみた。しかし答えは出ない。

「何その言い方」

「料理というのは、たとえば修行を重ねたプロフェッショナルの作るものを求めなければ、どんな人間もそれなりにこなすことができ

るものだ。諫山　想も、詳細な作り方を記した物があればそれなりの食事を作り出すことは現時点で可能であり、それ以上を求めるのかどうか」

「そういうことね」

いつも通り区切りのない長い話にストップをかけて、少年は空を見上げた。

電線の張り巡らされた、ジグソーパズルのような冬の空。見慣れた細切れのくすんだ青に、吐いた白い息が広がっていく。

「やってみりゃ、案外できるってことか？」

「その通りだ」

超幸運にお墨付きをもらって、想はこの日帰宅するとインターネットでレシピを集め、母が通った料理教室から持って帰ったり過去に購入してあった料理本に目を通した。そして、次の日からの諫山家の夕食を作ってみることに決めた。

「想、わかるの？」

困惑した顔で様子を窺ってくる母に背を向けたまま、顔をしかめる。

――おかーさんよりはだいぶできるみたいですけど？

やってみれば、どの作業もそれなりにこなすことができた。野菜の皮を剥くことも、細かく切ることも。手先が不器用ということもなかったし、慎重に味見をして、書かれている手順通りにやれば味の整った無難な和食ができあがる。

「これ、想が作ったのか？」

「ま、ごくノーマルな味なんじゃないの？　本に書いてあった通りなわけだし」

父の質問に、こともなげに答える。

「すごいな」
隣では母が、絶妙な表情を浮かべている。
「食べれそうならどーぞ」

こんな形で、諌山家の食卓には息子の手料理が並ぶことになった。
産婦人科で見かけた、妊婦の栄養がどうのこうの、と書かれたポスターの影響だ。
毎日コンビニ弁当を買ってクラスメイトの部屋で食べるのはやめ、仲島家の料理を味わうのはお昼の立派なお弁当をわけてもらうだけにし、朝、たまに絡んでくる果林を適当にあしらいながら日々を過ごす。

気がつけばエスポワール東録戸を訪れないまま、一ヶ月が過ぎていた。
朝と帰りはいつも通り、少し前後に並んで歩いている。
しかし、聞きたい未来も叶えたい願いもない状態の少年と超幸運の間に、会話はない。

家族のために時間を使う自分に、疑問がないわけではない。
何故こんな事をしているのか。
それが母のためなのか、まだ見ぬ二人の兄弟のためなのか、想にはよくわからなかった。

――まあ、いいんじゃないの、こういうのも。

どこかぽっかりと胸に空いたような、不思議な脱力感。
いや、単なる脱力とは違う。今まで体中に入っていた力が抜けて、楽になっている気持ちを持て余しながら、少しだけ満足感を感じながら目を閉じる。

大きく変化を遂げた息子に、母は何も言わない。時折一緒に台所に立って、その様子を静かに見つめるくらいだ。
黙ったまま母を支える息子に、父は何も言わない。ただ、一日の最後に必ず、おやすみと声をかけに部屋にやってくるようになった。

――何やってんのかな、俺。

ふっと、自嘲の笑みが浮かんでくる。想は目を閉じて、部屋のあかりを落とした。
一年のうちで最も厳しい寒さに、顔だけがやけに冷える二月。

――らしくねえ。

十六日が終わったその瞬間、こんな独り言に答える声があった。
『まったくだ』

閉じていた目を開け、じっと、動けない。
久しぶりに聞いた、黒の超幸運の声――。

『二月十七日だ。諫山　想、私とともに、行くか?』

――大集会か。

そばに四谷の姿はない。どこから声をかけているのか、あの肉体はもう放棄されたのか。
共に行く必要性の検討と、小さな疑問の数々。
それらを考える前に、体が勝手に答える。

「待ってたぜ」

『ならば招待しよう。諫山　想、目を閉じろ』

指示の通りに、開いた目をまた閉じる。

真っ暗な視界に一気に入り込んできたものは、ひたすらの青。目を閉じているはずのまぶたの裏に広がる。

『もう目を開けても問題ない』

超幸運に促されるまま瞳を開けるとそこは、上も下も、右も左も真っ青な、得体のしれない空間だった。

０３１　・　超幸運大会議への出席

青だ。

夏の空のような青い空間に、少年はいた。

自分の周囲、すべてがひたすらの青という異常な空間。超幸運と契約した時に連れて行かれた場所と同じところなのだろう。あの時は黒、今は、青。自分が立っているのか、浮いているのかよくわからない感覚。床とか、地面とかよべるようなものはないが、足元が不安定だと思うようなこともない。そんな思考に、思わず、想は自分の全身を確認した。ベッドで寝ていた時の格好。だらしない、部屋着姿だ。

視線を自分から前方に戻すと、真っ青な中に、黒い塊がいた。ぼうっとした、一メートルくらいの縦長の球体。球体というには、輪郭があやふやなそれが、「黒の超幸運」なんだと何故かすぐに理解できた。なので、おそらくその横に円を描くように並んでいるぼんやりとした塊がそれぞれ、「白」「緑」「赤」「金」の超幸運なのだろう。

――勢ぞろいか。

『諫山　想、私の横へ』

呼ばれるままに足を前に出す。歩いているんだかいないんだか、よくわからないが体は前に進んで、黒い塊のすぐ横に少年は立った。

『でははじめよう』

『今回の進行は赤だな』

『では私が』

超幸運たちが話している、らしい。その声は空気を振動させているわけではなく、頭の中に直接響いてくるものだった。少年の頭に

は同じ口調の同じ声にしか感じられず、誰が発言しているのかよくわからないという状態だ。話す時に例えばちょっと動くとか瞬くとか、そういうアクションもない。

『それぞれ、契約の状態を報告せよ。白から順に』

『契約者は一人現れたが、あくる日に他人に話したため解除となった』

『契約者は二人現れたが、それぞれ他人への報告があったため解除となった』

――わー、つまんなそー。

誰が話しているかもわからず、視覚的にも面白さのかけらもない状態に想は思わず、顔をしかめた。いつか話してもらった「誰もが参加して損をしたという感想を持つ」に納得がいく。

『契約者は一人現れたが、三日後に契約解除となった』

『契約者は一人現れ、現在本契約に進んでいる』

『契約者は現れなかった』

――現れても、他のヤツら無反応かよ。

せっかく黒が嬉しい報告をしたというのに、誰も特に反応しない。そういう決まりになっているのか、他の仲間の事に興味がないのか。

『現在の契約者は一名。本契約中を確認。では、黒以外の担当地域の割り振りを決定する。全員、確認を』

『確認した』

『確認した』

『確認した』

――誰がしゃべってんだよ？

彼らが番号順に発言していくのだとしたら、多分、司会進行の赤から始まって、白、緑、金なのだろう。だがそんな風に考えるのも意味があるとは思えない。質問する気すら起きないし、当たっていたところで何があるわけでもない。

『次回に利用する肉体の用意を各自始めるように』
『了承した』
『了承した』
『了承した』
『了承した』

――もういいかも。

もうちょっと面白いかと思っていたのになあ、と想はちょっとだけため息をついた。静かな青い空間に、ふう、と息が漏れる音がする。もちろん、超幸運たちと思われる塊は微動だにしない。

――たとえばここに、契約者が五人集ったりしたことってあったのかな。

そんな暴露なり体験談が、たくさんの願いをかなえて満足した後に契約を解除した人間によって公開されたことはないのだろうか？

今現在「都市伝説になりかけてる」という超幸運との契約の日々。先程の発言が真実だというのなら、世界には一年で五人、超幸運と出会ったラッキーな人間がいる。地球の歴史と共に超幸運が存在し続けているのなら、奇跡の物語として誰かが語っていたりは……。

――信じねえか。そんなの。

途中まで考えて、少年はふっと笑った。誰も信じるわけがない。実話ではなく、ファンタジーとして受け取られるだろう。優秀な人材が隣にいた話にはなるだろうが、それが人知を超えた存在だと誰もが信じるわけがない。実際、目の前に現れたというのに信じられなくて、一年で四人もその幸運を棒に振っているのだから。

――俺ってもしかしてラッキー？

超幸運たちは、自分たちのルールについて確認作業を進めている。契約者が現れた時に、なるべく本契約に進められるような工夫が必要だのなんだの話している。

面白みにかける円陣の様子を、想はじっと見つめた。

――夢だったりしてな。

こんな話をしたって誰も信じるわけがない。両親に話したら、それこそ「可哀想な子」認定がおりて、カウンセリングだのなんだの妙な配慮をされるようになるだろう。もしくは、全面的にスルーされるか。

――夢でもなんでも、こんなトンデモ体験なかなか出来ないよな。

そう思うと急に、貴重な体験をしているような気分になってきて、少年は振り返ると謎の青い空間をあちこち見つめた。真っ青がひたすら続いていて、目印になっていた超幸運たちがいなくなったそこは、一気に想のバランス感覚を崩してくる。

――あぶねえ。

再びクルリと振り返ると、黒の超幸運の前に、金色の塊が来ていた。

『黒の超幸運との契約者』

その声は、誰のものなのだろうか。距離に関わらずみな同じように響く声。いや、思考と言うべきか。少年の頭に響くそれは、普通に考えれば目の前にいる「金の超幸運」のものなのだろう。

『諫山　想、答える必要はない』

『えー！　なんでなんでいーじゃんいーじゃん！　久しぶりだよねここに人間がくるのはさ！　何年ぶり？　黒も嬉しいくせに澄ましてないで一緒に喜ぼうよ！　いいねーいいねー私とも契約してよ。人類初のダブル契約といこうじゃないか。私なら何でも願いかなえるよ？　一緒に人生エンジョイしようよ！』

――なにこれ。

今まで「了承した」とかばっかりだったのに？　と驚く想と金の間に、黒い塊がズイっと入ってくる。

『金の超幸運、そのような行為はゆるされていない』

『いいじゃんいいじゃん、黒とか緑ばっかり本契約してズルいよ。私だって人間の願いを叶えたい！　イサヤマ　ソウ？　日本にいるんだよね。じゃあ次の合言葉教えるから毎日一回呟いて！』

エキサイトする金の超幸運らしき塊に、他の色たちも寄ってきて揉め始める。

『金、いい加減にしろ！』

『白だけに！？』

『お前はまた同じあやまちを繰り返すのか？』

『人間はお前のおもちゃではないんだぞ』

相変わらず誰がどの発言をしているのかわからないが、とりあえず金の超幸運だけやたらとテンションが高いらしいことはわかった。最初のうちはちゃんとお澄ましして参加しないといけない決まりがあったのかもしれない。

白・赤・緑・金が集って揉め、少し離れたところで黒が少年に寄り沿って隣に立つ。立つというか、浮いているような感覚なわけだが。

『諌山　想、すまなかった。金は少し、我々の中では特殊だ』

「別にいいけど。ちょっと面白いし」

そういえば、個性がつけられているとかなんとか、以前に四谷が言っていたなということを思い出す。

「ダブル契約ってありなの？」

『ありだよー！　ありあり！　あのねー合言葉はねー！』

『やめろ！』

『いい加減にしないか！』

自分の中に大量の声が入ってきて、少年は顔をしかめた。訳がわからない初めてのゴチャゴチャ感に、思わず頭を抱える。

『ダメ、という決まりはない』

すっと、涼しげな声が響いた。それはおそらく、黒の超幸運のものなのだろう。わあわあと響くほかの声と違って、どこか親しみを感じる、際立ったそれに顔をあげる。

「でもいらねえわ」

『諌山　想ならそう答えると思っていた』

ただの黒い塊なのに、なぜか喜びが浮きだしているように、感じた。

――信頼の効果ってやつか？

黒い塊の表面が、さわさわっと揺れる。いや、揺れていない。揺れているように見えた。のだろうと、思う。

――もういいぜ。

ちょっと笑いながら、このくだらない会議からの離脱の希望を絶賛本契約中の黒の超幸運に告げる。それと同時に、ひとつだけ特別な響きの声が、こう話しているのが少しだけ少年に聞こえた。

『わたし、黒の超幸運は本契約中である人間、諫山　想に関して、次の段階へ進むことを希望……』

「次の段階」とは何か、そう質問をする前に目の前が少しずつ暗くなり、青が遠のいていく。

そして気がついた時には、もう朝だった。

二月十七日、超幸運のいない、特別な一日。

――聞きそびれた。

少年にしては珍しく、後悔の気分で額をポリポリと掻く。

――答えは明日か。

三分後に、まあいいかと諦めをつけると、想はベッドから起き上がって朝の準備をするために部屋を出た。

０３２　・　高校生の極めてノーマルな日常　３

支度を済ませ、マンションのエントランス前にしばらく立つ。
いつもと違って、向かいのアパートから出てくる人影はない。わかっていたものの、なんとなく足を止めて、無表情なクラスメイトが出てくるのを待ってしまった。

――もう四谷はいないってことだよな。

そう考えて、足を踏み出す。隣の住人が出て行った気配がないからか、果林が出てくることもなかった。

久しぶりに一人で歩き、学校へ向かう。黙ったまま教室に入り自分の席に座る。仲島がやってきて朝の挨拶をしてきたので答え、無言でじっと見つめてくる柿本　史絵の視線は無視。
チャイムがなり、朝のホームルームが始まる。担任の教師が入ってくると、まずこんなことを言い出した。
「あー、今日はひとつお知らせがある。四谷が、両親の都合で引っ越した。もう転校していて、来ることは出来ないそうだ」
大事な仲間が一人黙って消えたというのに、クラスメイトの反応は二人をのぞいて薄い。
反応している珍しい二人はもちろん、仲島と柿本だ。この二人はどうやら「お笑い好き」という絆で結ばれた仲間らしい。ランチライムにちらほらと、おぼっちゃまは貴重な同志について想に語ってくることがあった。もちろん、少年はそんなことに興味はないし聞きたくなどないのだが。

「あの、諫山君」
案の定、昼休みになると、豪華なランチを楽しんでいる二人の下

に柿本　史絵がやってきた。
「柿本さん！　よかったら、一緒にどうかな。僕のお弁当はいつも少し大きいんだ」
「結構です」
無情なお断りの言葉を吐いて、眼鏡女子がずいっと、想の顔をのぞきこんできた。
「四谷君、転校しちゃったって本当？」
「……本当なんじゃねーの？　朝担任の話したとおりだろ」
「諫山君、あんなに仲が良かったのに。知ってたの？　それとも、知らなかったの？」

――なんて答えようかな。

「面倒くさい」の塊になった少年は、仲島家謹製ランチに手を伸ばしながら、しぶしぶ口を開いた。
「知ってたぜ」
「……んで……った……」
唸るような声が漏れて聞こえてきたが、なんと言ったのかは聞き取れない。
「あの、じゃあ、どこに行ったのかは？　知ってる？」
「うーん」

知らない、と答えるとリアリティがないだろうか。頭の中でどう答えようか悩む。ついでに黒の超幸運にそっと呼びかけてみたが、定休日だからか返事はない。定休日以外にあった覚えもあまりないのだが。
しかしとにかく、「四谷　司」に会うことはもうできない。できるとしたら遺体の安置所だ。希望を感じられない答えを示さなければいけないだろう。

「……アフリカのどこかとか言ってたよ。両親の都合で、とかなんとか」
「アフリカって！　いやいや、そこは国の名前で答えるべきでしょっ？　曖昧すぎるよ！」
おおげさにのけぞる史絵の姿に、一瞬で引く。ただ、やっぱりお胸が大きいのはわかった。
「諫山君、四谷君はどこに行くって言ってたの？」
「知らねえよ」
「知らないんかいっ！！」
驚いたことに、少年に思いっきり突込みが入った。胸のあたりにチョップが入る形で。

――何なのコイツは。

「痛いんだけど」
冷たい目で思いっきり下の方から睨むと、ようやく我に返ったのか、史絵は顔を真っ赤にして小声で「ごめんなさい」と呟いた。ついでに目の前に座っている仲島はおそろしく変な表情を浮かべている。苦虫を噛み潰したような赤い顔。それが何を意味しているのかはちょっと判別がつかない。
「あいつがハッキリ言わなかったんだからしょうがねーだろ？」
「あの、住所とかメールとかは？　知らないの？」

――メールはあるけど、俺以外からは受け付けないんだぜ。

とは勿論、言えない。かわりにちょっと、意地悪な返事をかえす。
「知らねえって。そんなに好きだったんなら、もっと早く言えばよかったのにな」
「はぅあっ！！」
また大きくのけぞる史絵の姿に、少年は鳥肌を立てた。なにこの

おんなきもちわるい。そんな気分で頭がいっぱいになり、趣味の悪いボンボンにちょっと冷たい視線を送る。

お坊ちゃまの方は片思いの相手の片思いにショックを受けたのか、顔を青くして涙を浮かべていた。悲惨なランチタイムは静かに終了し、午後の授業のためにそれぞれ自分の席へと戻る。

やあ諫山君今日も家へ遊びに来ないかい？　という元気が本日はないらしく、仲島はとぼとぼと教室を歩いて出て行ってしまった。

いとしい彼の姿を見失った乙女は、自分の席で突っ伏したまま動かない。

そんな悲しげなクラスメイトをよそに、少年はいつも通りの無表情で人気のなくなった教室を出た。

「あっ！　来たー！　そーちゃーん！！」

――げっ。

校門で待ち受けていたピンクの大声に、周囲の生徒が振り返る。キラキラピンクのシュシュをキラめかせた果林が駆けて来て、想の腕にいつも通り、ぎゅうっと抱きついてきた。

「やめろ、何すんだよっ」

それをすぐに引き剥がし、怒りを表現してみる。さほど効果はないらしく、果林は笑顔のままだ。

「あのねー、お迎えに来たんだよ！　最近そーちゃんが会ってくれないから」

「いらねえよ」

とはいえ、まっすぐ帰宅するのなら果林はどこまでもついてくるだろう。家はお向かいのご近所さんだし、何より自分は彼女の「愛しの王子様」だ。

寄り道をするにも、どこかの店に寄るなどではやはりついてくるだろうし、気軽にお邪魔できるお友達の家もない。一軒だけあるが、お坊ちゃまはハートブレイク中だし、大体、既にもう帰宅している。

「一緒にかーえろ。四谷君は？　今日は一緒じゃないのー？」

にこにこと、がんばって褒めるとしたら「無邪気」な笑顔を浮かべる果林に、想はため息をついた。

「わかったよ」

結局どこまでもついてこられるだろうという予測をし、潔く諦める。

「そのかわり、腕組んだりとかは、なしで」

「えーっ、ダメなの？」

「ダメ」

ダメといわれているのにヘラヘラと笑う果林と、仕方なく並んで歩く。周囲の視線が痛い。皆、珍獣を見るかのような瞳だ。

「そーちゃん、四谷君は風邪でもひいたの？」

「あいつは……」

「諫山君、この人誰なの？」

家へ繋がる道へズイっと、柿本　史絵が立ちはだかった。しょんぼり机に伏せていたはずなのに、いつの間に現れたのか。限りなく面倒臭そうな予感で、少年の体中に悪寒が走る。

「なにこの人。そーちゃん、誰？」

「別に。クラスが同じだけのヤツだけど」

「柿本　史絵です。あなたは？　四谷君とはどういう関係なのかしら」

ズイズイっと、史絵が前に出て果林のすぐ目の前まで来る。ピンクは何を感じたのか、珍しくムスっとした顔でそれを迎え撃った。

「四谷君はアパートがお隣なんだよ。そーちゃんがよく遊びに来るから、かりんも一緒にご飯食べるの」

「……」

鼻に力が入ったせいで、史絵の赤い眼鏡がちょっと上にあがる。

――一回だけだろーが。

「お隣の住人なんだ。高校生じゃないんですよね。なんでここにいるんですか？　生徒以外の人間は入れませんけど」

「そーちゃんのお迎えだもん。そーちゃんと四谷君と三人で帰ろうって思っただけだもん」

電波系メタルピンクＶＳお笑いオタクのレッド眼鏡。

多分戦いは本筋からすぐに脱線して、恐ろしくめんどくさい方向に進むだろう――というおぞましい想像に、少年もさすがに焦る。

「やめろよ、もう帰るから。柿本、こいつは四谷の隣に住んでるだけ。……えーと」

心に起きた葛藤と戦う。しかしこの場合、止むを得ない。色々とひっかかるものはあったが、諦めてその名を口にする。

「……果林、こいつは四谷が好きだったんだけど、あいつはもう引っ越していないんだ。だから今日は苛立ってる。相手にすんな」

「なっ、ちょっと、いー、いさやま君は、なーにを言ってるのかなー？　なーにをー？」

気持ちの悪い口調にめちゃめちゃに顔をしかめて、少年はピンクの手を引いて史絵の横を通り過ぎた。

二人の女子の間に板ばさみ、と言えば聞こえはいいが、どっちもなんだかもう、他人には威張れない類の異性だ。そんな二人のうちどちらがマシかと言うと、今のところは近所のピンクの方が勝利して、想は小走りで果林と一緒に家路を急いでいる。

「そーちゃんと手、つないでるー！」

嬉々とした声に苛立ち、思いっきり手を払う。

「あふん」

――あふん、じゃねーよ！

手を払われても笑顔のまま、果林はぴょこぴょこと少年の周りをまわるようにして歩いてついてきた。

「ねえねえ、そーちゃん、四谷君引っ越しちゃったの？」

「ああ」

「寂しいね、そーちゃん。でも、かりんはずっといるから、大丈夫だよ」

――そうらしいね。

なにせ、「親愛」を育む間柄だ。一体どんな運命が待っているのかは知らないが、自分とはまるで違うタイプの人類である目の前のミラクル二十歳は、将来に何らかの良い影響を及ぼすらしい。

「お前、友達とかいんの？」

「うん、いるよ。サッチでしょ、みっちーでしょ、あと、ツネ君と、ゼンさんとー」

指を折りながら数える姿は正直、アホっぽい。

「でもねえ、前に住んでたところにいるから、ちょっと遠いんだ。だからね、そーちゃんと会えないと寂しいの。最近お店にも来ないし、四谷君も全然会わないし」

今度はぷうっと頬を膨らませている。少年はそれを見て、思った通りの感想を口走ってしまった。

「お前の化粧濃いよな」

「えーっ？　かりんの一番可愛いお顔だよ？」

「そうか？　もうちょい抑えた方が良くねえ？　気持ち悪いぜ、目の辺りとか」

「……」

驚いたのか、果林の目がクワッと見開き、口があんぐりと開く。

――しまった。言い過ぎたか。

「気持ち悪いかなあ」

「いや、なんつーの？　なんか黒すぎてちょっと、邪悪な感じがする、かなあ」

「ジャーク……」

果林の脳の中に、一体どんなモンスターの映像が浮かんでいるのだろうか。初めて見るこの残念な二十歳の真剣な顔に、想の体も少しだけ、力がはいる。

結局そのまま家に着くまで、果林がしゃべることはなかった。ひたすら拳に力をこめたまま、マジな顔のまま歩いて、うつろな「バイバイ」を口走ると、ピンクの頭はおとなしく一〇五号室に吸い込まれていった。

０３３　・　超幸運との四ヶ月について、少年の総括

少年の最近の放課後の日課は、まずは家事をこなすことだ。
その日の夕食のメニューを決めて、足りないものは買出しに行く。洗濯物を取り込んだり、使用済みの食器があれば洗う。母の具合が悪くなければそれらの仕事はないが、今日はどうやらイマイチだったらしい。

――めんどくせえよなあ。

毎日の献立を考えるのは大変だ。レパートリーの少ない高校一年生の手料理は、あっという間に一定の周期で同じものの繰り返しになってしまう。あまりコッテリしたものには母が手をつけない。父は喜ぶが、わざわざ台所に立っている理由はゲッソリ妊婦に栄養を取らせるためで、男の好みのままに作るわけにもいかなかった。

――大変ですね、奥さんたちは。

本屋の店先で見た、主婦向けの雑誌の表紙に踊る文字たち。レパートリーを広げるためのアイディアだの、簡単アレンジだの、ラクしてバリエーションを増やすテクニックがこれで覚えられますよ！と客にアピールしまくっていた。
散々悩んだ挙句適当に野菜の煮物を作ることに決めて、両親の寝室をのぞく。ぐたっと横になっている後ろ姿に一声かけて、近所のスーパーへ出かけ、ついでに日用品も買って大荷物で家へと戻る。

「そーちゃん！」
エントランスの自動ドアが開いたところで、背後から声がかかった。この呼び方をしてくる人材は当然一人しかいない。無視して家

に戻ってしまおうか、それとも振り返るべきか。
「お買い物してきたの？　ねー、そーちゃん！」
声はもう既に近くに来ている。逃げ切れそうにない。仕方なく振り返り、少年は軽く固まった。
「お荷物いっぱい。持ってあげる！」
「……いや、いいよ」
トイレットペーパーを強引に奪い取られながら、なんと言うべきか想は考えた。

果林に現れた変化は、どう考えても学校からの帰り道に自分がした発言のせいなのだろう。ゴテゴテのアイメイクはどこかに消え去って、ラメの輝くアイシャドウはまぶたにのせられているものの、先程に比べたらおそらく、五〇パーセントはオフになっているはずだ。
「だいぶ良くなったんじゃねーの？」
触ったら多分指が黒くなるだろうなという印象だったマスカラに至っては、七〇パーセントは減っているだろう。おかげでだいぶ清潔感が取り戻され、先日うっかり披露された素朴な素顔が前面に出てきている。
「なにが？」
「顔が」
もしかしたら、ほめてもらいにきたのかもしれない。果林は顔をだらしなく緩めてエヘエヘと笑い出し、嬉しそうに空いている方の腕を少年の左腕に絡ませてきた。
「あのね、セイソウ系のお顔にするメイクにしたんだよ。そーちゃんが帰った後、雑誌買ってきて、それで急いでやりなおしたんだあ」
――まあ、確かに清掃でも間違いではないか。
「そーちゃんはこういう顔がいいんだ。えへ。えへへ。かりんこれ

から、こっちの顔にするね」
「一番可愛い顔はいいのかよ」
「可愛いより、そーちゃんがいいって言ってくれる顔の方がいいよお」
へらへらもじもじした二十歳のピンクは、何を思ったのか目を閉じ、少年に向かって唇を突き出してきた。
そこに王子様からの優しいご褒美、なんてものがあるわけがなく、想はトイレットペーパーを奪うとマンションの中へと走った。
「あっ、そーちゃん！」
「お前、その顔だと髪の色があわねえぞ！」
悲しげな顔をした果林の目がクワッと開き、両手で頭を抑えているのが見える。それにケケッと笑って、少年はエレベーターに乗り込んだ。

――次に会うときには、ストレートの黒髪だったりしてな。

それなら、高校の前で待ち伏せされていても少しは許せるかもしれない。
などと考えている自分に、次の瞬間恐ろしく立腹して少年は思わず、エレベーターを降りてすぐに目に入った消火器を蹴り飛ばした。

――何、あいつのペースにまんまとハマってんだよ！

いくら超幸運に「親愛」が生まれる仲だと言われたからって、いきなりアイツとゆるゆるの間柄になるなんて自分を殴りたいです！
とかそんな気分でイライラと歩き、家へと戻る。
「おかえり」
「……ただいま」
リビングでお茶を飲んでいた母が驚いた顔をしている。
「どうしたの？」

「なんでもねえよ」
「想、たまには出かけてきてもいいのよ。前はよく、お友達のところに行ってたんでしょ？　ごめんね、最近ずっと家にこもりっぱなしだもんね。いってらっしゃい」
「いいよ」
今出たら、果林につかまりそうな予感がする。そしてなんだかんだと、年頃の女性の部屋に入った初めての経験をしてしまいそうだ。
――イヤすぎる。
ますます表情を苦くする息子に、母が焦る。
「大丈夫？」
「なんでもない。ちょっと、思ってもみなかったことがあっただけ……」
息子の発言に、なんだそれは、と母も妙にマジな表情を浮かべた。少年はそれにますます、しまった、という気分になっていく。
「本当に、たまにはいいのよ。今は気分もいいし、ご飯だってその辺で適当に買ってくればいいし」
「いいんだって。今、外には出たくないんだよ」
まだ何か言いたげな母を置いて、想はとりあえず自室へと戻った。
二月十七日、十六時過ぎ。
超幸運のいない、冬の一日。部屋の空気は冷たい。吐き出したため息が、暖かく想の両頬を包んですぐに消える。
――あいつ、どんな姿で戻ってくるんだろう。
あの秘密基地が失われたことが、やはりどうにも惜しまれた。ずっと四谷の姿のままでいてくれという願いはかなえてもらえないのだろうか？　肉体を生きているように見せかけるくらい、彼らには簡単そうなものなのに。

ベッドに腰掛けて顔を両手で包んで、十六歳の男子高校生は再びため息をついた。

――幸せが逃げていくんだっけ？

そして自分のつまらない考えに、またため息。しょうもないループに呆れて、またため息。

――まあいい。やることやって寝れば、明日にはまた現れるんだから。

なんとか気を取り直して立ち上がり、想は台所へ向かった。母の心配そうな視線を軽く手で払い、買ってきたジャガイモの皮を剥いていく。

「なんだか随分、慣れた感じになってきたね」

「……まあね」

母の不器用さが遺伝しなかったことに感謝しながら、野菜の用意をしていく。鍋に水と出汁用の昆布を放り入れ、次の準備に取り掛かる。

――あいつ、気持ち悪かったなー、柿本のやつ。

あの女のどこがいいんだか、と頭に浮かんできた仲島の顔にデコピンを食らわせる。わあ、何をするんだ諫山君！　と叫ぶボンボンに、趣味が悪いぜと罵りの言葉をかけて、鬱憤を晴らしていく。

横に置かれたレシピにちらりと目をやり、手順を確認して、野菜を放り込む。

――仲島家のシェフに弟子入りしたら、旨いもの作れるかな。

自分の中に浮かんできたこの発想に、何考えてんだと首を振る。プロになるつもりなんかない。大体、シェフは一日中仕事でお料理をしているからあんなに美味しいものを作れるわけで。

「想、何かあったの？」

「あん？」

「なんだか、表情がくるくる変わってて……」

見てたのかよ、と顔をしかめて、その続きを聞く。

「可愛いなって」

――うるせーよ。

息子のうんざりした表情に気がついて、母はそっと退散していく。

――急に母性全開にしてんじゃねえっつーの。

シンクに手をつき、ふうと息を吐く。

――そういうのは新しい家族向けだけにしてくれよ。

鍋にふたを乗せると、想はやれやれ気分でベランダへ向かった。洗濯物は冷たい。が、よく晴れていたからか乾いているようだ。

家族全員分の洗濯物を取り込む。これが、結構きつい。父と自分のはいいが、母のものは困る。いやま、ただの下着だし、と心に言い聞かせながら取り込んで、あとは自分でやってと父のものと一緒にまとめておく。

――専業主夫にはなりたくねえなあ。

自らの将来の選択肢を一つ減らしながら、眼下に広がる景色を見つめた。住宅街に建つマンションの六階からの景色にあるものは家

ばかりだ。
どの家にも幸せな家族が住んでいるのだろうか？
――そうでもねえか。
一人ぼっちで暮らす者も大勢いるだろう。ここからは見えないオンボロアパート。一〇五号室には、頭の悪い能天気なピンクが住んでいる。
――家族といれば、イコール幸せってわけでもない。
じゃあ自分が今、どうだろうというところに考えが至って、少年は静かに目を伏せた。
からっぽの自分、何もかもが億劫で、やる気のない空虚な日々。
静かに死んでいく自分の魂。
その底で燻っていた、いいようのない感情。
――前とは結構、違うか。
黒の超幸運と出会ったあの日から、少しずつ変化をしてきた自分の日常にふっと、笑う。
――まあ、いいんじゃないの？
家族でたいした会話もしないまま夕食をとって、眠れば明日はお楽しみだ。
両親に「おやすみ」と挨拶をして、あくる日に黒の超幸運がおか

しな姿で現れないことを願いながら、少年は特別な一日を終えた。

０３４　・　黒の超幸運が選んだ、新しい姿について

部屋の中は暗い。
ベッドから手を伸ばして時計を引き寄せ、覗き込む。時刻は目覚ましがなる三分前。少年はやれやれ、と体を起こした。暖かい布団からはりきって出る自分にちょっとだけ、笑う。

――楽しみにしすぎじゃねえの、俺。

普段ならもうちょっとだらだらしていたいと思うところなのに、もう立ち上がっている。
カーテンを開けると外は雨だった。冷えるわけだ。

――そういえば、いつどのタイミングでくるんだろ、あいつ。

その辺りの事情や打ち合わせは一つもない。
家を出ればそこに立っているだろうか。それとも、また同じ高校の生徒として潜り込んできて、転校生ですなんて澄ました顔で現れるのだろうか。

鳴り出した目覚ましを叩いて止める。
リビングに移動して朝食の準備をし、起きてきた父と母に声をかけて登校の支度を済ませる。
「いってらっしゃい」
かかった声に右手だけ挙げて応えると、想は家を出た。

エスポワール東録戸から出てくる人影はない。生まれ変わった清掃系ピンクは今日はまだ寝ているのか、それともまだ王子様に見せられる髪型が完成していないのか。

傘を大粒の雨が叩く。冷たい空気にブルっと震え、学校へと急ぐ。

「諫山君、おはよう！」

「よお」

親友と挨拶を交わし、お笑いオタクがじっと見つめてくるのは、無視する。

「諫山君、また試験勉強を一緒にやらないかい？」

「いいね」

そこでふと、母の顔が思い浮かんだ。家事と快適な試験勉強ライフの両立はどうやればこなすことができるだろう。

――どーしたもんかね？

友達の家でお勉強するんで、と言えば喜んで送り出してくれるだろう。有事の際には携帯電話で呼び出してもらえば問題ないだろうか？　外に舞い始めた氷の塊を見ながら少年は考える。

「諫山君は最近、忙しいのかい？」

「まあね」

お坊ちゃまはその理由を聞きたそうに親友の様子を窺っている。残念ながら、返事はない。

「寒いな」

始業のチャイムが鳴る。生徒達は自分の席につき、扉が開いて担任の教師が登場したが、転校生の姿はなかった。

昼休み、仲島家謹製リッチ弁当をつまみながら想は携帯電話を取り出した。どこで落ち合うか、メールで指定すればいい。どこがいいだろうかと考えを巡らせていく。

――ああ、でも、どんな姿でくるかわかんねえからな。

醜い老婆の姿で現れる可能性もある。とんでもない美少女の姿の可能性もある。何故一介の男子高校生がそんな人物とともにいるんだ、という疑問を持たれる姿で現れたら？

わからない以上、目立つ場所で会うのは控えたい。事前にメールでどんな姿か写真つきで返信してくれれば助かるのだが、おそらくそういうことを超幸運はしないだろう。

「諫山君、今日はなんだか上の空だね」

「……なんか悪い？」

「柿本さんが君には、そのー、ピンク色の彼女がいるって言っていたから」

――あのクソ女。

チッと舌打ちをする親友に、仲島が焦る。

「彼女じゃねーよ」

「ああ、そうなんだ。はあ」

ほっとしたような、困ったような顔でボンボンがお茶を注ぐ。ついでに、想にも一杯すすめてきた。

「凍頂烏龍茶だよ」

「サンキュー」

暖かく爽やかな香りのお茶の力で、少年の眉間に入った力が緩んでいく。

「で、そのピンクさんとはどういう関係なんだい？」

どうやらこのお坊ちゃまは恋の話が好きらしい。少年とはあらゆる好みが正反対のようだ。

黙ったままじろりと睨まれ、仲島の顔が凍る。二人の男子高校生の間に漂う空気は、現在雪が降っている外とほぼ同じ温度まで急降下してしまった。

「ごめんなさい」

「おう」
素直に謝る親友に、チラリと視線をやる。体を小さくして食後のお茶を飲む姿は少しだけおかしくて、想はふっと笑うと豪華な重箱の後片付けを手伝った。

――で、どうしようかな。

午後の授業ははっきりいって、眠い。面白いとかつまらない以前の問題だ。美味しいご飯の後の至福のまどろみタイムの中で少年は考える。マンションの屋上なら誰も来ないだろうが、今日はあいにくの天候で外で会うのは気が進まない。家にはずっと母がいる。あの秘密基地さえ存続していれば問題ないのに。数学の教師が黒板にチョークを打ちつける音をぼんやり聞きながら、ボロアパートの木製の扉を思い出す。

『……』

声がした。

だらっと机に預けていた体を起こして、背筋を伸ばす。

「ここ、試験に出るからな！」

教室に響いているのは教師の声だけだ。では、先程のものは？

――あいつかな。

そわそわしながら、長い長い数学の時間を過ごす。シャープペンシルを持った手はちっとも動かない。足だけが落ち着かない様子でプラプラと動いて、床を撫でていく。

ようやく授業が終わり、想は携帯電話を取り出した。小さな画面の中に夢中で文字を打っていく。

アドレス帳に登録されたメールアドレスはまだひとつ。得体のしれない文字列で構成されたそれの行き先は「黒の超幸運」だ。

――エスポワール東録戸　一〇三号室　放課後すぐに行く

簡潔な文章を打ち込んで、すぐさま送信した。ダメなんて言わせない。本契約までした、選ばれし者の要請なんだから。相手はすべての願いを叶える存在の「超幸運」だ。それに、先程聞こえた声。

『待っている』

そう言っていた。心に届いた、親しみを感じる不思議な「声」が。

「諫山君、今日はうちに遊びに」

「パス」

お誘いを簡潔な言葉で断り、玄関へと急ぐ。外はまだ雪が降っていて、地面は薄い白で覆われていた。そこに足跡をつけながら、校門へと走る。

息を切らしながらボロアパートの前に立った。ひどく久しぶりに感じる、よく知ったレトロな扉。

雪にまみれたスニーカーのまま進んで、想はドアノブに手をかけた。

「そーちゃん！」

――げっ

「かりんのおうちはこっちだよ！　寒いから、早く中に入って～」
隣のドアを少しだけ開けて、果林がちらりと顔を出して手招きをしている。もちろん、少年に入るつもりはない。
「いかねえよ」
「えー、なんでなんで？　四谷君もういないんでしょ？」
それは、一〇五号室に招かれる理由にならない。
「悪いけどまた今度な」
「今度っていつ？　そーちゃん、風邪ひいちゃうよ。あったまっていきなよ。かりんがポカポカにしてあげる！」
「いらねえ」
「あのね、髪の色も変えたの。そーちゃんの好みになったか、確認してっ！」
その言葉につい視線を向けると、果林は扉を開けて笑顔でぴょこんと外へ出てきた。
慌てて視線をそらす。
――なに注目してんだよっ、俺は！
そらした想の顔を下から果林がのぞきこんできて微笑む。メイクは清掃系で落ち着いており、地味だし素朴だ。以前の邪悪なメイクをしていた時よりも少し幼い印象になっている。
「そーちゃんがピンクじゃ変だって言うから、茶色にしたんだよお」
ふわふわっと軽く広がっていたピンクの髪が、落ち着いたこげ茶色、しかもストレートヘアになっていた。少年が昨日ちょっとだけ考えたイメージに近くなっているが、ファッションは変わっていない。甘いベビーピンクのゆるゆるのスウェットの上下で、こちらは想の好みからはだいぶ外れている。
「はやくおいでよー」
ピンク色の腕が絡みつき、ストレートになった髪がふわりと少年

の頬に当たる。
「いかねえっつってんだろ」
いつものように腕を払うと、想は鼻にぎゅっと皺を寄せた。
――超幸運、いないのかよ?
そう考えた瞬間、一〇三号室の扉が開いた。
「あれえ?」
果林の間延びした声が響く。ドアの中から出てきた長い腕が少年のコートの襟を掴み、部屋の中へと引きずりこんだ。
「そーちゃん!」
手早く、ドアにカギがかけられる。果林は何度も扉を叩いていたが、寒かったのか諦めて去って行った。
「諫山　想、何か願いか質問が出来たのだろうか」
「お前……なんだその姿は」
かけられたいつも通りのセリフに振りかえり、新しい黒の超幸運の姿を確認すると想はニヤリと笑った。
色白の肌、すらりと細いスタイル。胡桃色の柔らかそうな、背中までの長髪。髪とお揃いの色の瞳には長い長い睫毛がかかってアンニュイな雰囲気をかもし出しており、高い通った鼻筋、表情なく結ばれた唇も形が良い。
「どこの王子様がその辺でのたれ死んでたんだよ?」
「この肉体はどこの国の王族のものでもない」
少年はニヤニヤと笑いながら、目の前の超幸運に心底呆れた。
「お前、目立たないようにとか言ってなかった?　すっげえ美形の外国人がこの辺に住んでるって、おばちゃんたちが騒ぐぞ、どう考えても」

無表情で立つ長身の青年は、雑誌に掲載されていてもおかしくないレベルの完成された美しさだ。着ている物は少々、安っぽかったが。

「諫山　想が女性の体は選ばないように命じてきたので、やむを得ずこの肉体を選択することになった」

「……」

――約束、守ったからなのか。

「また、諫山　想はこの部屋を気に入っていたので、この肉体は四谷　司の兄という設定にしてある。この肉体の仮の名は『四谷　圭』。『土』という漢字を上下に二つ並べたものだ。よろしく頼む」

「ははははは！」

しれっと述べる新しい四谷に、少年は大きく笑った。

「お前、兄とか無理があるだろ！　人種が違うじゃねえか！」

「四谷家には複雑な事情がある。人はそれを察して気を遣い、深く踏み込んで来ることはない」

この発言にもゲラゲラと笑う。

想は秘密基地の存続と超幸運の新しい姿が男性だったことに安心して、置きっぱなしだったコタツのスイッチを入れると、暖かい飲み物を買いにコンビニまで走った。

０３５　・　契約がグレードアップされる条件について

雪の日のボロアパートはさすがに冷える。コタツはようやく暖まってきたものの、上半身はひたすら寒い。
「そこのヒーター動かしてくれ」
「了承した」
新しい四谷は容姿こそ違うが、一昨日までと同じ無表情で動いて暖房器具のスイッチを入れた。
「家計はもういいの？」
「問題ない」

じっと、新しい超幸運の姿を見つめる。

顔の造形はまったく違う。物憂げな瞳とか、明るい色の細い髪とか、そういう部分の差をあげる以前に何せ人種が違う。アジアからヨーロッパへ飛んでしまった。
しかしそこにいるのは間違いなく、四谷だった。
「不思議だな」
少年が呟くと、超幸運はほんの少しだけ笑った。
「嬉しいぞ諫山　想。われわれの契約は本物だった。第二段階に進んだ甲斐があるというものだ」
「……はあ？」
第二段階、という単語に記憶が呼び起こされる。

『黒の超幸運は本契約中である人間、諫山　想に関して、次の段階へ進むことを希望……』

大会議から抜け出るタイミングで聞いた、あのセリフ。
「そういえば言ってたな。次の段階って。何なのか説明してくれ」

本日の少年の飲み物は、新発売の紅茶飲料だ。飲み口から湯気をあげているホットのそれを買いに行った時に、コンビニの店長が笑顔で寄ってきた。森永さんを更生させてくれてありがとう、と。

そんな事を考えている場合ではない。想が軽く首を振ると、四谷がいつも通りのしゃっきりとした正座で話し始めた。

「超幸運と契約した者はまず最初に、仮契約の状態となる」

「ああ」

「契約者が超幸運を真実であると認識し、信じた場合、本契約に進むことがある」

「絶対ってわけじゃないんだ」

「そうだ。超幸運とともに人生を歩んでいくと決めていた場合、本契約に進む」

――そんなこと決めたっけか？

少年は思わず顔をしかめたが、当然、超幸運は気にしない。

「で？　何段階目まであるわけ？」

「……本契約になった者の中で、われわれ超幸運の定めた基準を満たした者は、第二段階へと進む」

「おい、スルーすんなよ。いきなりぼかしすぎだろ、お前」

「残念だが本契約以降の基準や仕組みについて詳細を話すわけにはいかない」

「聞きたいなあ。心から聞きたいなあ」

「……」

ぴくり、と四谷が動く。今までに見たことのない反応に、少年は目を大きく開いた。

「何？　教えてくれるの？」

「いや、話すことはできない」

――変な感じだ。

押せば話してくれそうな雰囲気だった。根拠はないがそう思えて、想は超幸運の顔をのぞいた。

顔色が青白いのは相変わらずだ。見れば見るほど美しい顔立ちに、なんだか妙な気分になってくる。

「なんでこんな美形選んでんの？　目立つだろ」

「わたしも不思議に思っているのだが」

胡桃色の瞳が少年をまっすぐに見据える。

「何を？」

「われわれが求める条件を満たす肉体は、一般に美しいとされる容姿の者が多い」

「……へえ」

誰からも探されず、孤独に人生を終える死者。

悲しい訳あり人生を歩んだその理由は何なのだろう？

その後ろにある深い闇の気配に、思わずブルっと震える。

「男性の肉体の方が毎年やや少ないので、余計に選択肢が少なかった。これから一年、この体で過ごすのでよろしく頼む」

「ああ」

四谷の穏やかな声で落ち着きを取り戻し、想は軽く頷いた。

「で？　第二段階って具体的にはどう変わるわけ？」

「本契約になった時と同じで、諫山　想が体感する変化はない。条件も願いの叶え方も今までと同じだ」

「じゃあお前に何か変化があるんだな？　どういう変化？」

「契約者はそれを知る必要はない」

「なんだよ。またそれかよ？　それでへえ、うん、わかった！　とか言うと思ってんのか？　教えろ」

これまでならば。
これまでなら、黙ったきり、いつもの澄ましたお顔で四谷はこの要望を無視していただろう。
ところが本日からは違うらしい。またピクリと動くと、ゆっくりとその形の良い唇を開いて、少しだけ小さな声でこう話した。
「第二段階になる条件は一つ。われわれが契約者と過ごしている時間の中で、契約者の願いをより多く叶え、その人生を豊かなものにしたいと願うこと。更にはそれを他の超幸運に認めてもらって許可が下りた場合、第二段階へと契約は進む」
「はい？」

――なんだそれは？

「お前、俺のこともっと幸せにしてあげたい！　とか思ってんの？」
「その通りだ」
冷静な肯定に、想は思わず噴出した。噴出した挙句、激しくむせた。
咳がようやく収まって、ちょっとだけ出てきた涙を拭きながら想は顔をあげ、大真面目な表情の黒の超幸運を見つめる。
「……」
色々と聞きたいことはあったが、あまりにも意外な話に妙に照れくさくなって、言葉が出てこない。更に意外なことに、四谷の口からこんな言葉が飛び出してきた。
「諫山　想は無欲だ。かつて超幸運と契約した者のうちでは五本の指に入るだろう」
そんなの知らねえよ、と想は顔をしかめる。
「ただし、無欲なだけでは第二段階へ進むことはできない。われわれは願いを叶える。人々により多くの幸福を運ぶためだ。それがわれわれ超幸運の存在意義であり、希望であり、仕事だ。ただしその成果は契約者の質に大きく左右される。この契約者であればと思う

ところがある場合にのみ、第二段階へのグレードアップがなされる」
「何が言いたいんだかわかんねえんだけど」
「わたしは諫山　想が大変善良な人間であり、その人間性の質を将来の長きにわたって変える事のない希少な人物であると判断した」
「ばっ……」
――馬鹿言ってんじゃねーよ！
顔がカアッと熱くなるのを感じ、心のうちから恥ずかしさがものすごい勢いで湧き上がってくる感覚に耐えられなくて想はこう叫んだ。心の中で。そんな自分がまた妙に恥ずかしくて、両手で顔を覆う。
――なんだよ俺、照れてどうするんだよ！
ここは笑い飛ばすところだろうが、と思ったものの、体の反応は違っていた。大真面目に善良だとか、悶える以外のアクションが取れない。
「そーちゃーん！！」
そこに、激しく扉を叩く音が響いた。少年を呼ぶ声はもちろん、果林のものだ。
「諫山　想、応対のために出て問題ないだろうか？」
「ちょっと待ってくれ……」
部屋の気温が高いせいか、額から汗が出ていた。おそらく真っ赤に染まっているであろう顔を元・ピンクに見られたくなくて、思わず唸る。
その様子をチラリと見ると立ち上がり、四谷は扉の前に立った。
「少々お待ち下さい」
「だれー？　そーちゃんを返してよーっ！」
扉はまたガンガンと叩かれている。その勢いはかなりのもので、

オンボロアパートの部屋がなんとなく揺れているような気になるほどだった。
「いいぜ」
ブンブンと横に大きく振って、なんとか顔に力を入れる。想がまだ少し赤いしかめっ面を用意した瞬間、超幸運は外で荒ぶる隣人にこう声をかけた。
「今開けますので」

扉が開くと、冷たい空気と一緒に雪がヒラヒラと中に入りこんできた。四谷の向こうにはやっぱりピンク色のコートを着た果林が立っていて、ドアを開けた超美形の外国人の姿に驚いている。
「あれれ、だれなの？」
「今日からこちらに引っ越してきた、四谷　圭といいます」
「よつや……、そうなんだ。すごい。ここ、前も四谷君が住んでたんだよ？　また四谷さんが住むなんてすごい偶然！」
「私は一昨日までこちらに住んでいた四谷　司の兄です」
「あに？　あにってお兄さんのこと？　そうなんだ。わあ。ビックリしたあ！」
この説明に安心したのか、果林は笑顔を浮かべると何の躊躇もなく中に入ってきて、想のすぐ真横に座ってコタツに入ってきた。
「おい、狭いだろ！」
「そーちゃんの隣がいいの！」
「冷たいんだよ」
早速ピッタリ密着してくる果林の表面はよく冷えていた。コートについた雪の粒がじゅわっと溶けて、少年の服をところどころ濡らしてくる。
「四谷君のお兄さんだったから、そーちゃんもここに来たんだ。すっごい綺麗なお兄さんだね。モデルさんみたい！　でもね、でもでも、そーちゃんの方が好きだよ、かりんは」

――うるせえよって。

腕の辺りを押してもまったく退かずに寄り添ってくる果林に少し、焦る。地味になった化粧のせいか、こげ茶色に染まってまっすぐサラサラストレートになった髪形のせいか、以前よりもだいぶ可愛らしい気が。

一瞬だがそう考えてしまった自分に思いっきり腹を立てて、想は立ち上がった。

「ひゃん」

「帰るわ。四谷、これからもよろしく」

『了承した』

心の中に響いた声に驚いて、少年は振り返った。

超イケメン外国人になった四谷（新）が、満足そうに微笑んでいる。

「……」

「また遊びに来てください。いつでも」

――第二段階の効果なのか？

「そーちゃん、帰っちゃやだー。かりんのお部屋に来て！　一緒にＤＶＤ観ようよ～」

今までとあまりにも違う対応に少し戸惑いながら、果林のうるさい声は無視して、想は雪の降りしきる中、家へと帰った。

036・高校生の極めてノーマルな日常　4

「お帰り、寒かったでしょう？」
頭にちらちらと白い塊を乗せて帰宅した息子に、母が立ち上がる。
「結構降ってるものね」
「うん」
「どうしたの？　顔が赤いけど、風邪でもひいた？」

母の指摘に、少年はまた少し顔をカアッとさせてしまい、慌てて自室へと戻った。
そして思う。

――何なんだよ、善良ってよ。

超幸運の見せた笑顔。あんな顔をしてみせたのは初めてのことだ。もちろん、新しい体に変わったから性格の設定も四谷（弟）とは少し違うとか、果林がいたのであそこは笑って見せたとかそういう理由があるのかもしれないが。

――買いかぶりだ。

大きく息を吐き出して、ついでに顔をしかめる。カッカと熱い自分にイライラしながら、濡れたコートを脱いでハンガーにかけた。

「ねえ、想、もうすぐ試験よね？」
なんとか気を取り直してリビングへ戻ってきた息子に、こんな声がかかった。
「ああ」

「前はお友達のところでお勉強してたんでしょう？　今回も行くの？」
「……」
どうしようか迷っている想に、優しい瞳が向けられる。
「お母さんのことはいいから、いってらっしゃい」
今が一番大事な時なんだから学業を優先させないと、というのが母の意見だった。常識的、かつ良識的な意見はごもっともであり、いや、僕はお母さんの方が大切だから！　なんていう主張のない少年は少し安心して顔に入っていた力を緩める。
いざという時には連絡をしてもらうことにして、次の日、ランチタイムにボンボンへ「もうすぐ試験だな」と言えばそれだけで、三度目の快適な試験対策の日々が始まることになったのだった。
と、思っていたのだが。
「かりんものーせーて！」
お坊ちゃまのお迎えの車は、さすがに校門の前に堂々と停めるわけにはいかないのか、学校の裏手の道路で待っている。そこに何故か、更生した果林がニコニコと笑顔を浮かべて立っていた。
「あなたは？　どなたですか？」
「諌山様の御友人だそうで」
仲島の言葉に、執事の権田が答える。それを聞いて、坊ちゃまは親友を振り返った。
「諌山君はもしかして、僕が思っている以上にプレイボーイということなのかな」
――んなわけねえだろうがよ。

「ちょっと待っててくれ」
彼女ではない近所に住む若い女性が、自分を慕うあまり学校までお迎えに来ている、という説明をしなければならないのだろうか。頭が爆発してしまいそうな事態に悶えながら、果林の手を引いて車から少し離れる。
「そーちゃん、あれ、テムジンだっけ。かりんも乗りたいの！」
「悪いけど遊びに行くわけじゃねえから。勉強すんだよ、もうすぐ試験だし」
「じゃあかりんもお勉強しようかな」

――何のだよ……。

想の眉間に深い深い皺が刻まれる。それを見ても特に何も思うところがないのか、果林は車がながーい！　とはしゃいでいる。
「邪魔だよ。帰れ」
「……そーちゃんひどい！」
今度は、えーんえーんと泣き始めてしまった。

――うぜえ！

「諫山君、どうしたんだい？」
「別に」
「別にということはないんじゃないかい？　レディを泣かせるなんて、紳士のやることではないと思うよ」
坊ちゃまはジェントル魂が許さないのか、明らかに嘘くさい泣き方をしている果林に笑顔を向けて話しかけている。
「あのね、かりんもあのながーい車に乗りたいの。そーちゃんと一緒にお勉強したいの」
「なるほど。あなたはかりんさんと言うんですね。諫山君とはその、

何か特別な関係なのでしょうか」
「そーちゃんはかりんの王子様なんだよ。エントロピーなの。だから、髪型とかメイクもそーちゃんが好きな感じに変えたんだあ」
「エントロピー？」
それが何を意味しているのか、果林の口から出てきたのは二回目だが理解はできない。ただ、その後に続いた「少年好みに変えた」という部分にお坊ちゃまは大きく反応してニヤニヤと笑った。
「行こうぜ仲島、そいつのことはいいから。おい、今日はバイトはないのかよ？」
「今日は夕方からなんだあ。そーちゃんと一緒にお散歩したかったから来たんだよ」
「残念だったな。俺は夜まで帰らないからお前はさっさと帰れ」
容赦のない想の言葉に、果林はしゅんとうつむいて、両手の人差し指をツンツンさせて不満をアピールしている。
「じゃあ、かりんさん、お家まで送りましょう。それなら少しは諫山君といられるし、この車に乗ってみたいんでしょう？　短い時間ですけどそれでよかったらどうぞ」
「えーっ！　ホントにいいの！　嬉しいっ」
こげ茶に生まれ変わった地味目の二十歳がお坊ちゃまにぎゅうっと抱きつく。
「あああああ」
仲島は嬉しいのか、困った顔でニヤニヤと、視線を果林と想の間でいったりきたりさせている。
「かりんさん、いけません」
「はあい」
ニコニコの果林が離れ、仲島はデレデレとし、想はそれを冷めた顔で見つめた。
――楽しそうでいいね、君たちは。

「じゃあ行こうか！　諫山君」
お坊ちゃまの号令で、まずは果林が車に乗り込んでおおはしゃぎをし始めた。
「お椅子がふっかふかーだよ、そーちゃん！　でもでも、ミラーボールがないね」
「ミラーボール？」
「こういう長い車には、ミラーボールがついてるはずなのに」
「はは。そういう改造をしている人もいますよ。でも、少数派でしょうね」
「ワインが冷蔵庫に入ってるんだよね？」
「僕は未成年なので、ワインは積んでいません」

アホ丸出しの果林に対して、仲島は微笑を浮かべて紳士的な対応をしている。その様子に妙に育ちの良さを感じながら、想はぼんやりと窓の外を見つめた。
少し長い立派な車は、狭い路地を通るのに向いていない。運転手はじっと黙ったまま、人通りの多い道を慎重に進んでいる。そして外から車内は見えない故に、周囲を歩く高校生たちはあからさまに長い車に興奮して、指をさして騒いでいた。

やがてリムジンは停車中のランプをチカチカと点滅させ始め、エスポワール東録戸の前に停車した。
「じゃあまたな」
「ぶー。そーちゃんともっと一緒にいたいのにー！」
「バイト頑張れよ」
「うん！　がんばるー！　そーちゃん遊びに着てね。夜にでも。四谷君と来て！」
先程までの不満はどこへやら、激励の言葉に喜ぶと果林はぴょんと車を降りた。ピカピカで平和な笑顔を浮かべて高校生達に両手でブンブン手を振っている姿を閉まるドアがゆっくりと隠していき、

再びリムジンは走り出す。
「四谷君と来て、って？」
そして、当然の質問が仲島の口から飛び出してきた。あのやろう余計な事いいやがって、という気持ちを抑えつつ、少年は答える。
「四谷には兄貴がいるんだよ」
「へえ、……そう、なんだ」
お坊ちゃまは不安そうな顔だ。おそるおそる、親友にこんな質問をしてきた。
「もしかして双子でそっくりだとか、そういうパターンかな？」
「ああ、いや、年はわからないけど、全然似てないぜ」
「そうなんだ」
ほっとしたような表情を浮かべている仲島は、人種が違うとか、弟よりもずっと美形だなんてとんでもない設定があるとは想像もしていないだろう。少し微笑んだ坊ちゃまは急にキリッとした表情を浮かべて、想にこう頼んできた。
「諫山君、お兄さんの件は柿本さんには内密に頼むよ」
「言うわけねえだろ」

――大体、話すのもイヤだし。

「お前アイツのどこがいいの？」
「えっ！　えーっ、どこがって、僕と柿本さんはそんな関係ではないのだよ諫山君！」
「そういうってどういう関係だよ」
「僕と柿本さんは、同好の士なのだ」

――なのだ、ってなんだよ。

焦ったあまり出てきたのであろうおかしな語尾に、少年はぶうっと吹き出す。

「同じ、コント好きの仲間なだけだよ！　貴重なんだよ、同じ笑いのセンスの持ち主というのは」
「わかったよ」
「柿本さんはクラッカアンドサイダーよりも、破壊神ディザイアーが好きらしいんだけどね？」
「知らねえし」
　破壊神ディザイアーは、少しコアなネタがお笑い通に人気の芸歴十二年のトリオ芸人だという説明が、必要ないのに仲島の口から語られた。お笑いが絡むと途端にウザキングに退化してしまうらしいボンボンからの詳細な語りがあまりにもうざったくて、ついつい想はこんな意地悪をしてみたりする。
「二人で一緒にＤＶＤとかみるわけ？　エロい奴だな、お前」
「なななな何を言ってるんだい！　そんなことはしていないっ！　断じてエロくないっ！」
　慌てる坊ちゃまがおかしかったのか、珍しく前の席で権田が笑い出した。
「権田！　何を笑っているんだ！」
「申し訳ございません」
　すぐに笑いをひっこめるあたり、さすがと言うべきだろうか。しかしこのやり取りはおかしかったらしく、車が家に到着し、想が降りる時にこう声をかけてきた。
「諫山様、ナイスツッコミでございました」

――じゃあ坊ちゃまがボケなわけ？

　やれやれと肩をすくめるお客様に権田が微笑む。
　久しぶりの仲島家で少年はおおいに歓迎され、相変わらずの美味しいお料理とお菓子、家庭教師の先生と可愛いメイドさんに満足して、家へと帰った。

０３７　・　カウントダウンの始まり

家の前で車から降りる。少年が笑顔の権田と挨拶を交わすと、平凡な住宅街に似合わないリッチな長いリムジンは去って行った。

寒空の下、身を縮めてマンションのエントランスへと駆ける。家に帰ると、父の姿がもうあった。

いつもより帰宅を早めた理由は、息子が大事な学年末の試験を控えているからだったらしい。勉強ははかどっているのか、とかけられた声に、まあねと返す。

妻を労わる夫、子供のために耐える母、そして、孝行息子。

――なにそれ。

わずか四ヶ月ばかりで大きく変わってしまった諫山家の様相に、自室で一人、想は吹き出した。

初めてのお友達は超ゴージャスでリッチなボンボン、何もしてないのに、大好き大好きと慕ってくる年上のお姉さん。

――物は言いようだな。

部屋の暖房のスイッチを入れて、コートを脱ぐ。頭に浮かぶのは、超幸運の新しい姿だ。自分を幸福にしたいという、地球からの贈り物。

――そうは言ってもなあ。

無欲認定をされた通り、超幸運のやる気に反して少年に欲しいも

のはない。今すぐ暖かい飲み物があれば嬉しいが、わざわざ向かいのアパートに出向いてお願いするほどの願いでもなかった。

「想」

部屋のドアが鳴る。母の声だ。てっきり勝手に開けて入ってくるかと思っていたが、しばらく待ってもその気配はない。

仕方なくドアを開けると、寒い廊下に母が微笑みを浮かべて立っていた。

「これ、コーヒー入れてきたのよ」

「……サンキュー」

「頑張ってね」

複雑な表情を浮かべている息子を残して、母は去って行く。パタパタと足音をさせて遠ざかる後姿を見ながら、想は考えた。

――まさかね。

「超幸運の粋なはからい」と考えるよりも、「最近出来上がってきた良好な親子関係」の副産物と思った方が自然だ。そう結論を出してしまった自分にちょっと顔をしかめると、少年はコーヒーを一口飲んで、小さくため息をついた。

どうして来てくれないの、とまとわりつく果林を適当にあしらい、毎日学校へ通う。時折登校時にそんな邪魔が入る以外には特にアクシデントのない日々を少年は過ごしていった。

快適な三回目の試験勉強生活はあっという間に終わり、試験の結果も上々。学校生活の前半になんとなく漂っていた留年の危機はどこへやらあっさりと立ち去り、呑気な学生達の気分はもう春休みにワープしている。

「諫山君、諫山君の春休みの予定は？　バカンスはどこにするんだい？」

――わかってて言ってるのかもしれないな、こいつは。

ノーマルな日本の高校生は春休みに、バカンスへは出かけない。三クボたちとつるんでいる間に充分わかったであろう事をわざわざ聞いてくるのはもしかして、ツッコミを待っているからなのかもしれない。

「別にどこもいかねえ。お前は？　どこ行っちゃうの？」

「諫山君がパスポートを更新したんだったら、ぜひ一緒に行きたいなあ。ロスあたり、どうだい？」

「パスポートなんか持ってねえよ」

えっ、と驚く顔にフフンと笑う。その笑いを冗談と受け取ったのか、お坊ちゃまは「いやだなあ、諫山君たら」なんて答えている。

「いや、マジで持ってねえし。海外なんか行ったことないぜ」

「一度もないってことかい？」

「一度もないってことだ」

ニヤリと笑ってみせると、仲島はぎこちない笑顔で応えた。どうも、少年のセリフが真実なのかどうか判別がついていないようだ。

――行ったことあるのが普通なのか？

家族旅行というものをしたことはあるが、いずれも国内だった。しかも、随分小さな頃のことだ。もう行くことはないかもしれない。

――まあ、行っても持て余すばっかりだな。

高校生にもなって、お父さんとお母さんと旅行だよ！　ワーイ！なんてことになるわけがない。

試験が終わり、だらだらと弛んでいる空気が満ちた教室。窓の外には春の気配が漂っている。三月も中旬に差し掛かる頃、日差しはだいぶ暖かさを帯びてきていた。

朝は着ていたコートを手に持って自宅へと戻る想の前に、意外な人物が立ちはだかった。

「四谷」

マンションのエントランスの少し手前に、麗しい姿の超幸運が立っている。

「何やってんの？　珍しいな、外にいるの。買い物？」

「諌山　想を待っていた」

「へえ。何か用なわけ？」

「無欲にも程があると思ってな」

小さく開いた唇から出てきたセリフに、少年はただただ困惑した。

「ちょっと意味がわかんねえんだけど」

「私は願いを叶えたい」

――えー？

「話したはずだ、諌山　想。契約は第二段階へと進んだ。私は諌山想を幸せにしたい」

「ちょっと待て。まあ、とりあえず家に入ろうぜ。な？」

青白い手を取り、慌ててエスポワール東録戸へと向かう。鍵がかかっていなかった扉を開けて、妙に真剣な表情の超幸運を中へと押し込んだ。

「どうしたんだよお前は、いきなり」

「諌山　想が願いを言わないので私は困っている」

「……」

それでいきなり、外であんな事を口走っちゃってるのか？　と想は呆れた。呆れてみせたが、超幸運のマジな表情に変化はない。

「何なのお前。本気で言ってんの？」

「私は契約者に真実のみを述べる」

「ああそう」

――やる気出ちゃってんのかな。もしかしたら、かつてないレベルで。

「諫山　想は契約のアップグレードの説明の日以来、私の元へ訪れなかった。このまま待っていても、訪れる気配がない」

「そいつは済まなかったな」

急に浮気相手のような事を言い出す超幸運に、戸惑う。

「そんなに願いを叶えたいとは知らなかった」

「勿論、諫山　想に願いがないのなら仕方のないことだ。しかし……」

「なによ。しかし、何？」

四谷は口をつぐんで黙ってしまった。

――なにこれ。ウザくねえ？

やる気の出し方が間違っているのではないか、と思いつつ、チラリと超幸運の様子を窺う。顔はいつも通りの無表情だが、内心はたぎっているのかもしれない。契約者をスーパーハッピーにしてやろう。そして世界は、幸福に包まれる――とか、なんとか。

――いらねー！

「お前さ、なんか矛盾してんじゃねえの？　今、お前の事ちょっと

めんどくさいって思ってるぜ、俺は。これが幸せに繋がると思うか？」

「思わない。諫山　想、すまなかった。今後は控えることにする」

殊勝な物言いだが、内心をぶちまけてしまってはあまり意味がないのではないかと少年は考えた。そして、何か簡単なお願いがないかと心の中を探って、とうとう一つ、長持ちしそうなアイディアを発見してしまった。

「俺の母親が安産になるとかでどうよ。気分も良くなって、特にピンチもなく母子共に健康ってやつ」

「……了承した。諫山　想、お前の願いを叶えよう。この願いは……」

「どうした？」

「兄弟の誕生日はお楽しみで伏せておいたほうがいいだろうか」

「じゃあそれで」

「了承した」

なんとなく不満げなオーラを感じて、超幸運の顔に視線を動かす。無表情。いつもどおり、平常運転の様子だ。

「夏くらいだよな。それまで、並行して願いは叶えられない。そうだろ？」

「その通りだ。同時進行はできない」

「なんだよ。なんか妙に悔しそうじゃねえ？」

「そんなことはない」

――俺が来ないとヒマだとか？

以前は高校生として学校に潜り込んでいたので、一応日々の日課というものがあったはずだ。しかし今は日中になにをしているのか。想像もつかない。

「お前いつも何してんの？　ずっと家にいるわけ？」
「今現在はそうだ。諫山　想の願いをいつでも叶えられるように、最速で動ける準備をしている」
「これからちょっとヒマか」
「そんなことはない。もしも新たな質問ができたり、願いの変更があればいつでも私は聞き入れなくてはならない。また、用がなくともここを訪れ、話をしても問題ない」

――変える予定はないわな。

ただのさびしん坊のようになってしまった黒の超幸運の姿に、想は少しだけ笑った。
「すげえな、第二段階って。どんだけやる気出るんだよ」
「第二段階に進んだ人間はまだほんの数人だ。特にここ最近ではいなかった」
「ちなみに通常の状態とだとどの程度差がでるわけ？」
「……」

――内緒なのか？

「知りたいなー、心から、知りたいなあ」
「最初に話した、これはできないという縛りがなくなる」
「あん？」
あっさりと口を割った四谷に、想は眉をひそめた。しかも、「縛りがなくなる」。
「空を飛びたい、って言ったら叶えちゃうわけ？」
「そうだ」
「お前……、それはないだろう。いくらなんでも」
「もちろん、必要性がない場合には叶えられない。それが諫山　想の幸福に繋がる場合のみ、叶えられる」

「じゃあアレは？　人の心の操作ってやつは？」
「それも可能になった」

あまりにもイージーに答えられて、想は思わず目を閉じた。眉間にぐっと力を入れて、あまりにも大きな変化への戸惑いを解消しようと努力してみる。

「諫山　想は善良な人間なので、例えば胸の大きな女性が急に服を脱いで誘惑してくる、などと言い出さないと信じているからこその限定解除だ」
「バカっ！　お前、バカっ！　こら！」

――ふざけやがって！

ぎろりと睨むと、超幸運は微笑んでいる。
「お前もしかして俺をからかったのか？」
「私はそんなことはしない。ただ、真実を述べるのみ」

――本当かよ？

しかし善良で無欲な少年はやはり、空を飛んでみたいとか、セクシーな美女とイチャイチャしたいという願いを口にすることなく、ちょっとだけ怒った顔でまっすぐ家へと帰った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7798s/

SUPER LUCKY # 4

2011年11月24日02時47分発行